

河内長野市遺跡調査会報Ⅷ

天野山金剛寺遺跡

1994年3月

河内長野市遺跡調査会



金剛寺境内図 (天野山金剛寺蔵)



第1調査区下層S X 1 蓋石除去状況 (南から)



第1調査区下層SY1・SY2（東から）



第1調査区上層SB2（北から）



出土した青花片

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう南河内の交通の要衝として発展してきた町です。

このため市内には数多くの文化財が残されています。

このような河内長野市も大阪市内への通勤圏に位置しているため住宅都市として近年、開発の波がおしよせてきています。

開発がもたらす文化財や自然に対する影響も大きいものがあります。特に、埋蔵文化財は開発と直接に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージを現在の市民、更には未来の市民へ伝えてゆかなければなりません。

本書は発掘調査の成果を取録しています。先人達のメッセージの一部でも理解するための資料として活用していただければ幸いです。

これらの発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成6年3月

河内長野市遺跡調査会
理事長 中尾 謙二

例 言

1. 本報告書は平成4年度に河内長野市遺跡調査会が大阪府から委託を受けた天野山金剛寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は河内長野市教育委員会社会教育課文化係主査尾谷雅彦と鳥羽正剛を担当者として実施した。
3. 調査にかかる事務は調査会事務局長松垣孝康が主担した。
4. 本書の執筆は第1章から第3章までを鳥羽が行い、第4章を夏原信義（株式会社夏原技研）、第2章の第4節と第5章を尾谷が行った。
5. 編集は尾谷と鳥羽が行い、東田幸子がこれを補佐した。
6. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。
池田武・嘉悦真紀子・喜多順子・久保八重子・桑原香月・杉本祐子・鈴木（明地）奈緒美・須藤光代・田川富子・中尾智行・中野雅美・中村嘉彦・林和宏・東原美佳・福島里浦・橋本裕子・松尾和代・牟田口京子
7. 遺物及び遺構の一部の写真は中西和子が撮影した。
8. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の協力、指導を得た。記して感謝する。
天野山金剛寺・大阪府富田林上木事務所・尾上実・櫻井敏雄・嶋谷和彦・野田芳正・橋本久和・森島康雄・森村健一
9. 本調査の記録はスライドフィルム等でも保管しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡 例

1. 本報告書に記載されている標高はTPを基準としている。
2. 上色は新版標準土色帖による。
3. 平面測量基準は国家座標第VI系による5mメッシュを基準に実施したものである。
4. 図中の北は座標北である。
5. 本書の遺構名は下記の略記号をもちいた。

SA…柵列	SB…建物	SD…溝	SE…井戸
SK…土坑	SL…埋塞	SN…埋桶	SW…石列
SX…土釜埋納遺構	SY…窯状遺構	P…ピット	NV…自然流路
6. 文中の瓦器塚の型式分類は尾上実氏の和泉型瓦器塚の編年に基づくものである。
7. 文中の土釜の型式分類は菅原正明氏の土釜の編年に基づくものである。
8. 文中の窯状遺構の型式分類は大澤正己氏の木炭窯の分類に基づくものである。
9. 文中の石製鍋の型式分類は河内一浩氏の石鍋の編年に基づくものである。
10. 文中の土師質皿の型式分類は鋤納俊大氏の分類に基づくものである。
11. 遺構実測図の縮尺は、1/10・1/20・1/30・1/40・1/60・1/80・1/100とした。
12. 遺物実測図の縮尺は、土器1/4・1/8、瓦1/4、鉄製品1/3、石製品1/4、古銭原寸とした。

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

巻頭図版目次

挿図目次

表目次

図版目次

付図目次

第1章 はじめに	1
第1節 位置と環境	1
第2節 調査に至る経過	1
第3節 遺跡の概要	5
1. 1938年度の発掘調査	5
2. 1974年度の発掘調査	6
3. 1988年度（KGT88-1）の発掘調査	7
4. 1989年度（KGT89-1）の発掘調査	7
5. 1991年度（KGT91-1）の発掘調査	8
6. 1992年度（KGT92-1）の発掘調査	9
7. 1992年度（KGT92-2）の発掘調査	9
8. 1992年度（KGT92-3）の発掘調査	9
第2章 調査の結果	11
第1節 第1調査区	11
1. 中世	11
2. 近世	29
第2節 第2調査区	44
1. 中世	45
2. 近世	47
第3節 第3調査区	48
1. 中世	49
第4節 第4調査区	51
1. 中世	51

第5節	第5調査区	71
	1. 中世	71
	2. 近世	71
第6節	第6調査区	73
	1. 中世	73
第3章	まとめ	75
第1節	調査成果	75
	1. 天野山金剛寺遺跡における塔頭の盛衰	75
	2. 塔頭の規模	75
	3. 焼土層の年代	75
	4. 土釜埋納遺構の盛行時期	76
第4章	天野山金剛寺遺跡の考古地磁気年代推定	77
第1節	考古地磁気年代推定の基礎	77
第2節	試料の採集と測定方法	79
	1. 試料採取方法	79
	2. 試料整形方法	80
	3. 熱残留磁気測定とデータ整理	80
第3節	熱残留磁気測定結果と推定年代	81
第5章	天野山金剛寺出土の土釜埋納土器について	85
第1節	はじめに	85
第2節	土釜埋納土器の出土例	85
	1. 1988年度主要伽藍北側坊跡群出土例	85
	2. 1991年度楼門前坊跡（西除川対岸）出土例	93
	3. 1992年度主要伽藍南側坊跡群出土例	93
第3節	土釜埋納瓦質塊・皿の変遷	98
第4節	暦年代について	101
第5節	まとめ	102

卷頭図版目次

- 巻頭図版 1 金剛寺境内図(天野山金剛寺蔵)、第1調査区下層S X 1 蓋石除去状況(南から)
巻頭図版 2 第1調査区下層S Y 1・S Y 2(東から)、第1調査区上層S B 2(北から)
巻頭図版 3 出土した青花片

挿図目次

第 1 図	河内長野市遺跡分布図(1/50000).....	2
第 2 図	天野山金剛寺遺跡発掘調査地位置図(1/5000).....	4
第 3 図	多宝塔平面図.....	5
第 4 図	多宝塔基壇内鎮壇遺構実測図.....	5
第 5 図	1974年度調査遺構配置図.....	6
第 6 図	K G T 88-1 遺構配置図.....	7
第 7 図	K G T 89-1 遺構配置図.....	8
第 8 図	K G T 91-1・92-2 遺構配置図.....	8
第 9 図	K G T 92-1 遺構配置図.....	9
第 10 図	K G T 92-3 調査区位置図(1/2500).....	10
第 11 図	第1調査区北壁・東壁土層断面実測図(1/80).....	12
第 12 図	S B 1 遺構実測図(1/40).....	13
第 13 図	S D 2 出土遺物実測図.....	14
第 14 図	S D 4 出土遺物実測図.....	15
第 15 図	S D 5 出土遺物実測図.....	16
第 16 図	S D 7 出土遺物実測図.....	16
第 17 図	S K 1 出土遺物実測図.....	18
第 18 図	S K 2 出土遺物実測図.....	18
第 19 図	S K 3 出土遺物実測図.....	18
第 20 図	S K 4 出土遺物実測図.....	19
第 21 図	S N 1 遺構実測図(1/30).....	19
第 22 図	S N 1 出土遺物実測図.....	19
第 23 図	S W 3 出土遺物実測図.....	20
第 24 図	S W 4 遺構実測図(1/40).....	21
第 25 図	S X 1 出土遺物実測図.....	22

第 26 図	S X 1 遺構実測図 (1/20)	23
第 27 図	S X 2 遺構実測図 (1/20)	23
第 28 図	S X 2 出土遺物実測図	24
第 29 図	S Y 1 遺構実測図 (1/20)	24
第 30 図	S Y 1 出土遺物実測図	26
第 31 図	S Y 2 出土遺物実測図	26
第 32 図	S Y 2 遺構実測図 (1/20)	27
第 33 図	P 1 出土遺物実測図	27
第 34 図	P 2 出土遺物実測図	28
第 35 図	第 1 調査区 N V 1 南壁土層断面実測図 (1/60)	28
第 36 図	第 1 調査区 N V 1 (第 41 層) 出土遺物実測図	29
第 37 図	S B 2 遺構実測図 (1/60)	30
第 38 図	S B 2 出土遺物実測図(1)	31
第 39 図	S B 2 出土遺物実測図(2)	32
第 40 図	S D 15 遺構実測図 (1/60)	33
第 41 図	S E 10 遺構実測図 (1/30)	34
第 42 図	S E 11 出土遺物実測図	35
第 43 図	S K 14 出土遺物実測図	35
第 44 図	S L 7 遺構実測図 (1/20)	36
第 45 図	S L 7 出土遺物実測図	36
第 46 図	S L 8 遺構実測図 (1/20)	37
第 47 図	S L 8 出土遺物実測図	37
第 48 図	S W 7 出土遺物実測図	37
第 49 図	第 1 調査区 包含層出土遺物実測図(1)	39
第 50 図	第 1 調査区 包含層出土遺物実測図(2)	40
第 51 図	第 1 調査区 包含層出土遺物実測図(3)	41
第 52 図	第 1 調査区 包含層出土遺物実測図(4)	42
第 53 図	第 1 調査区 包含層出土遺物実測図(5)	43
第 54 図	第 2 調査区 北壁土層断面実測図 (1/40)	44
第 55 図	第 2 調査区 N V 1 上層断面実測図 (1/40)	45
第 56 図	第 2 調査区 N V 1 (第 2 層) 出土遺物実測図	45
第 57 図	第 2 調査区 N V 1 (第 6 層) 出土遺物実測図	45
第 58 図	第 2 調査区 包含層出土遺物実測図	46
第 59 図	第 3 調査区 東壁土層断面実測図 (1/80)	48

第 60 図	S N 2 遺構実測図 (1/30)	49
第 61 図	第 3 調査区 NV 1 出土遺物実測図	50
第 62 図	S D 10 出土遺物実測図	51
第 63 図	S D 11 出土遺物実測図	51
第 64 図	第 4 調査区北壁土層断面実測図 (1/40)	52
第 65 図	S D 12 出土遺物実測図	53
第 66 図	S D 13 出土遺物実測図	53
第 67 図	S D 14 出土遺物実測図	54
第 68 図	S E 3 遺構実測図 (1/30)	54
第 69 図	S E 4 遺構実測図 (1/30)	55
第 70 図	S E 4 出土遺物実測図	56
第 71 図	S E 6 出土遺物実測図	57
第 72 図	S K 5・S K 6・S K 7 出土遺物実測図	58
第 73 図	S K 8 遺構実測図 (1/30)	58
第 74 図	S K 9 遺構実測図 (1/30)	59
第 75 図	S K 8・S K 9・S K 10・S K 12 出土遺物実測図	59
第 76 図	S K 13・S L 6 遺構実測図 (1/20)	60
第 77 図	S L 1 遺構及び出土遺物実測図 (1/20)	60
第 78 図	S L 2 遺構及び出土遺物実測図 (1/20)	61
第 79 図	S L 3 遺構及び出土遺物実測図 (1/20)	61
第 80 図	S L 4 遺構及び出土遺物実測図 (1/20)	62
第 81 図	S L 5 遺構及び出土遺物実測図 (1/20)	62
第 82 図	S L 6 遺構及び出土遺物実測図 (1/20)	63
第 83 図	S W 6 出土遺物実測図	63
第 84 図	S X 3 遺構実測図 (1/10)	64
第 85 図	S X 3 出土遺物実測図(1)	64
第 86 図	S X 3 出土遺物実測図(2)	65
第 87 図	第 4 調査区包含層出土遺物実測図(1)	66
第 88 図	第 4 調査区包含層出土遺物実測図(2)	67
第 89 図	第 4 調査区包含層出土遺物実測図(3)	68
第 90 図	第 4 調査区包含層出土遺物実測図(4)	69
第 91 図	第 5 調査区包含層出土遺物実測図	71
第 92 図	第 5 調査区南壁・西壁土層断面実測図 (1/80)	72
第 93 図	第 6 調査区南壁・西壁土層断面実測図 (1/60)	73

第 94 図	第 6 調査区 NV 1 出土遺物実測図	73
第 95 図	第 6 調査区包含層出土遺物実測図	74
第 96 図	広岡 (1977) による地磁気永年変化曲線	78
第 97 図	Shibuya (1980) による地磁気永年変化曲線	78
第 98 図	各試料の残留磁化方向の等面積投影図	82
第 99 図	Shibuya 曲線にプロットした平均磁化方向 (黒丸)	83
第 100 図	88-S X 7 出土遺物実測図	87
第 101 図	88-S X 3-③ 出土遺物実測図	87
第 102 図	88-S X 3-② 出土遺物実測図(1)	88
第 103 図	88-S X 3-② 出土遺物実測図(2)	89
第 104 図	88-S X 3-① 出土遺物実測図	89
第 105 図	88-S X 4 出土遺物実測図	91
第 106 図	88-S X 6 出土遺物実測図(1)	92
第 107 図	88-S X 6 出土遺物実測図(2)	93
第 108 図	91-S C 4 出土遺物実測図	94
第 109 図	92-S X 1 出土遺物実測図	95
第 110 図	92-S X 2 出土遺物実測図	96
第 111 図	92-S X 3 出土遺物実測図(1)	97
第 112 図	92-S X 3 出土遺物実測図(2)	98
第 113 図	瓦質皿分類図 (1/4)	99
第 114 図	瓦器境及び瓦質皿法量変化	100
第 115 図	瓦器境及び瓦質皿編年試案	102

表 目 次

第 1 表	河内長野市遺跡地名表	3
第 2 表	熱残留磁気測定結果	82
第 3 表	考古地磁気測定結果	82
第 4 表	考古学磁気年代推定結果	83

図 版 目 次

図版 1	遺構 第 1 調査区 (下層)	調査区北側全景 (北から)、調査区南側全景 (北から)
図版 2	遺構 第 1 調査区 (下層)	S B 1 遠景 (南から)、S N 1 (西から)

- 図版3 遺構 第1調査区(下層) SW4(東から)、SX1(西から)
- 図版4 遺構 第1調査区(下層) SX1蓋石除去状況(東から)、SX1上釜除去状況(北から)
- 図版5 遺構 第1調査区(下層) SX2(南から)、SY1・SY2(東から)
- 図版6 遺構 第1調査区(下層) SY1煙道部(南から)、SY2煙道部(南から)
- 図版7 遺構 第1調査区(上層) 調査区北側全景(北から)、調査区南側全景(北から)
- 図版8 遺構 第1調査区(上層・下層) 下層遺構北側及び上層遺構南側(南東から)、SB2遠景(南東から)
- 図版9 遺構 第1調査区(上層) SB2(北から)、SB2(東から)
- 図版10 遺構 第1調査区(上層) SB2(南西から)、SB2(南から)
- 図版11 遺構 第1調査区(上層) SD15(西から)、SE10断ち割り状況(西から)
- 図版12 遺構 第1調査区(上層) SL7(東から)、SW7(東から)
- 図版13 遺構 第2調査区 調査区全景(西から)、調査区全景(東から)
- 図版14 遺構 第3調査区 調査区全景(東から)、調査区全景(北から)
- 図版15 遺構 第3調査区 SN2(北から)、NV1内土釜出土状況(東から)
- 図版16 遺構 第4調査区 調査区全景(北西から)、調査区全景(南東から)
- 図版17 遺構 第4調査区 SE3断ち割り状況(北から)、SE4断ち割り状況(西から)
- 図版18 遺構 第4調査区 SE5・SE6(東から)、SL2(北から)
- 図版19 遺構 第4・第5調査区 SX3検出状況(西から)、第5調査区全景(北から)
- 図版20 遺構 第5調査区 調査区全景(南から)、SY3(南から)
- 図版21 遺構 第6調査区 調査区全景(南西から)、調査区全景(北から)
- 図版22 遺物 第1調査区 SD2(1~3・5~8・10)、SD4(12)、SD5(13・14)、SD7(15~19)
- 図版23 遺物 第1調査区 SK1(20~23)、SK2(24)、SK3(25・27)、SK4(28)、SN1(29~32)
- 図版24 遺物 第1調査区 SX1(35~57)、SX2(58~80)
- 図版25 遺物 第1調査区 SW3(33・34)、SY1(81)、SY2(82~84)、P1(85)、P2(86)、NV1第41層(87)
- 図版26 遺物 第1調査区 SB2(88~94・96~100)
- 図版27 遺物 第1調査区 SB2(101~110・113~116)、SE11(117)
- 図版28 遺物 第1調査区 SK14(118~120)、SL7(121~123)、SL8(124・125)、SW7(126・127)、包含層(128~131・140)
- 図版29 遺物 第1調査区 包含層(132~139・141~157・159~162)
- 図版30 遺物 第1・第2調査区 第1調査区包含層(158・163~171・173~177・179)、第2

調査区包含層 (208)

- 図版31 遺物 第2調査区 NV1第2層 (180~182)、NV1第6層 (183~195)、包含層 (205~207)
- 図版32 遺物 第2・第3調査区 第2調査区包含層 (198~203・209~211)、第3調査区NV1 (212~221)
- 図版33 遺物 第4調査区 SD10 (222・223)、SD11 (224~226)、SD12 (227)、SD13 (228~232)、SD14 (233)、SE4 (234・235)
- 図版34 遺物 第4調査区 SE4 (236~240)、SE6 (241~244)、SK5 (245・246・248)、SK6 (247)、SK7 (249)、SK8 (253)、SK9 (252)、SK10(250)、SK12(254)
- 図版35 遺物 第4調査区 SL1 (255~257)、SL2 (258)、SL3 (259)、SL4 (260~262)、SL5 (263・265)
- 図版36 遺物 第4調査区 SL6 (266)、SW6 (267~270)、SX3 (271~336)
- 図版37 遺物 第4調査区 包含層 (337~352・354・356~358)
- 図版38 遺物 第4調査区 包含層 (359~363・365~368・370~373・375~377・383・387~391)
- 図版39 遺物 第4・第5・第6調査区 第4調査区包含層 (378~386・392~394)、第5調査区包含層 (395)、第6調査区包含層 (397)

付図目次

- 付図1 天野山金剛寺遺跡遺構配置図 (1/100) 第1調査区 (上層・下層)・第2調査区
- 付図2 天野山金剛寺遺跡遺構配置図 (1/100) 第3調査区
- 付図3 天野山金剛寺遺跡遺構配置図 (1/100) 第4調査区
- 付図4 天野山金剛寺遺跡遺構配置図 (1/100) 第5調査区・第6調査区

第1章 はじめに

第1節 位置と環境

天野山金剛寺遺跡は和泉山系岩湧山（TP+897.7m）より北方に伸びる赤峰丘陵と和泉丘陵に分岐する谷状地に位置する。行政区では和泉市との市境に近い河内長野市天野町に位置する遺跡である。遺跡の中心は、国指定史跡「金剛寺境内」となっており、さらに周囲の谷を含めて埋蔵文化財包蔵地である天野山金剛寺遺跡に指定されている。現在国道170号線が境内を北から南東にかけて通っており、この東側には天野山金剛寺の山号の由来である天野山が位置している。今回の発掘調査地は境内の南東の谷地で、天野山の南西に位置する。谷間には岩湧山系を水源とする西除川が北東方向に流れており、調査で検出した自然流路であるNV1は西除川の旧流路の一部と考えられ、全調査区内で検出されている。

境内は古代より和泉方面に向かう天野街道が通り、交通の要衝に位置している。周辺の寺院遺跡としては、南東0.8kmには日野観音寺遺跡があり、東側2.4kmには鎮壇具が出土した惣持寺跡が位置する。集落遺跡では北東1.6kmに旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である高向遺跡がある。また、中世城郭では、東側1.0kmに日の谷城跡、1.5kmに汐の山城跡、1.8kmに峰山城跡、南側1.4kmに仁王山城跡、1.9kmに稲荷山城跡、2.2kmに因見城、2.4kmに旗蔵城跡がある。

第2節 調査に至る経過

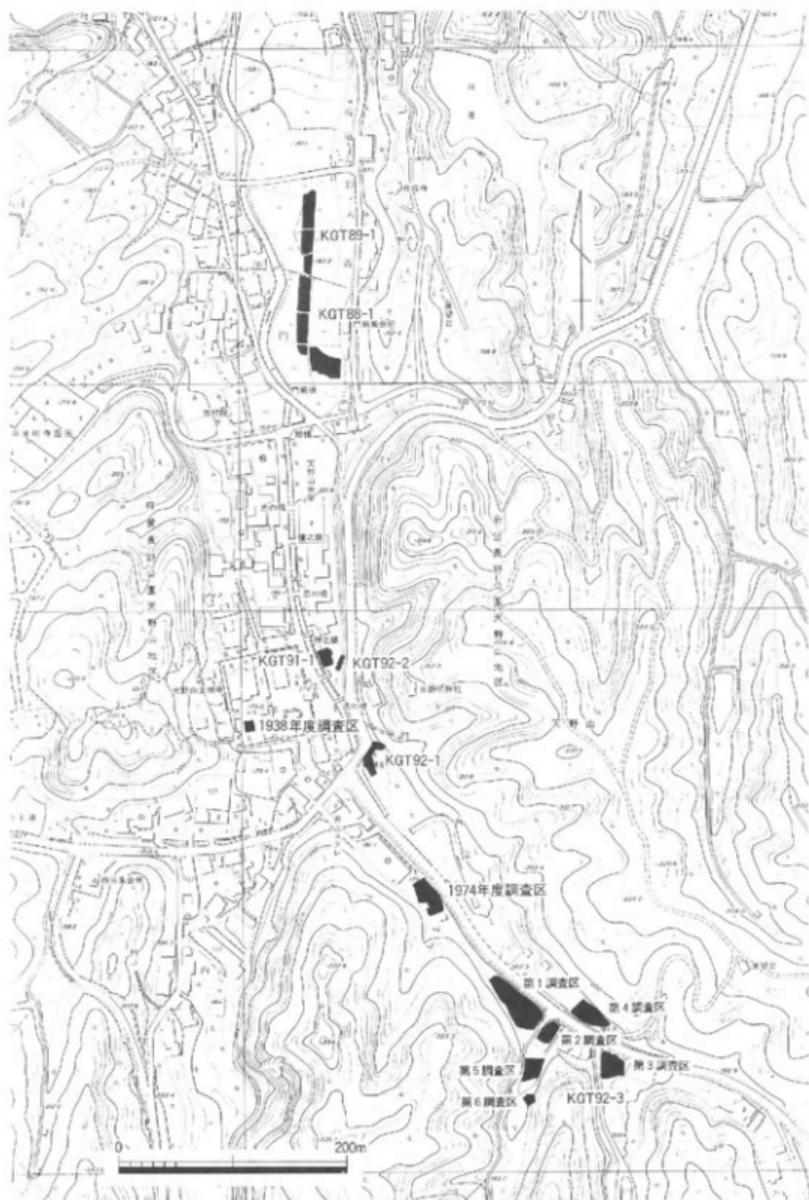
当調査は、原因者である大阪府富田林土木事務所による関西新空港（平成6年9月開港予定）への幹線道路の一つである国道170号線（外環状線）の新設工事に伴い実施した。工事予定地は埋蔵文化財包蔵地である天野山金剛寺遺跡内に位置する為、大阪府教育委員会・河内長野市教育委員会・大阪府の事前協議の結果、工事施工箇所で見況地形の切土造成を計画している部分について、工事着手前に発掘調査を実施し記録保存するとの結論に至った。これを受けて平成3年12月17日に原因者から文化財保護法第57条3の通知が提出された。調査については市教育委員会の指導の下、河内長野市遺跡調査会が実施することになり、大阪府と同調査会が平成4年10月26日に委託契約を締結した。外業調査（発掘調査）を平成4年11月17日から平成5年3月31日、内業整理を平成5年4月1日から平成6年3月31日にかけて行い、委託業務にかかるすべての調査を完了した。



第1図 河内長野市遺跡分布図 (1/50000)

番号	文化財名称	種類	時代	番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町	50	高向神社遺跡	社寺	中世～
2	河合寺	社寺		51	青が原神社遺跡	社寺	
3	観心寺	社寺	平安～	52	膳所藩陣屋跡	城館	江戸
4	大師山古墳	古墳	古墳前	53	双子塚古墳伝承地	古墳	古墳
5	大師山南古墳	古墳	古墳後	54	菱子尻遺跡	散布地	縄文・中世
6	大師山遺跡	集落	弥生後	55	河合寺城	城館	
7	興禪寺	社寺		56	三日市遺跡	集落	旧石～近世
8	烏帽子形八幡神社	社寺	室町	57	日の谷城	城館	室町
9	塚穴古墳	古墳	古墳後	58	高木遺跡	散布地	縄文
10	長池窯跡群	生産	平安～近世	59	汐の山城	城館	中世
11	小山田1号墳	墳墓	奈良	60	峰山城	城館	中世
12	小山田2号墳	墳墓	奈良	61	稻荷山城	城館	中世
13	延命寺	社寺		62	国見城	城館	中世
14	金剛寺	社寺	平安～	63	旗藏城	城館	中世
15	日野観音寺遺跡	社寺	中世	64	権現城	城館	中世
16	地藏寺	社寺		65	天神社遺跡	社寺	
17	岩湧寺	社寺	平安～	66	葛城第15経塚	経塚	
18	五の木古墳	古墳	古墳後	69	石込城	城館	中世
19	高向遺跡	集落	旧石・中世	70	左近城	城館	中世
20	烏帽子形城	城館	中世～近世	72	葛城第16経塚	経塚	
21	喜多町遺跡	集落	縄文～中世	82	千代田神社遺跡	社寺	
22	烏帽子形山古墳	古墳	古墳後	83	向野遺跡	集落	縄文～室町
23	末広窯跡	生産		84	古野町遺跡	散布地	中世
24	塩谷遺跡	散布地	縄文～中世	85	上原北遺跡	散布地	
25	渡谷八幡神社	社寺		86	大日寺遺跡	社寺	中世
27	蟹江浦北遺跡	散布地	中世	87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世	88	小坂遺跡	集落	縄文～奈良
29	千早口駅南遺跡	散布地	中世	89	加塩遺跡	集落	古墳後
30	岩瀬薬師寺	墳墓	中世～近世	90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
31	清水遺跡	散布地	中世	91	ジョウノマエ遺跡	城館	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳		92	仁主山城	城館	中世
33	堂村地藏堂跡	社寺	近世	93	岩立城	城館	中世
34	滝畑埋墓	墳墓	近世	94	タコラ城	城館	中世
36	東の村観音堂跡	社寺	近世	95	上原近世瓦窯	生産	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世	96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世	97	上田町窯跡	生産	近世
40	宮ノド内墓	墳墓	近世	98	尾崎北遺跡	散布地	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳後	99	西之山町遺跡	集落	中世
42	宮山遺跡	散布地	縄文～中世	103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
43	本多藩陣屋跡	城館	江戸	104	小野塚	墳墓	
		散布地	飛鳥～奈良	105	葛城第17経塚	経塚	
44	上原町窯地	墳墓		106	薬師堂跡	社寺	中世～
45	惣持寺跡	社寺	鎌倉	107	野作遺跡	集落	中世
46	栗山遺跡	経塚		108	寺元遺跡	集落社寺	奈良・中世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	縄文	110	法師塚古墳跡	古墳	
48	上原遺跡	散布地	中世	111	山上漢山古墳跡	古墳	
49	住吉神社遺跡	社寺		112	西浦遺跡	集落	古墳・中世

第1表 河内長野市遺跡地名表（欠番は地図範囲外）



第2図 天野山金剛寺遺跡発掘調査地位図 (1/5000)

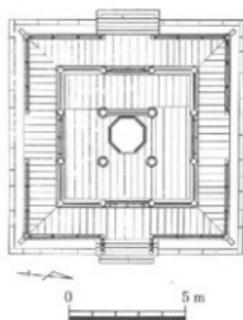
第3節 遺跡の概要

1. 1938年度の発掘調査 (第3図・4図)

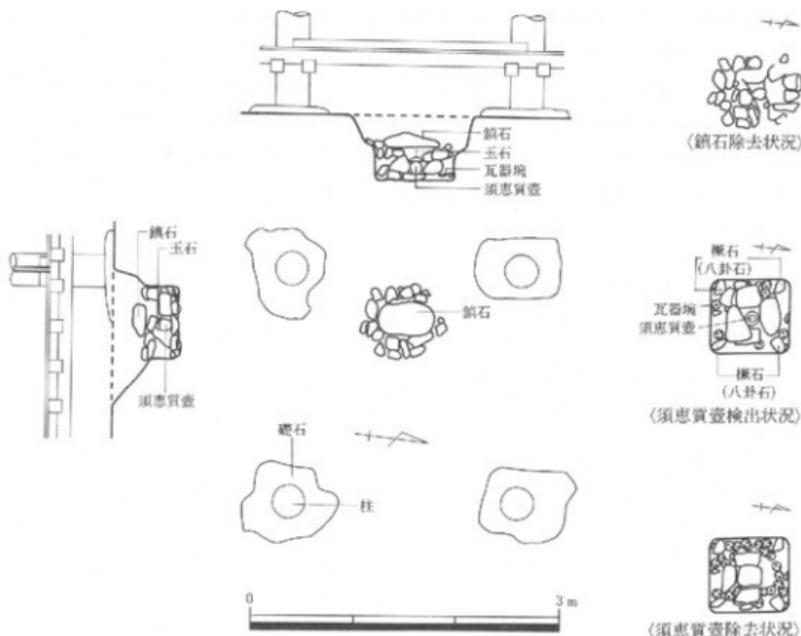
天野山金剛寺遺跡における最初の発掘調査は、昭和13年(1938)に実施された重要文化財多宝塔の解体修理中に基壇中より発見された鎮壇具埋納遺構に対するものである。

遺構は方形土坑内にはまず玉石に圍繞された砂岩製荒砥転用の扁平な鎮石が置かれ、これには「宝鏡印陀羅尼経」が表裏にわたって3回梵書されてあった。次にこれを除去すると、坑のほぼ中央に玉石を半分に割ったものを蓋として使用した須恵質壺が検出され、壺の内部からは宝塔形を呈した金銅製宝瓶、白磁の小瓶、梵書の小碟18個が検出された。

白磁の小瓶は宝塔で蓋をするようにして壺の底に置かれてあり、内部には納骨が行われていたらしい。また宝瓶の内部から



第3図 多宝塔平面図



第4図 多宝塔基壇内鎮壇遺構実測図

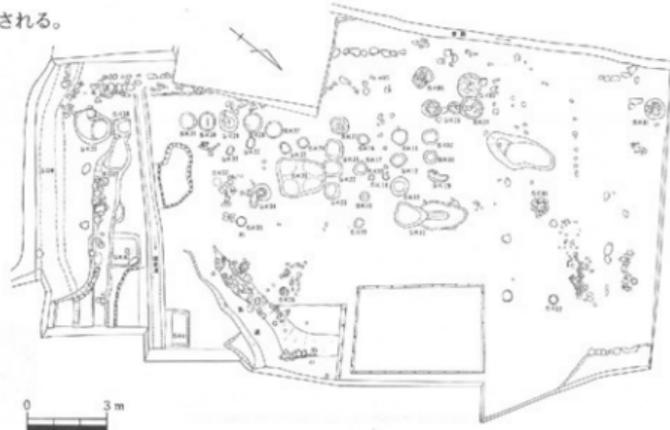
は、五宝・五香と墨書を施した紙片、金薄板1枚、真珠?1粒、砂泥水少量とが検出された。須恵質壺の周囲には石がしっかりと詰められており、中でも坑の四辺には長形の石(四楯石)を立て、その内の1石の内側には墨書で楯の図が描かれていた。これについて木下密運氏は当初他の3石にも同様に楯が描かれていたと推測されている(註1)。さらにこの四石の背後と、坑の四辺の中央に立てられた石の計8カ所には各方位を配する八卦が墨書により記されていた。また、白磁壺の周囲にも数個の石があり、これらを除き去した坑の底部には土師質皿6枚と瓦器塊19枚(Ⅲ-2~3)が検出された(註2)。

現在、多宝塔の創建年代を直接知る文献はなく、先学の研究により治承2年(1178)頃に建立されたというのが定説となっているが、白磁の小瓶は再埋納で建暦元年(1211)に崩じた「八条女院(鳥羽上皇の皇女障子内親王。1137-1211)」の分骨の可能性が高いという見方もあり、鎮壇具埋納遺構の出土品が全て当初のものとは断定できない。このことを解明するには出土した瓦器塊の絶対年代が治承2年もしくは建暦元年のいずれであるのかという検討が必要である。

2. 1974年度の発掘調査(第5図)

1938年の発掘調査以後、伽藍内における発掘調査は実施されていないが、1974年(昭和49)に金剛寺の南側に位置する既存の道路が滝畑ダム建設に伴い拡張されることとなり、市教育委員会を主体とする金剛寺坊跡調査会により発掘調査が実施された。

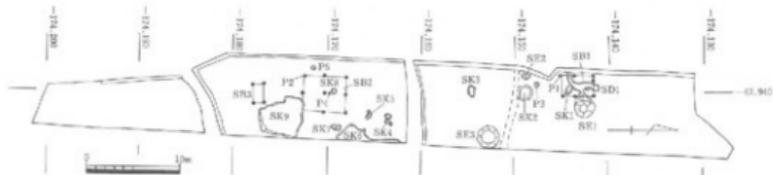
調査では、灰や焼土の入った土壌や蔵骨器と思われる壺や甕が規則正しく配列された遺構が検出され、この地域が墓地跡であることが判明した。また、トレンチ調査により遺構面下層に下層遺構や焼土層の存在を確認しており、おそらく、墓地に変わる前は「金剛寺境内図(金剛寺蔵、製作年代不明)」に描かれているような坊舎が営まれていたが、火災などを受けて焼失したものと推測される。



第5図 1974年度調査区遺構配置図

具埋納遺構から出土した瓦器碗と同型式である。この土坑から出土した追納の蔵骨器の年代とも関係し、同型式の暦年代を考える重要な資料である。

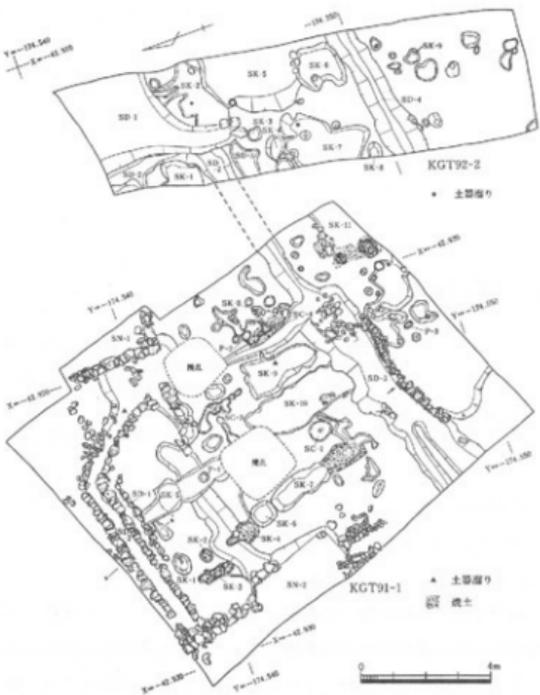
この調査は、金剛寺の再建当時から鎌倉時代初めの寺域の様相を知る上で重要な遺構、遺物が出土した。



第7図 KGT89-1遺構配置図

5. 1991年度（KGT91-1）の発掘調査（第8図）

1991年度には河内長野市によるテクルート整備事業に伴う公衆便所建設地について発掘調査を実施した。調査地は楼門の東側を流れる西除川の対岸で、天野山の西側に位置する。調査では調査区のほぼ全域で火災によるものとみられる焼土層を検出し、この焼土層と焼土層を除去した直下から14世紀を中心とした遺物が出土し、区画のためとみられる溝、炉跡、土釜埋納遺構が検出された。これらの遺構は多数の炉跡の配置から釜屋のような施設と考えている。また調査で検出した焼土層は包含する遺物から14世紀代の火災によるものとみられ、金剛寺に伝わる古文書などから1337年（延元2）か1360年（正平15）のいずれかによるものと考えられる。



第8図 KGT91-1・92-2遺構配置図

6. 1992年度（KGT92-1）の発掘調査（第9図）

1992年には大阪府富田林土木事務所による国道170号線の歩道設置事業に伴い、金剛寺境内の南側に位置する大阪府指定文化財の南大門の南側を流れる西除川の対岸を発掘調査した。調査では近世を中心とした柱穴状の遺構を検出したが調査区が狭小であるため、全容は確認できなかった。これらの遺構の検出から建物が存在する可能性があると思われる。また包含層からは和同開珎の銅銭が出土した。

金剛寺の創建は奈良時代に聖武天皇の勅願により行基が行ったと伝えられるが史実か否かを知る術はない。境内における既往の調査においては奈良時代の遺構の検出例はないが、和同開珎の銅銭を検出したことから、史実として確認されている寺院の前身として奈良時代に何らかの営みが存在したと考えられる。この調査区の位置する西除川東岸には金剛寺の山号の由来となっている天野山があり、山頂近くの西側斜面には丹生明神・高野明神本殿と水分明神社本殿が承安二年（1172）に阿観上人によって勧請されている。金剛寺は真言宗の寺院であり高野山開創に深く関わりのあるこれらの両神社の祭神は真言宗寺院創建には重要視すべき神々である。このことから考えても伽藍配置外ではあるが、天野山を含めた西除川の東岸には、今後勧請以前の奈良時代の遺構、遺物が検出される可能性がある。



第9図 KGT92-1遺構配置図

7. 1992年度（KGT92-2）の発掘調査（第8図）

KGT92-1と同様に同土木事務所による国道170号線の歩道設置事業に伴い、KGT91-1の東側の隣接地において発掘調査を実施した。KGT91-1の調査において調査地に連続すると考えられる溝（SD-3）を確認しており、遺構の存在は調査前より明らかであった。KGT91-1では釜屋の敷地を区画すると考えられるSD-3に連続するSD-2を検出し、検出された殆どの遺構が釜屋の一部を構成する遺構との結論を得た。

8. 1992年度（KGT92-3）の発掘調査（第10図）

本報告のKGT92-3の調査地に寺院関連の小字名は存在しないが、「金剛寺境内内図」や、1974年に実施した調査結果から遺構の存在は明らかであった。

調査は第1～第6調査区の計6地点で実施した。その結果、第1調査区では遺構面を2層検出し、上層では近世、下層では12世紀から16世紀の遺構を検出した。第4調査区では15～16世紀の

遺構を検出した。第2・第5調査区では近世を中心とした遺構面を検出した。

第3調査区のNV1から、8世紀初めの土師器壺が1点出土している。摩耗は殆ど受けておらず近隣に遺跡がないことから、NV1の位置する谷でさらに遡る古代の遺構、遺物がかつて存在したか、あるいは現存している可能性がある。

以下、調査区ごとに調査の結果報告を行う。



第10図 KGT92-3調査地位置図 (1/2500)

(註1) 木下密運「天野山金剛寺多宝塔の創建と鎮壇結界資料考」『古代文化』第18号 1979年
元興寺文化財研究所

(註2) 遺物は調査終了後、埋め戻されたため実見できないが、調査時に撮影した遺物写真を橋
本久和氏と森島康雄氏に鑑定していただいた。

第2章 調査の結果

第1節 第1調査区

1. 中世

第1調査区の下層遺構検出面では多種の遺構を検出した。遺構は柵列2条、建物1棟、溝9条、井戸2カ所、土坑4カ所、埋桶遺構1カ所、石列4カ所、土釜埋納遺構2カ所、竈状遺構2カ所、ピット2カ所と調査区の東側では自然流路であるNV1の一部を検出した。また、調査区の北側では火災によるとみられる焼土層を検出した。(付図1)

(1) 柵列

[SA1]

SA1はSD6の内部に位置する。SD6と共通の北西軸であるが、相互関係は未確認である。南北の両端は調査区外に伸びるものと考えられる。規模は検出長6.7m、柱間0.65~0.9m、柱穴の直径0.1~0.4m、深さ0.1mを測る。

遺物は出土していない。

[SA2]

SA2はSD8の西側に並列して位置する。SD8との関係は層位的には把握できなかった。軸方向はSA1よりやや北寄りである。一見すると以東には、建物を構成しそうなピット群が存在するが復元できなかった。規模は検出長5.1m、柱間0.6~0.8m、柱穴の直径0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。

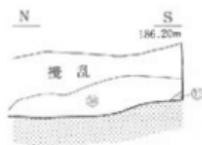
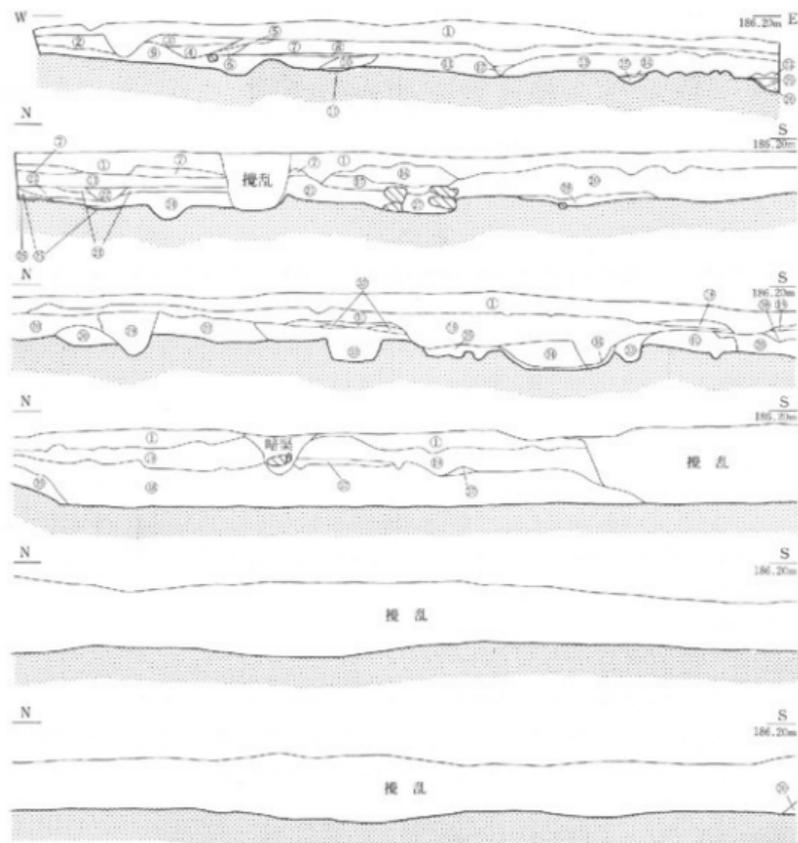
遺物は出土していない。

(2) 建物

[SB1] (第12図、図版2)

SB1はSD9の東側に位置する。復元した建物は桁行二間、梁間二間である。主軸方向はN-30°-Eを示す。柱間は桁行2.0~2.1m、梁間1.2~1.55mを測る。柱間は0.4~1.2m、柱穴の直径0.1~0.6m、深さ0.03~0.1mを測る。遺構の東側は削平されており、連続するピットが存在したのかは不明である。層位的な相互の関係は確認できなかったものの、SD9と同じ軸方向である点に注意される。

遺物は出土していない。

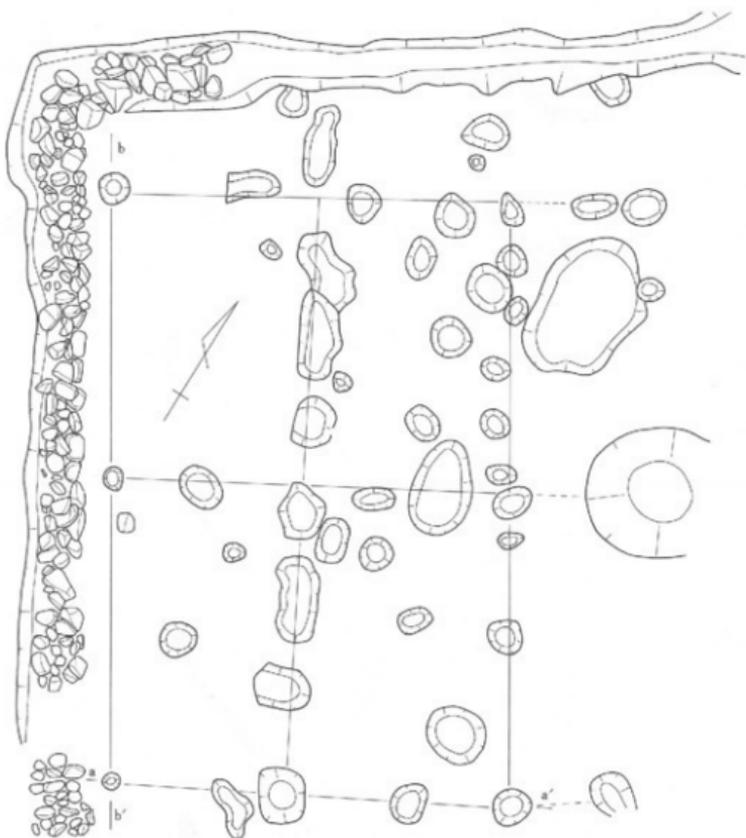


- ① 埴土
- ② 10YR 5/6 黄褐色粗砂粘土層じり粉砂
- ③ 10YR 8/7 黄褐色硬じり粉砂
- ④ 10YR 6/8 黄褐色硬質土層じり粉砂
- ⑤ 10YR 6/8 黄褐色硬質土層じり粉砂
- ⑥ 2.5Y 4/4 黄褐色土層じり粉砂
- ⑦ 10YR 7/8 黄褐色硬質土層じり粉砂
- ⑧ 10YR 6/4 黄褐色硬質土層じり粉砂 (炭化物を多く含む)

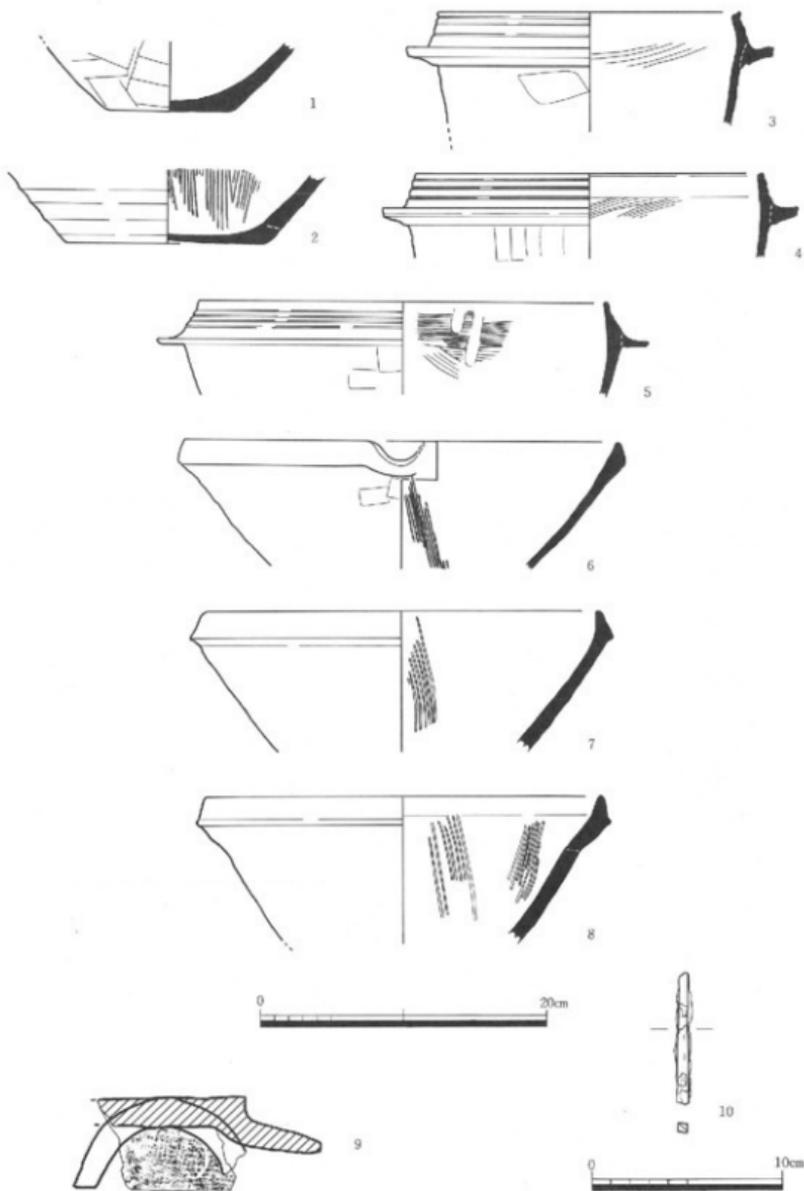
- ⑨ 2.5YR 5/6 黄褐色硬質じり粘土 (炭化物、土器片を多く含む)
- ⑩ 2.5Y 7/6 明黄褐色粘土層じり粉砂
- ⑪ 2.5Y 6/4 におい黄褐色粘土層じり粉砂
- ⑫ 2.5Y 4/6 オリーブ褐色粘土層じり粉砂 (炭化物、土器片を多く含む)
- ⑬ 10YR 6/4 黄褐色粘土
- ⑭ 2.5Y 6/8 明黄褐色粗砂
- ⑮ 2.5Y 4/4 オリーブ褐色粘土、砂質じり粉砂
- ⑯ 10YR 4/6 褐色粘土、硬質じり粉砂
- ⑰ 2.5Y 7/8 黄褐色硬質じり粉砂
- ⑱ 10YR 4/6 褐色硬質、粗砂層じり粉砂
- ⑲ 2.5Y 4/4 におい黄褐色粘土、硬質じり粉砂
- ⑳ 2.5Y 7/6 明黄褐色硬質じり粉砂
- ㉑ 10YR 6/8 明黄褐色硬質じり粉砂 (炭化物を多く含む)
- ㉒ 2.5Y 5/6 黄褐色硬質じり粉砂 (炭化物を多く含む)
- ㉓ 2.5Y 7/4 淡黄褐色硬質じり粉砂
- ㉔ 2.5Y 6/6 明黄褐色硬質じりシルト
- ㉕ 10YR 5/6 黄褐色粗砂層じり粉砂
- ㉖ 2.5Y 6/6 明黄褐色粗砂
- ㉗ 2.5Y 5/6 明黄褐色粗砂
- ㉘ 2.5Y 5/6 黄褐色硬質、粗砂層じり粉砂
- ㉙ 10YR 6/6 明黄褐色粗砂、粗砂層じり粘土
- ㉚ 2.5Y 4/4 オリーブ褐色硬質じり粉砂
- ㉛ 2.5Y 6/6 明黄褐色粘土層じり粉砂
- ㉜ 2.5Y 7/4 淡黄褐色硬質じり粉砂 (炭化物を少し含む)
- ㉝ 2.5Y 6/6 明黄褐色硬質じり粉砂
- ㉞ 2.5Y 5/4 黄褐色硬質じり粘土
- ㉟ 2.5Y 6/4 におい黄褐色硬質じりシルト
- ㊱ 2.5Y 6/4 におい黄褐色硬質じりシルト
- ㊲ 10YR 6/6 明黄褐色粘土、粗砂層じり粉砂
- ㊳ 2.5Y 6/4 におい黄褐色粘土層じり粉砂
- ㊴ 2.5Y 4/6 オリーブ褐色硬質じり粉砂 (炭化物を少し含む)



第11図 第1調査区北壁・東壁土層断面実測図 (1/80)



第12図 SB 1 遺構実測図 (1/40)



第13图 SD 2 出土遗物实测图

(3) 溝

〔SD1〕

SD1は調査区の西端、SE9の西側に位置する。遺構の平面形は東側をSE9に切られ、西側は調査区外に延びるため、不明である。北側の縁には川原石を使用した石組が一部残存する。後述のSD2にも石組が残存することから、これに連結する可能性がある。遺構の規模は検出長4m、幅1.6~1.8m、深さ0.05~0.2mを測る。石組の検出長1.5m、石の大きさは最大30×25×20cmを測る。石組は一段積みである。

遺物は出土していない。

〔SD2〕 (第13図、図版22)

SD2はSW2の南側2.5mからSE11の北側までの間で確認した。遺構の平面形は屈曲した不整形を呈している。石組が部分的に残存していることから排水施設であった可能性が高い。石はすべて川原石である。規模は検出した部分で長さ24m、幅0.6~2.0m、深さ0.15~0.4mを測る。石組の内法幅0.25~0.4m、石の大きさは最大45×35×25cmを測る。

遺物は瓦質播鉢(1・2・6・7)、瓦質土釜(3~5)、陶器播鉢(8)、丸瓦(9)、鉄釘(10)が出土した。

〔SD3〕

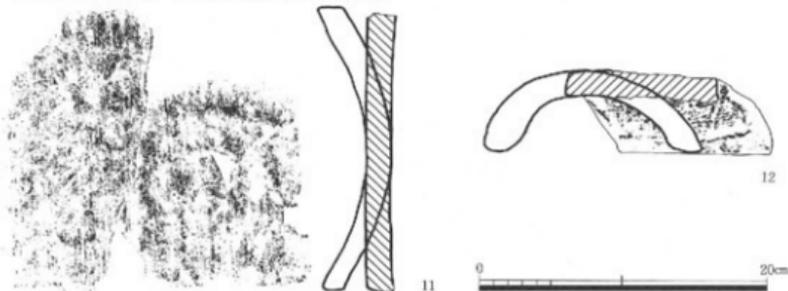
SD3はSD2の東側に位置する。遺構の平面形は不整形を呈する。西端はSD2の南縁を護岸する石組にいたるまでに終結していると考えられるが、相互の関係は不明である。規模は検出した長さ8.5m、幅1m、深さ0.1mを測る。

遺物は出土していない。

〔SD4〕 (第14図、図版22)

SD4はSD2の東側に位置する。平面形は西側をSE2に切られているが、不整形なものだと判断できる。SD2との時期的な関係は不明である。規模は検出長3.6m、幅0.6m、深さ0.1~0.2mを測る。

遺物は平瓦(11)、面戸瓦(12)が出土した。



第14図 SD4出土遺物実測図

〔SD5〕（第15図、図版22）

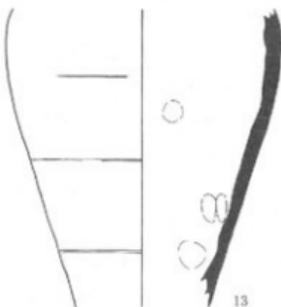
SD5はSD2の東側、SK2の南側に位置する。SD2との时期的な前後関係は不明である。平面形は西側が未確認であるが不整形を呈している。規模は検出長10.3m、幅0.65~2.3m、深さ0.3mを測る。

遺物は瓦質の壺（14）、瀬戸焼瓶子（13）が出土した。

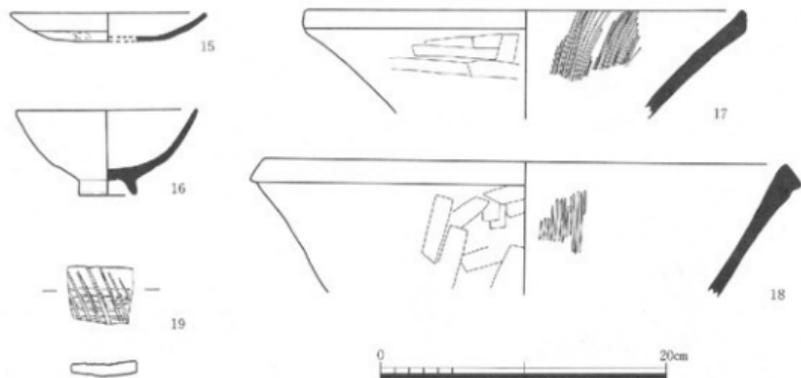
〔SD6〕

SD6はSD2の南東8mに位置する。遺構の南北端は調査区外に伸び、規模が明らかでない。

遺物は出土していない。



第15図 SD5出土遺物実測図



第16図 SD7出土遺物実測図

〔SD7〕（第16図、図版22）

SD7はSD6の東側に位置する。SD6と軸が近似することから関連遺構の可能性が考えられる。遺構の範囲及び平面形は、北側と西側がSD9に削平され、南側が調査区外に延びるため詳細は不明である。規模は検出した部分で長さ9m、幅0.6m、深さ0.1~0.25mを測る。

遺物は瓦質の皿(15)、播鉢(17・18)、瀬戸美濃系おろし皿(19)、青磁碗(16)が出土した。

〔SD8〕

SD8はSD7の東側にはほぼ平行して位置する。遺構の平面形は北側がSD9の東側部分まで、南側は西にやや屈曲した不整形である。SD6・SD7と軸方向が近似し、関連遺構の可能性はある。遺構の規模は検出長8m、幅0.55～0.85m、深さ0.05～0.15mを測る。

遺物は出土していない。

〔SD9〕

SD9はSK3の南側に位置する。遺構の平面形はL字形を呈している。遺構は掘方を持ち、南端は調査区の南側に石組と共に延びるが、東端は削平を受けており詳細は不明である。遺構の規模は検出した北西方向軸の長さ9.0m、北東方向軸の長さ0.98m、深さ0.1mを測る。検出した石はこぶし大の不整形な川原石である。石の表面には酸化鉄が多く付着しており、暗渠であったと考えられる。

遺物は出土していない。

(4) 井戸

第1調査区内では上ド2層の遺構検出面で合計6カ所の井戸を検出した。これらの井戸の検出数は、数カ寺の塔頭が存在したことを実証するものである。

層位から確実に中世に使用時期が遡る井戸はSE1とSE2である。これらの井戸を金剛寺の中世におけるある時期の井戸として特徴づけるならば、深さが1m以内であり、上部が削平されていることを考慮しても非常に浅いことに気付く。これは当時の水脈が豊かであり、地下水位も高かったことと関連があると考えられる。他に中世の井戸が検出された調査区としては第4調査区が挙げられるが(SE3～SE7)、ここでも深さが2m以内と非常に浅い。

〔SE1〕

SE1はSE9の南側約5mに位置する。掘方の平面形が不整形な円形を呈する石組の井戸である。規模は掘方の長径1.4m、短径1.1m、石組の上端内径0.7m、深さ0.45mを測る。石はすべて川原石で、最大25×20×20cmを測る。

遺物は出土していない。

〔SE2〕

SE2はSE1の南東約5mに位置する。掘方の平面形が不整形な円形を呈する石組の井戸である。規模は掘方の直径約1.4m、石組の上端内径約0.7m、底部内径約0.6m、深さ約0.6mを測る。石組はすべて川原石で、最大のものは25×25×20cmを測る。

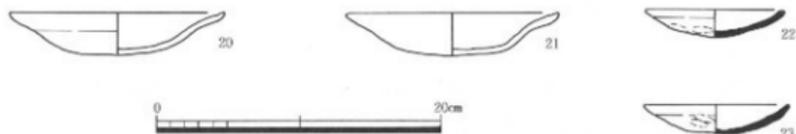
遺物は出土していない。

(5) 土坑

〔SK1〕 (第17図、図版23)

SK1は調査区の北側に位置する。平面形は南側が未確認であるが、不整形を呈するものと考えられる。規模は長径1.05m、短径0.35m、深さ0.05mを測る。

遺物は土師質の皿(20・21)、瓦質の皿(22・23)が出土した。



第17図 SK1出土遺物実測図

〔SK2〕 (第18図、図版23)

SK2はSE2の南東約5mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.85m、短径0.8m、深さ0.2mを測る。

遺物は土師質の火舎(24)が出土した。復元すると上方からの平面形は八角形を呈するものと考えられる。

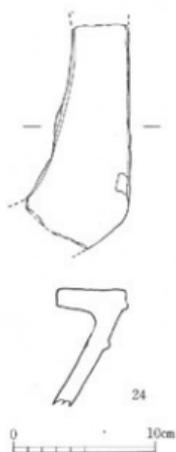
〔SK3〕 (第19図、図版23)

SK3はSD9の北側に位置し、南側をSD9に若干切られている。平面形は不整形を呈している。規模は検出した部分で長軸3.5m、短軸1.4m、深さ0.6mを測る。

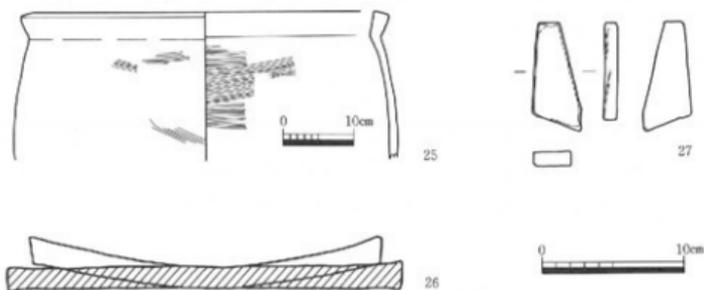
遺物は土師質甕(25)、平瓦(26)、砥石(27)が出土した。(25)は口径52cm、体部径54cmを測る。

〔SK4〕 (第20図、図版23)

SK4はSA2の東側に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸0.75m、短軸0.45m、深さ0.1mを測る。



第18図 SK2出土遺物実測図



第19図 SK3出土遺物実測図

遺物は瓦器埴（28）が出土した。Ⅳ-3（14世紀後半～15世紀前半）に相当するものと考えられる。

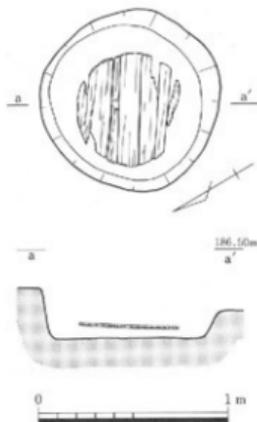


第20図 SK4出土遺物実測図

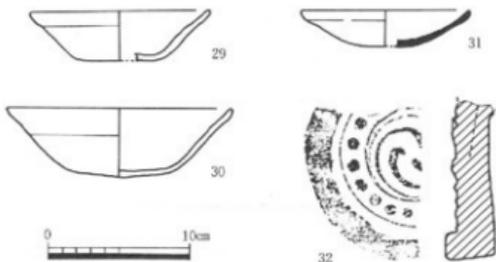
(6) 埋桶遺構

〔SN1〕（第21・22図、図版2・23）

SN1はSD7とSD8の間に位置する。掘方の平面形は不整形な円形を呈する。遺構の規模は掘方の長径1m、短径0.9m、深さ0.25mを測る。桶の平面形は円形を呈している。桶の法量は直径60cm、底板の厚さ2cmを測る。



第21図 SN1遺構実測図 (1/30)



第22図 SN1出土遺物実測図

遺物は土師質の埴（29・30）、瓦質の皿（31）、軒丸瓦（32）が出土した。

(7) 石列

〔SW1〕

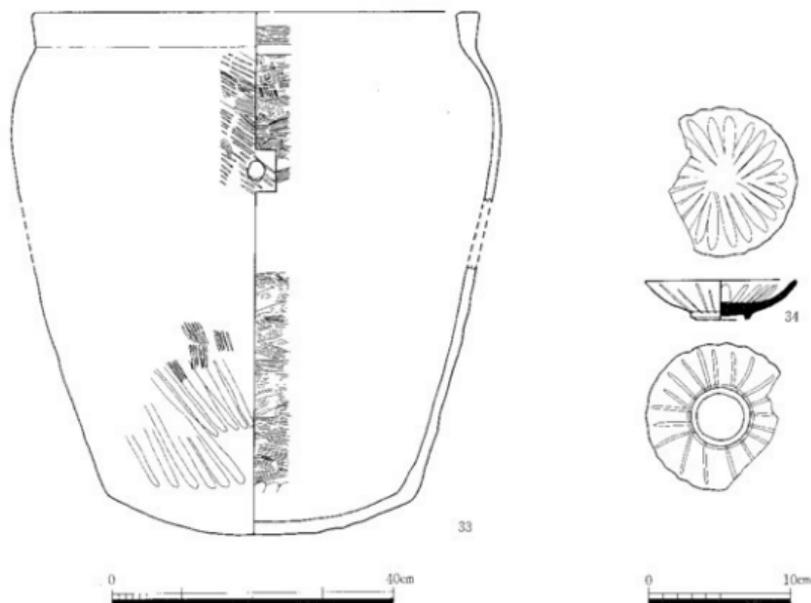
SW1は調査区の北に位置する。北東方向軸と南西方向の軸が合流し直角を成す。北端と西端は共に調査区外へ延びる。南西方向の軸には北部に逆L字形の凹部がある。規模は総延長11.6m、深さ0.2mを測る。使用された石はすべて川原石で、最大46×30×26cmを測り、面を揃えて最高4段積んでいる。

遺物は出土していない。

〔SW2〕

SW2はSW1の南西方向軸と同軸で、調査区の東西両側にそれぞれ直行し延びる。SW1と対を成し、溝を形成している。遺構の規模は長さ12.4m、高さ0.55～1.5m、SW1との間隔0.2～0.8mを測る。石組に使用された石は川原石で、最大44×36×22cmを測り、面を揃えて最高4段積んでいる。

遺物は出土していない。



第23図 SW 3 出土遺物実測図

〔SW 3〕（第23図、図版25）

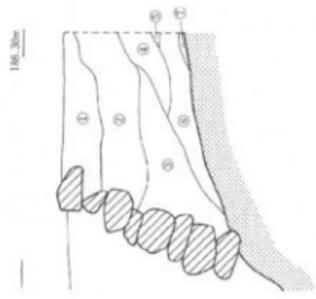
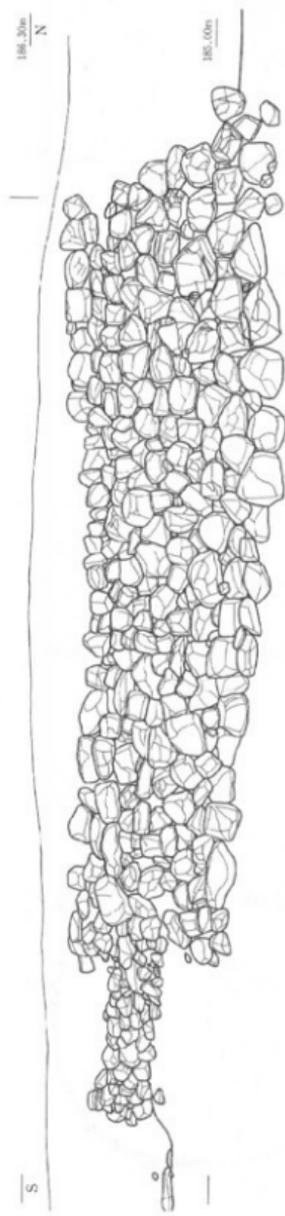
SW 3は北西方向の軸と北東方向の軸が連結しT字形を呈している。北東方向の東端は調査区外に延びる。掘方の平面形は不整形である。遺構の規模は検出した北西方向軸1.54m、北東軸方向軸1.56m、深さ0.1mである。石組には最大40×40×18cmの川原石を使用し、面を揃えて積んでいる。

遺物は土師質甕（33）と青磁の皿（34）が出土している。（33）は体部に制作時の穿穴がある。

〔SW 4〕（第24図、図版3）

SW 4は調査区の南側、NV 1の西岸に位置する。NV 1を護岸するための遺構であり、数回にわたり組み直されている。層的には未確認ではあるが、平面的にはSD 9との間の空間が方形を呈し、この空間に位置するSB 1や集中するピット群との関係が注意される。規模は検出した長さ8.6m、最大幅1.0m、高さ1.5mを測る。石組に使用された石はすべて川原石である。石は最大のもので40×35×30cmを測り、面を揃えて積み上げられている。

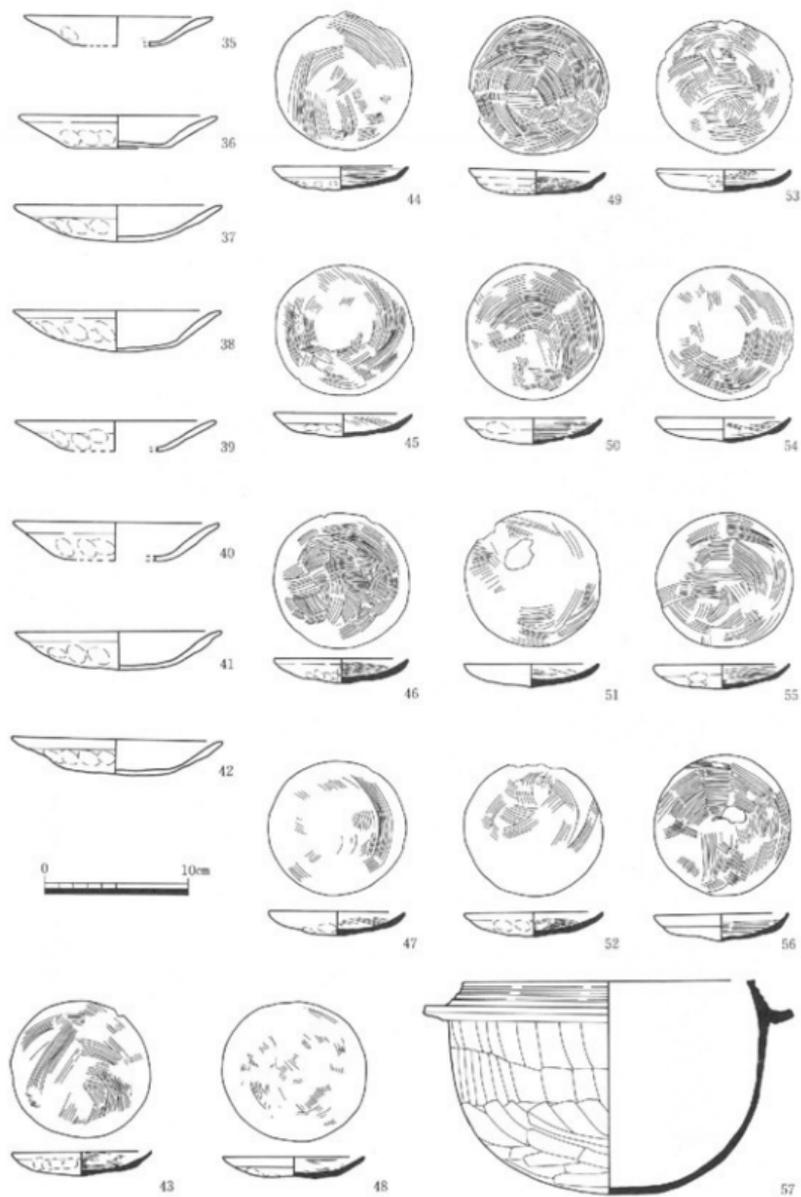
遺物は石組の目地から平瓦が出土したが細片のため実測できなかった。



- ① 2.3Y 5/6 黄褐色砂土より粗砂
- ② 2.5Y 4/6 4/10-7黄褐色土より粗砂
- ③ 2.5Y 6/6 2.01黄褐色・粗砂より粗砂
- ④ 2.5Y 7/6 黄褐色粘土土層より粗砂(炭化物を少し含む)
- ⑤ 3YR 5/6 褐色黄褐色砂
- ⑥ 2.5Y 6/6 2.01黄褐色土より粘土
- ⑦ 2.5Y 5/2 暗黄褐色粗砂より粘土



第24図 SW4 遺構実測図 (1/40)

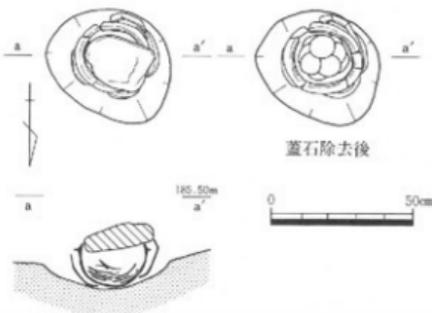


第25図 SX 1 出土遺物実測図

(8) 土釜埋納遺構

〔S X 1〕 (第25・26図、図版3・4・24)

S X 1はSW1の南北方向軸の逆L字形凹部の北側に位置する。掘方の平面形は不整形な円形を呈する。土坑の規模は長径0.45m、短径0.35m、深さ0.1mを測る。掘方の中央には瓦質の土釜が納められており、その周囲には8枚の土師質の皿が花卉状に立てられていた。また土釜の内部には14枚の瓦質皿が不規則に見込を上方向けて納められ、土釜の口を22×19×8cmの扁平な川原石で閉塞していた。



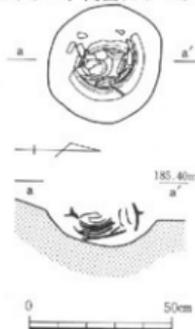
第26図 S X 1 遺構実測図 (1/20)

このように瓦質の土釜内に土器を埋納した遺構は既往の金剛寺遺跡の調査でも数例検出されている。出土例には土釜の内部に土師質の皿と瓦質の皿、土師質の皿と瓦器塊、土師質の皿のみを納めた組み合わせがあり、多様な出土状況を呈している。今回検出したS X 1のような出土状況は市内では類例をみないが、近似する検出例が羽曳野市教育委員会によって昭和58年度に実施された東阪田遺跡の土器溜2で報告されている。この遺構は土師質の土釜の周囲を20数枚の土師質の皿が取り巻くが、土釜の内部には土器が納められておらず、灰や炭が検出されている。報告ではこれらの出土状況から火葬墓と解釈されている。今回調査された第1調査区の北側に位置する1974年度の調査地では墓地が検出されており、立地的にみると近接地にあたることから墓の可能性が考えられるが、土釜内部の埋土に骨片や炭化物や灰が未検出であったので火葬墓である可能性は薄く、地鎮遺構と解釈できる。

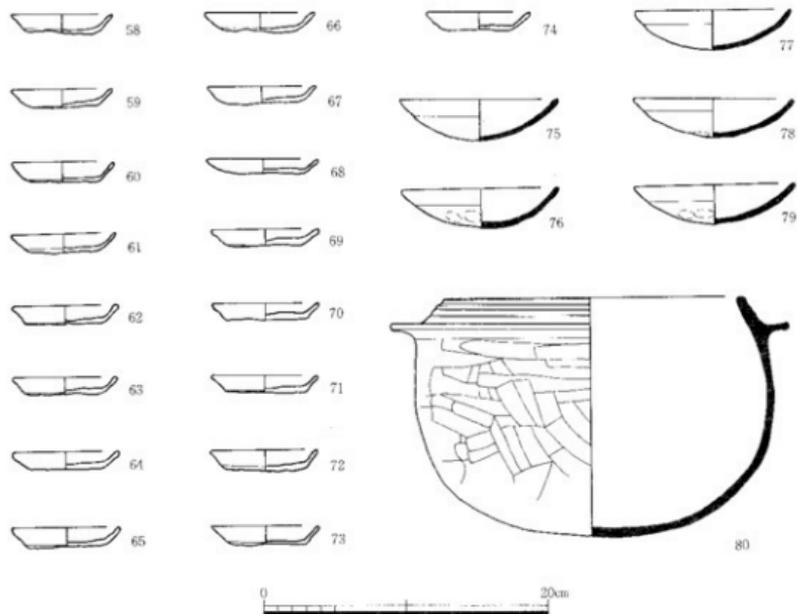
出土した土師質の皿(35~42)は外面中位にユビオサエの痕を著しく残す。口径は13.4~14.7cm、器高2.2~2.9cmを測る。瓦質の皿(43~56)は外面下半部にユビオサエ、内面に3~6mm幅のハケ目を施し、型的には尾谷分類8類(1409年以降)に相当するものと考えられる(本書第5章参照)。瓦質の土釜(57)は外面にヘラケズリ、内面にナデを施す。和泉D型(14世紀後半~15世紀初頭)に相当すると考えられる。

〔S X 2〕 (第27・28図、図版5・24)

S X 2はNV1底面西側で検出されている。掘方の平面形はやや歪な円形を呈し、規模は直径0.4m、深さ0.1mを測る。掘方の中央には瓦質の土釜が据えられ、土釜の内部には17枚の土師質の皿と5枚の瓦質の皿が納入されていた。S X 2以外にNV1の川床において検出された遺構は皆無であったが、一部生活面であっ



第27図 S X 2 遺構実測図(1/20)



第28図 S X 2 出土遺物実測図

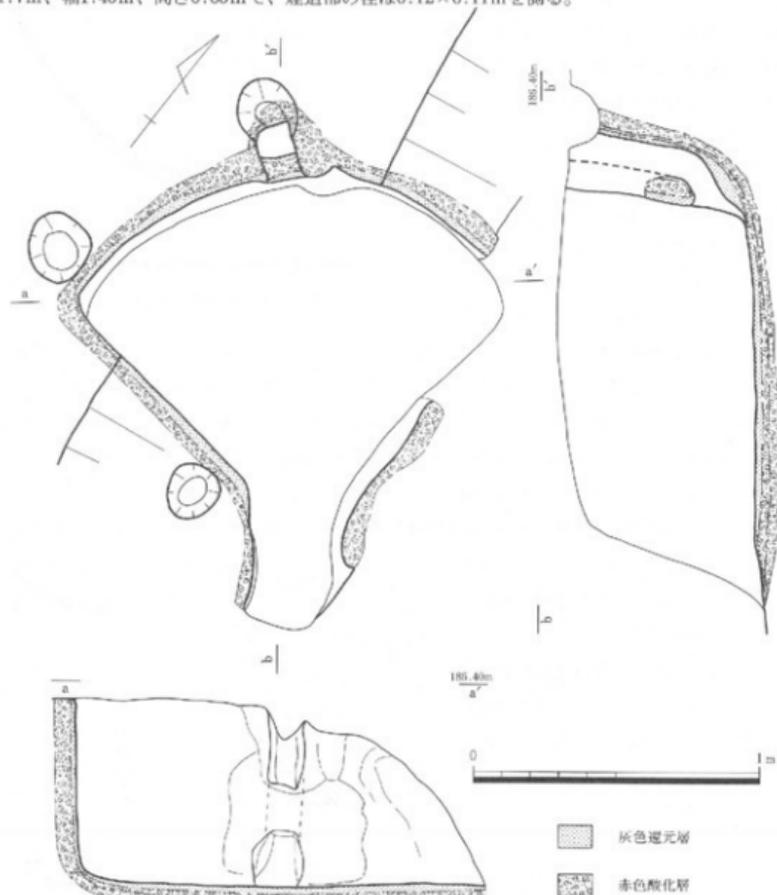
た可能性がある。N V 1 の西岸との標高差は 1 m を測る。

土師質の皿 (58~74) は口径7.0~7.8cm、器高1.2~1.5cmを測る。瓦質の皿 (75~79) の内面には暗文が認められない。型式的には尾谷分類1類 (1360年以降) に相当すると考えられる。瓦質の土釜 (80) は外面ヘラケズリ、内面ナデを施す。和泉D₁型 (14世紀後半~15世紀初頭) に相当すると考えられる。

(9) 窯状遺構

〔SY1〕 (第29・30図、図版5・6・25)

SY1は調査区の南、後述するNV1の西岸に位置する。遺構の平面形は東側が削平されているが、窯壁の残存部分から復元すると平面形は不整形な三角形を呈し、大沢分類Bタイプに相当する木炭窯と考えられる。煙道部は奥壁のほぼ中心線上に位置し、焚口は東側に開口していたものと考えられる。煙道部と窯体の壁は粘土を貼り整形しているが、SY2のように川原石で補強するような構造は検出されなかった。遺構の規模は検出した窯体の長さ1.55m、煙道部を含むと1.7m、幅1.45m、高さ0.65mで、煙道部の径は0.12×0.11mを測る。



第29図 SY1遺構実測図 (1/20)

出土遺物は天井壁の落下後の埋土層中から瓦質甕(81)が出土した。

また、後述の第4章の熱残留磁気測定法による調査の結果、時期は1175±50年と推定された。

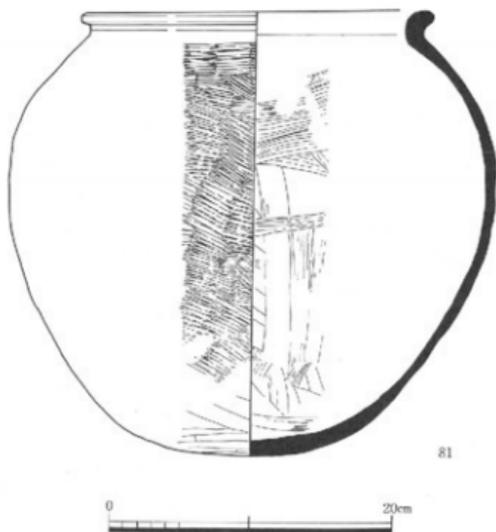
〔SY2〕(第31・32図、図版5・6・25)

SY2はSY1の北側に位置する。遺構の平面形は東側が削平を受けているため確定できないが、残存部を考慮すると不整形な三角形を呈しているようである。大澤分類ではBタイプの平面形に相当すると考えられる。焚口は窯壁の残存状態から復元すると、東側に開口する木炭窯と考えられる。煙道部は奥壁のほぼ中心線上に位置する。主軸は北西方向。

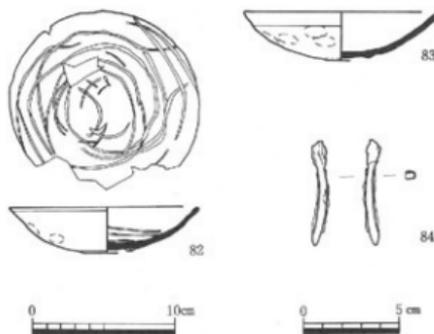
窯床は平坦で、奥壁の煙道部付近は還元焰焼成を受け著しく灰色を帯びている。煙道部と窯体の壁は粘土を貼り形成し、内部には補強のための基礎として川原石を仕組む構造を持っている。石は奥壁に対して長径を横にし、一段積みで上方に組まれている。規模は検出した窯体の長さは1.15m、煙道部を含むと1.45m、幅1.2m、深さ0.75mで、煙道部の径は0.17×0.13mを測る。石の規模は最大のもので20×10×6cmを測る。

遺物は天井壁が崩壊した後の埋土から瓦器塊(82・83)と鉄釘(84)が出土した。瓦器はⅣ-1~2(13世紀末~14世紀前半)に相当すると考えられ、この時期が使用時期の下限として捉えられる。

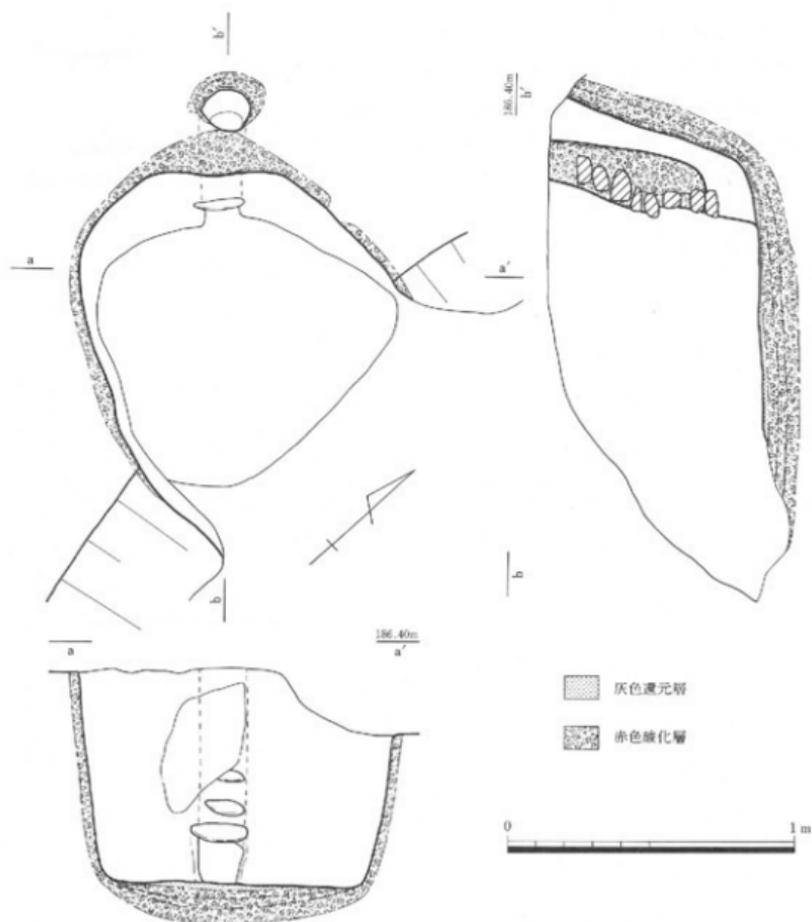
またSY1と同様に熱残留磁気測定法により調査した結果、1175±15年の時期が推定され、軸方向もほぼ等しいことも考え合わせるとSY1と同時期に使用されていた可能性が高い。



第30図 SY1出土遺物実測図



第31図 SY2出土遺物実測図



第32図 SY 2 遺構実測図 (1/20)

(10) ビット

〔P 1〕 (第33図、図版25)

P 1はS X 1の東側1.7mに位置する。平面形は円形を呈し、規模は直径0.2m、深さ0.1mを測る。周辺には他にもビットが点在するが、相互の関係が明らかなものはない。

遺物は龍泉窯系青磁碗 (85) が出土した。法量は復元口径が15.6cmを測る。

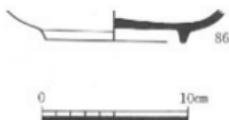


第33図 P 1 出土遺物実測図

〔P2〕 (第34図、図版25)

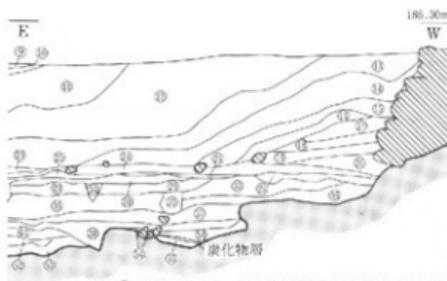
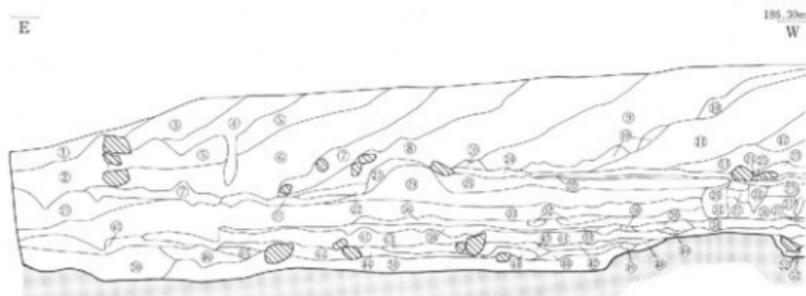
P2はSA2の東側1mに位置する。平面形はほぼ円形を呈する。規模は直径0.36m、深さ0.6mを測る。周辺はSB1やその他にもピットが点在するが、相互の関係が明らかなものはない。

遺物は青磁の皿(86)が出土した。



第34図 P2出土遺物実測図

(11) 自然流路



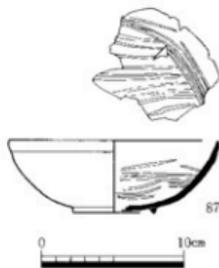
- | | |
|------------------------------------|-------------------------------------|
| ① 2.5Y 4/6 オリーブ褐色粘土(炭化物、土器片を含む焼土層) | ⑤⑥ 2.5Y 5/4 黄褐色礫混じり粘土(炭化物を少し含む) |
| ② 2.5Y 7/4 淡黄色礫混じり粗砂 | ⑤⑦ 2.5Y 7/2 淡黄色礫混じりシルト |
| ③ 2.5Y 8/6 黄褐色礫混じり粗砂 | ⑥⑧ 10YR 7/8 黄褐色礫混じり粗砂 |
| ④ 2.5Y 5/6 黄褐色粘土混じり粗砂(炭化物、土器片を含む) | ⑥⑨ 10YR 7/8 黄褐色礫砂 |
| ⑤ 2.5Y 7/6 黄褐色礫混じりシルト | ⑥⑩ 2.5GY 5/1 緑オリーブ灰色粘土混じり細砂 |
| ⑥ 2.5Y 7/8 黄褐色粘土 | ⑥⑪ 2.5GY 4/1 緑褐色礫混じり粘土(炭化物を少し含む) |
| ⑦ 2.5Y 8/3 淡黄色粘土混じり粗砂 | ⑥⑫ 2.5Y 4/1 緑褐色礫混じり粘土(炭化物を少し含む) |
| ⑧ 2.5Y 6/6 黄褐色礫混じり粗砂 | ⑥⑬ 2.5Y 5/6 黄褐色粘土混じり粗砂(炭化物を少し含む) |
| ⑨ 2.5Y 6/6 黄褐色礫混じりシルト | ⑥⑭ 2.5Y 6/8 黄褐色礫混じり粗砂 |
| ⑩ 2.5Y 5/6 黄褐色礫混じり粗砂 | ⑥⑮ 7.5Y 4/2 オリーブ灰色粘土混じり粗砂 |
| ⑪ 5Y 8/3 淡黄色粘土 | ⑥⑯ 5Y 4/2 オリーブ灰色粘土(炭化物を多く含む) |
| ⑫ 2.5Y 7/6 黄褐色礫混じり粘土 | ⑥⑰ 5Y 3/2 オリーブ黒色粘土 |
| ⑬ 2.5Y 6/8 黄褐色粘土混じり粗砂 | ⑥⑱ 10GY 2/1 緑褐色礫混じり細砂(炭化物を少し含む) |
| ⑭ 2.5Y 5/6 黄褐色礫混じり粗砂(炭化物を少し含む) | ⑥⑲ 10Y 3/1 オリーブ黒色粘土混じり細砂 |
| ⑮ 2.5Y 6/4 濃い黄褐色混じり粗砂 | ⑥⑳ 7.5Y 3/2 オリーブ黒色粘土混じり粗砂(炭化物を多く含む) |
| ⑯ 7.5YR 6/6 橙褐色礫混じり粘土 | ⑥㉑ 5GY 4/1 緑オリーブ灰色粗砂 |
| ⑰ 10YR 3/6 黄褐色粘土混じり粗砂 | ⑥㉒ 2.5GY 5/1 オリーブ灰色粗砂 |
| ⑱ 2.5Y 7/4 淡黄色粗砂 | ⑥㉓ 7.5Y 2/2 オリーブ黒色粘土(炭化物を多く含む) |
| ⑲ 10YR 6/4 濃い黄褐色礫混じり粘土 | ⑥㉔ 5GY 2/1 オリーブ黒色粘土 |
| | ⑥㉕ 10YR 5/8 黄褐色粗砂 |
| | ⑥㉖ 10Y 4/1 灰色粗砂混じり粘土 |
| | ⑥㉗ 7.5Y 3/2 オリーブ黒色粘土混じり粗砂(炭化物を多く含む) |
| | ⑥㉘ 10Y 7/1 灰白色粗砂 |
| | ⑥㉙ 7.5GY 5/1 緑灰色粘土混じり粗砂 |
| | ⑥㉚ 10Y 5/1 灰色粘土 |
| | ⑥㉛ 7.5Y 5/1 灰色粘土 |

第35図 第1調査区NV1南壁土層断面実測図(1/60)

〔NV1〕（第35・36図、図版25）

NV1は調査区の南東部を切り、地形から北東方向への流れであったと考えられる。流路の規模は検出した部分で幅14～19m、深さ1～2.5mを測る。上述のSX2の検出位置から、かつて川床に遺構面が存在した可能性がある。

遺物は第35図の第41層（7.5Y3/2オリーブ黒色粘土混じり細砂・炭化物包含層）より瓦器塊（87）が出土した。和泉型瓦器塊II-3（12世紀末～13世紀前半）に相当し、NV1の堆積過程の時期を知る資料が得られた。



第36図 第1調査区NV1（第41層）出土遺物実測図

2. 近世

第1調査区の上層遺構は南側で多くの遺構を検出したが、北側では少数しか検出できなかった。伽藍に近い立地にあるため本来南側に比べると遺構が多く存在していた可能性があるが、後世の耕作により削平されたものと考えられる。検出された遺構は、建物1棟、溝1条、井戸4カ所、土坑1カ所、埋瓦遺構2カ所、石列2カ所である。（付図1）

（1）建物

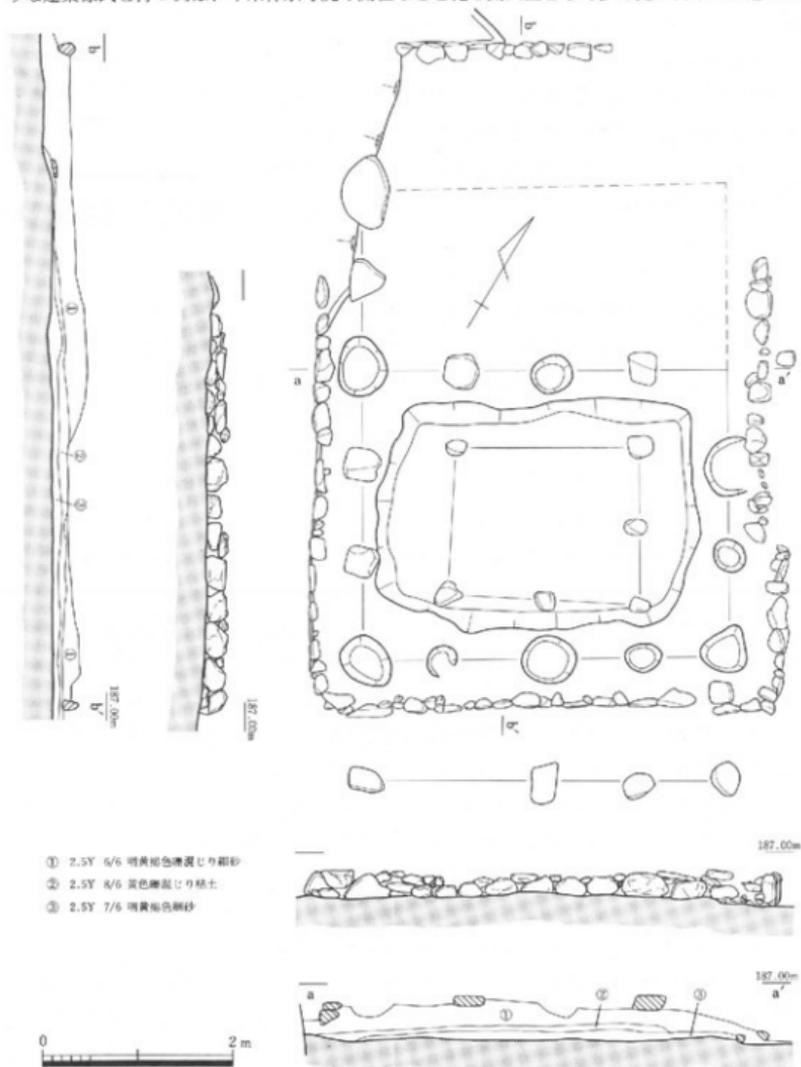
〔SB2〕（第37～39図、図版8～10・26・27）

SB2はSE11の南に位置する。基壇の平面形は復元すると長方形を呈する。北辺の北側では石敷の施設を有するがSE11に切られ、西側が調査区外に及ぶため詳細な規模は把握できなかった。基壇の規模は長辺7m、短辺5m、高さ0.35mである。石組は川原石を使用し、最大50×30×15cmを測る。基壇上に復元できる建物は桁行五間、梁間四間で、桁行一間につき2本と、梁間は北側の一間に1本、南側一間に2本の枡柱を持つ。柱間の長さは桁行・梁間ともに1mである。また南東の基壇外には、後世に梁間四間の縁側か欄が増築された可能性がある。検出された礎石は扁平な川原石を使用し最大のもので80×50×25cmを測る。

さらに基壇上の建物内部の南寄りには長辺3.4m、短辺2.4m、深さ0.2mの方形土坑が位置し、その底面には復元すると桁行二間、梁間二間の礎石を配する。柱間の長さは桁行0.85m、梁間1.0mを測る。基壇内の外側の建物と比較すると、礎石の配列は桁行方向については共通するが、梁間軸は共通せず独自の配列を持ち、独立した建物が存在すると考えられる。礎石は外側の建物に使用された石よりも一回り小さく最大でも12×13×8cmの川原石であった。

これらの検出状況から上部構造として、方形土坑の部分には祀堂に相当するような桁行二間、梁間二間の建物が存在し、さらにこれを覆うために、窓や戸などを持つ開放的な切妻造の建物の存在が考えられ、床は土間であった可能性が高い。祀堂と考えられる建物と覆屋と考えられる建物はともに北面を正面とするものと考えられる。

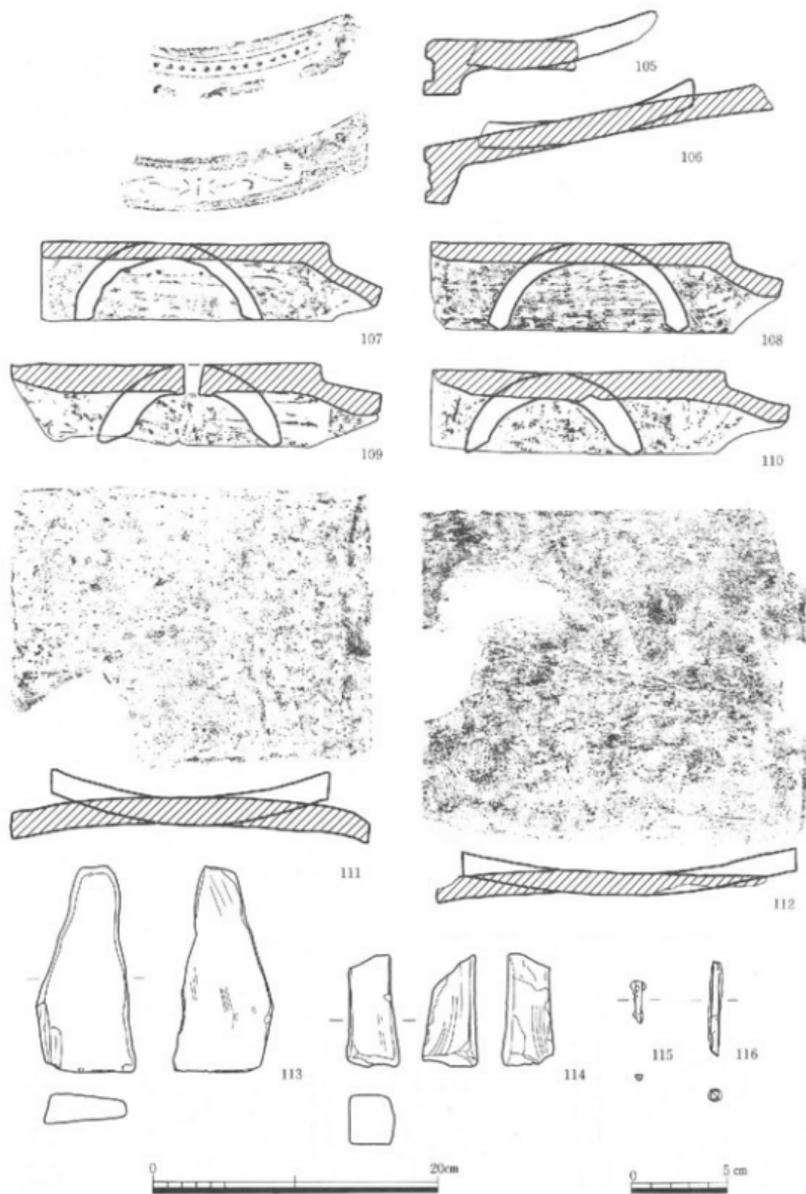
祀堂で祀られていたと考えられる信仰対象は、建物の構造と出土遺物から仏教系であることは確実で、上記の検出状況から僧侶や檀家などの墓石が祀られていた可能性が考えられる。このような建築様式を持つ例は、本米禅宗寺院の開祖などを祀る開山堂として多く見られるが、近世に



第37図 SB 2 遺構実測図 (1/60)



第38图 S B 2 出土遺物実測図 (1)



第39圖 SB 2 出土遺物實測圖 (2)

は宗派を問わず用いられる(註1)。

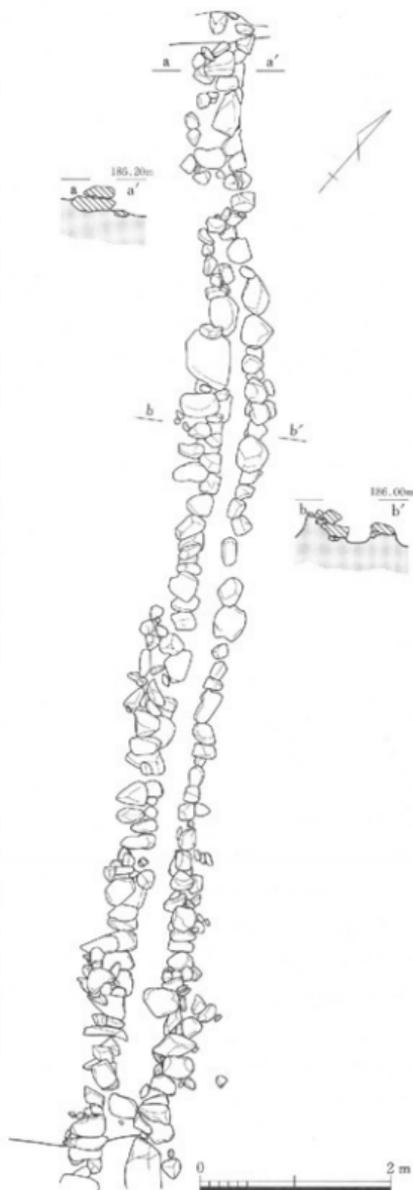
基壇を覆う封土からの出土遺物には青磁の皿(88・89)及び碗(98)、青花の皿(90・91)、染付の蓋(92・93)及び碗(94~97)、染付(波佐見焼)の仏飯具(99)、備前焼の播鉢(100)、砥石(113・114)、鉄釘(115・116)があった。また基壇上と基壇の南東側からは軒丸瓦(101~104)、軒平瓦(105・106)、丸瓦(107~110)、平瓦(111・112)が集中して出土した。軒丸瓦は残存部が瓦当のみに限られるためいづれも年代を示す特徴を欠くが、巴文のみに注目した場合、(101)は巴文の先部が小さく尖っており、尾の長さは半回転程度であることから鎌倉時代の可能性がある。(102・103)は室町時代、(104)は江戸時代の可能性がある。このような各時代の瓦が集中して出土したことから、S B 2が瓦葺きでその瓦には再利用したものが使用されていたことが考えられる。

(2) 溝

〔S D15〕(第40図、図版11)

S D15は下層遺構のSW1の南東軸とSW2の石組上に改築されている。北列の西側は南列(SW2)に合流して消滅し、これを境界に南北に塔頭が存在していた可能性がある。規模は検出長24m、深さ0.1~0.8m、石組の内法幅0.05~0.45mを測る。石は川原石を使用し、石組は内側に面を整え最高3段積んでいる。石は最大70×55×30cmを測る。

遺物は出土していない。



第40図 S D15遺構実測図(1/60)

(3) 井戸

調査開始前に表土上で検出され、未埋没であったSE8とSE11は近年までみかん畑の農業用水として使用されていたらしく、近世から引き続いて使用されていた可能性がある。これらの井戸は前述の中世の井戸と比較すると、ほとんどが深さ2m以上を測る非常に深いものであり、構築時の地下水水位の変化に伴うものと考えられる。また、天野山金剛寺遺跡から検出される井戸は、既往の調査例も合わせてすべてが川原石を利用した井戸であるという特徴がある。

〔SE8〕

SE8は調査区の北西に位置する。掘方の平面形は西側が調査区外に及ぶため詳細は不明であるが、検出部分から不整形な円形を呈するものと判断される。規模は掘方が直径1.9m、石組の上端内径0.6mである。深さはかなり深く、現代の廃棄物が投棄されており、3m以上測定していない。石組は最大で40×25×20cmの川原石を使用し、面を揃えて積上げられている。

遺物は出土していない。

〔SE9〕

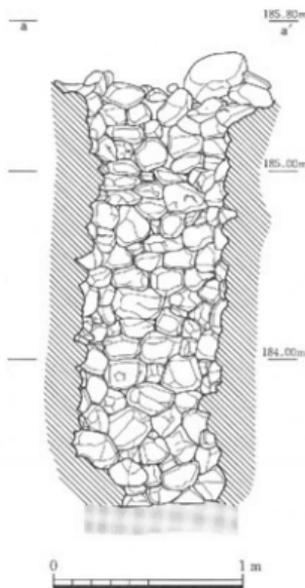
SE9はSE8の南東6.5mに位置する。遺構内の南側底部で川原石から成る井戸の石組みの基部と考えられる配石を検出したが、その規模からは井戸以外の遺構の可能性も考えられる。平面形は不整形な円形を呈する。規模は掘方が長径2.3m、短径2.2m、深さ0.65mを測る。石組の石はすべて川原石で、最大33×20×20cmを測り、面を揃えて積み上げられている。

遺物は出土していない。

〔SE10〕 (第41図、図版11)

SE10はSE2の東側10mに位置する。掘方の平面形は不整形な円形を呈する。規模は掘方が直径1.2m、石組の上端内径0.7m、底部内径0.6m、深さ2.2mを測る。石組はすべて川原石で、最大のもので45×40×30cmを測り、面を揃えて積み上げられている。

遺物は出土しなかった。

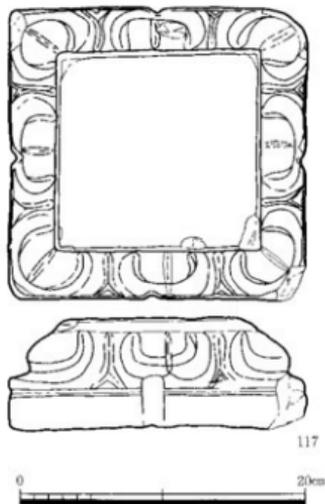


第41図 SE10遺構実測図 (1/30)

〔SE11〕（第42図、図版27）

SE11はSE10の南西14mに位置する。掘方の平面形は不整形な円形を呈する。規模は掘方が直径1.5m、石組の上端内径1.0mを測るが、深さは現代の廃棄物が投棄されており3m以上測定していない。石組は最大50×30×30cmの川原石を使用し、面を揃えて積み上げられている。

井戸枠の石組には砂岩製石塔の台石（117）が転用されていた。四方側面上半部には返花が刻まれている。台石は周囲の四辺のほぼ中央に垂直方向の溝が刻まれている。この痕跡から石組に再利用される前にも他の用途で利用されていたことは明らかであるが、用途は不明である。



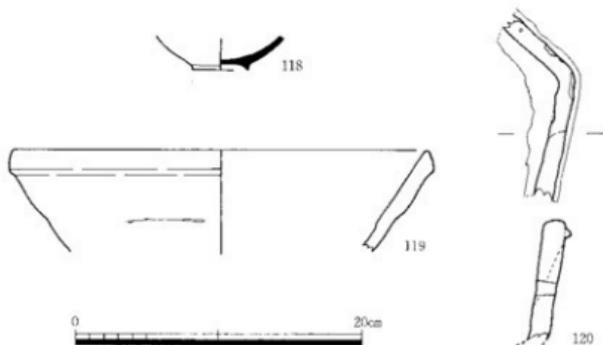
第42図 SE11出土遺物実測図

（4）土坑

〔SK14〕（第43図、図版28）

SK14は調査区の南側、SW7の南に位置する。平面形は不整形な円形を呈する。遺構内の埋土には炭化物が多く、欠損した土器や瓦が含まれているので廃棄坑と考えられる。遺構の規模は長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.43mを測る。

遺物は土師質の鉢（119）、火舎（120）、白磁の碗（118）が出土した。（120）は復元すると八角形を呈するものと考えられる。



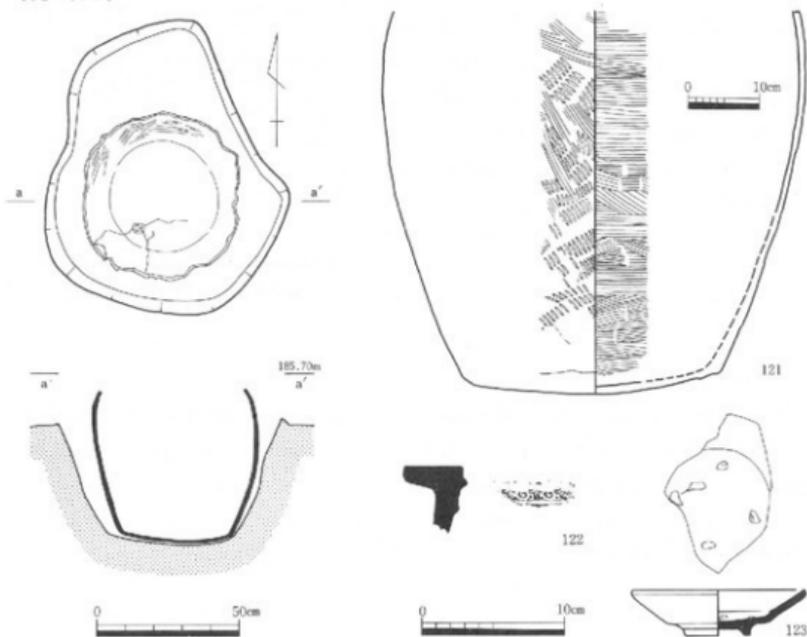
第43図 SK14出土遺物実測図

(5) 埋藏遺構

〔S L 7〕 (第44・45図、図版12・28)

S L 7はS K14の南側に位置する。掘方の平面形は不整形を呈する。掘方の規模は長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.45mを測る。

埋納された甕(121)は土師質で、法量は底部径40.3cm、体部最大径60.7cmを測る。他の遺物としては甕内の埋土から瓦質の火舎(122)と唐津焼の皿(123)が出土したが、流入したものと考えられる。



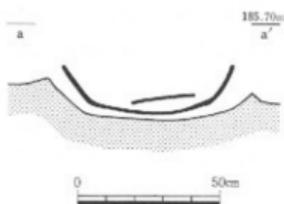
第44図 S L 7 遺構実測図 (1/20)

第45図 S L 7 出土遺物実測図

〔S L 8〕 (第46・47図、図版28)

S L 8はS L 7の東側に位置する。S L 7に近接して検出されたことから関連のある遺構と考えられる。掘方の平面形は円形を呈し、径0.7m、深さ0.15mを測る。

埋納された甕(124)は土師質で、法量は底部径45.5cmを測る。甕の埋土から紹聖元宝(125)が3枚重なった状態で出土しているが、流入したものと考えられる。



第46図 S.L.8 遺構実測図 (1/20)



第47図 S.L.8 出土遺物実測図

(6) 石列

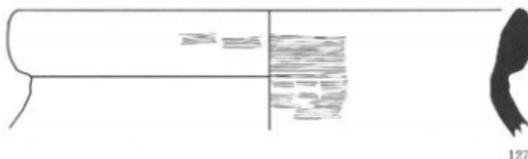
〔SW7〕 (第48図、図版12・28)

SW7は調査区東側の中央に位置する。平面形は検出部分でほぼ方形を呈し、さらに東側に連続する。南列の軸方向は途中からやや北寄りに更新されており、南側部分の底には底石が一部敷設されているのが認められる。規模は南北3.6m、東西検出長3.4m、高さ0.3mを測る。石はすべて川原石であり、最大50×40×35cmの石を使用している。石組は内側に面を揃え、最高2段積みされているのを確認した。

遺物は瓦質の片口鉢 (126)、備前焼の甕 (127) が出土した。

〔SW8〕

SW8はSW7の南側に位置する。平面形は雁行状を呈し、周囲に連続部分が存在していたと考えられる。石は一段積みで面を北西にそろえる列が2列、北東にそろえる列



第48図 SW7 出土遺物実測図

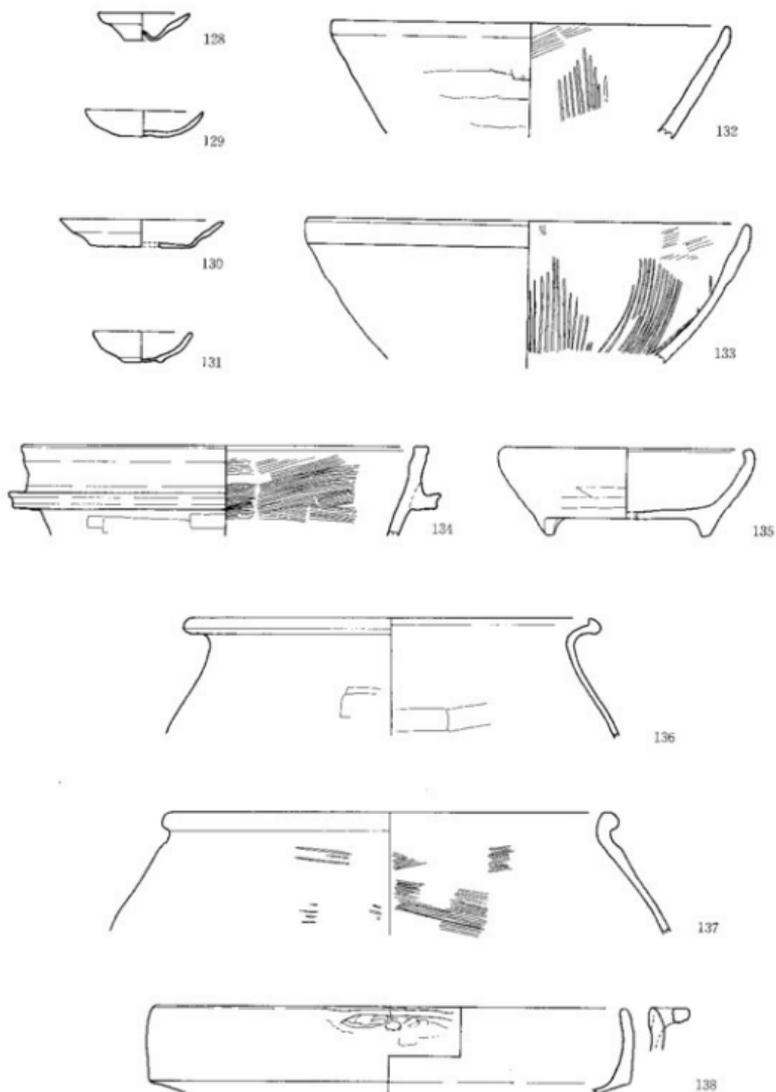
が1列ある。規模は総延長6.7mを測る。調査地が東側に傾斜しており、生活面を平坦に維持する為の土止め用や、塔頭間、もしくは建物間の敷地を区画していた可能性がある。石は川原石で最大40×20×13cmを測る。

遺物は出土していない。

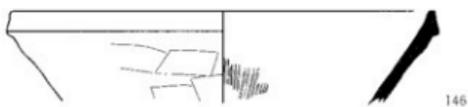
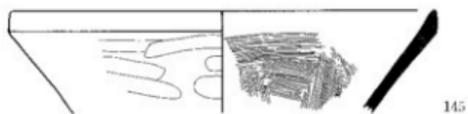
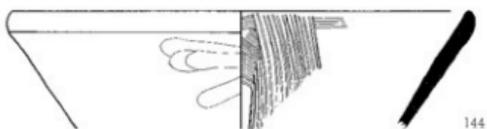
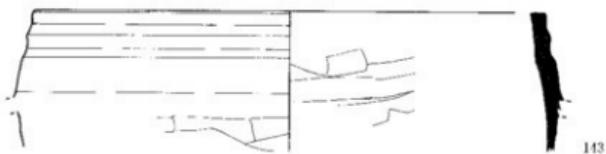
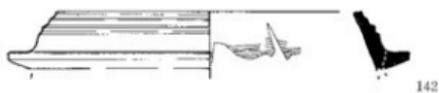
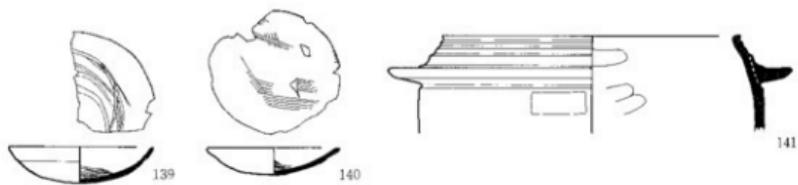
(7) 包含層 (第49～53図、図版28～30)

包含層出土の遺物は次のようなものがあつた。土師質では皿(128～130)、小壺(131)、播鉢(132・133)、土釜(134)、甕(136・137)、炮烙(138)、火舎(135)、瓦器では皿(139)、瓦質では皿(140)、土釜(141～143)、播鉢(144～148)、甕(149・150)、火舎(151・152)が出土した。その他には青磁碗(153)、花瓶(154)、仏飯具(155)、白磁鉢(156)、花瓶(157)、染付碗(158～162)、褐釉天目茶碗(163)、黒釉天目茶碗(164)、唐津焼碗(165)、瀬戸焼鉢(166)、丹波焼の播鉢(168)、双耳鉢(167)、陶器播鉢(169)、甕(172)、備前焼壺(170)、甕(171)、軒平瓦(173・174)、軒丸瓦(175・176)、丸平(177)、平瓦(178)、滑石製石鍋転用品(179)が出土した。土師質皿(128～130)は京都系のものである。(128)はいわゆる「ヘソ皿」と呼ばれるものである。法量は口径6.2cm、器高2.0cmを測る。(129)はB類に相当するものと考えられる。(130)はA類に相当するものと考えられる。土釜(134・141～143)は和泉D₁型か河内D₁型のいずれかに相当する。(179)は転用品で、磁石に再利用されている。河内分類B群(13世紀前半～16世紀代)に属するものと考えられる。

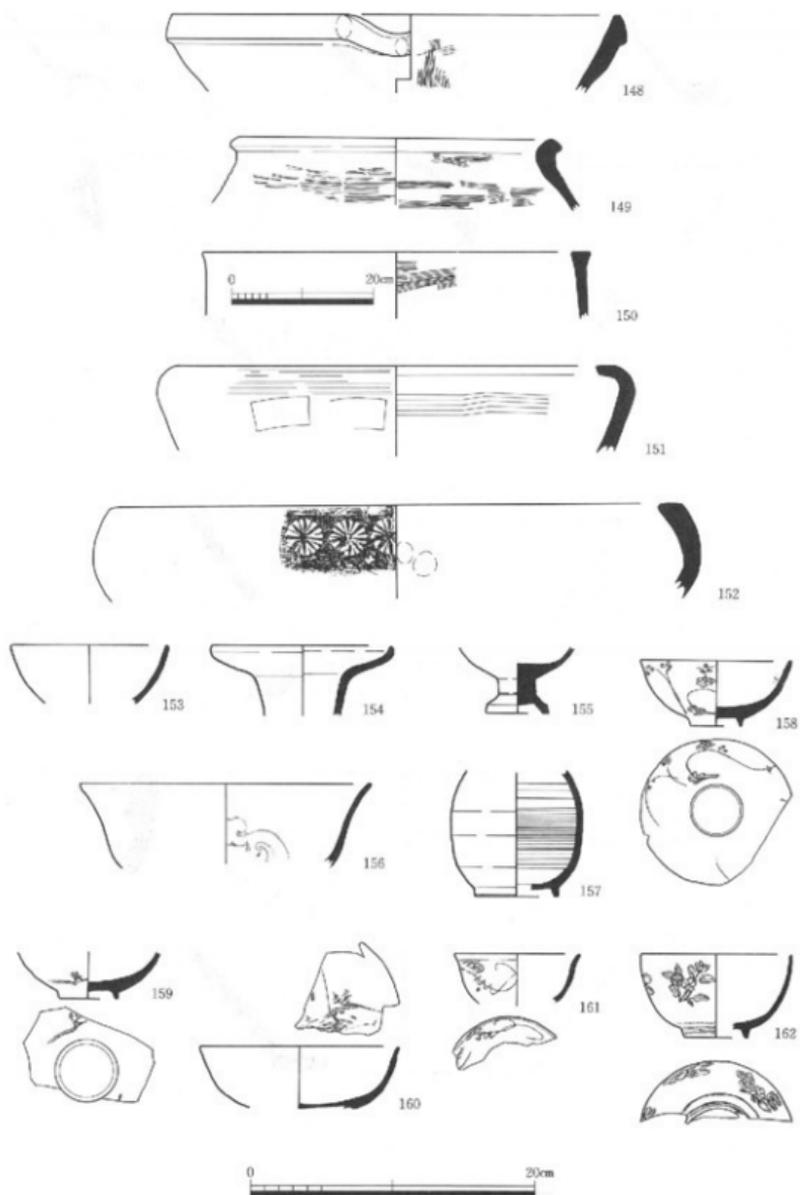
(註1) 櫻井敏雄氏に調査で記録した図面及び写真より鑑定いただいた。



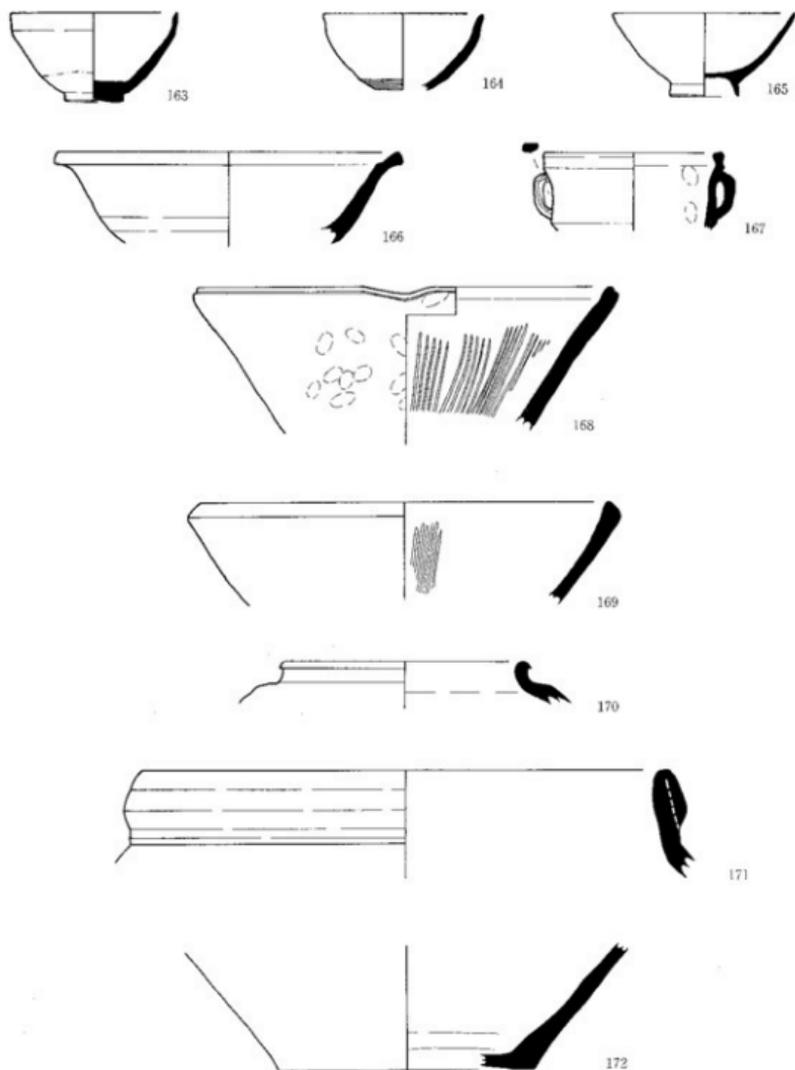
第49图 第1调查区包含层出土物实测图(1)



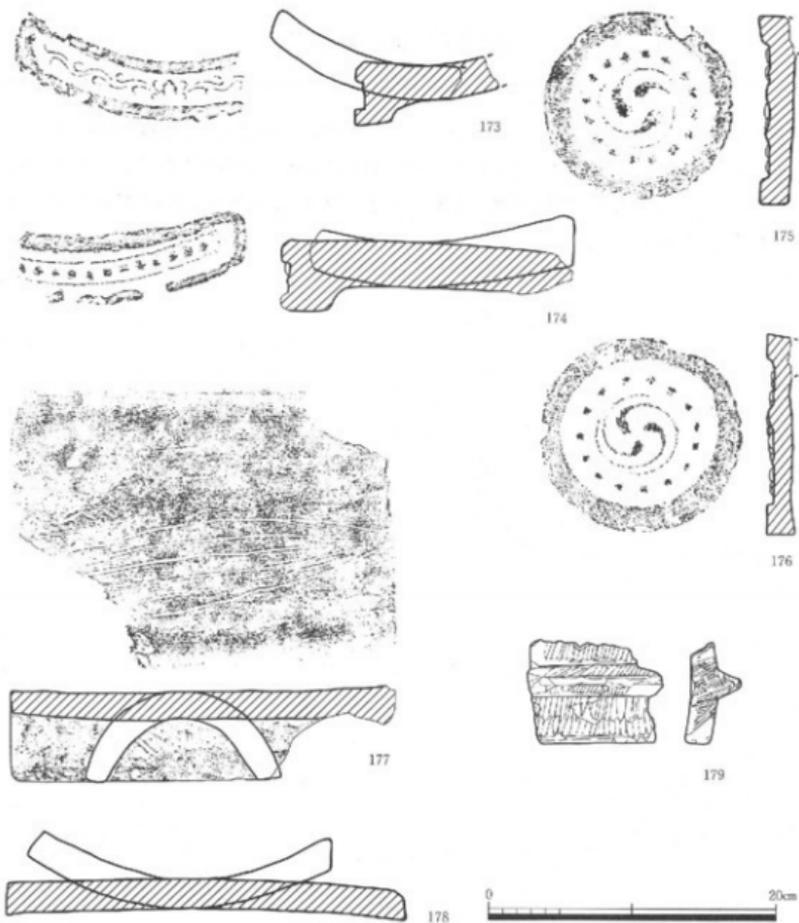
第50图 第1調査区包含層出土遺物実測图(2)



第51图 第1调查区包含层出土物实测图(3)



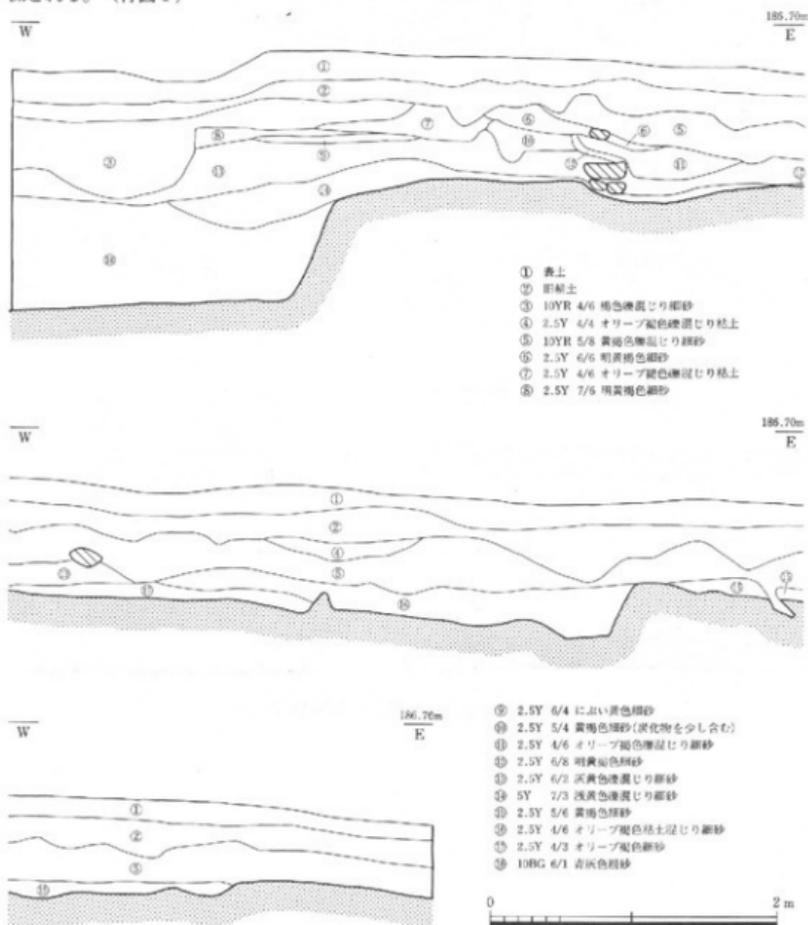
第52図 第1調査区包含層出土遺物実測図(4)



第53图 第1調査区包含層出土遺物実測図(5)

第2節 第2調査区

層序から近世のものと考えられる溝、土坑、ピットが検出されたが、出土遺物は皆無であった。しかしN V 1の埋土の堆積は人為的なものであり、層中には中世の遺物を中心に包含されていた。このことからかつて周辺に中世の遺構が存在し、後に整地され、近世の生活面が形成されたと推測される。(付図1)



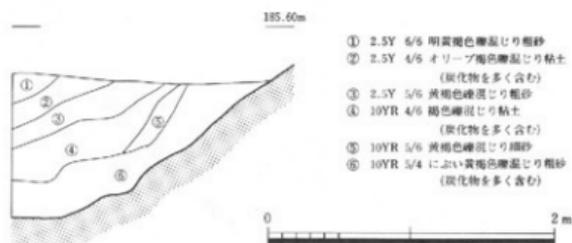
第54図 第2調査区北壁土層断面実測図 (1/40)

1. 中世

(1) 自然流路

〔NV 1〕 (第55～57図、図版31)

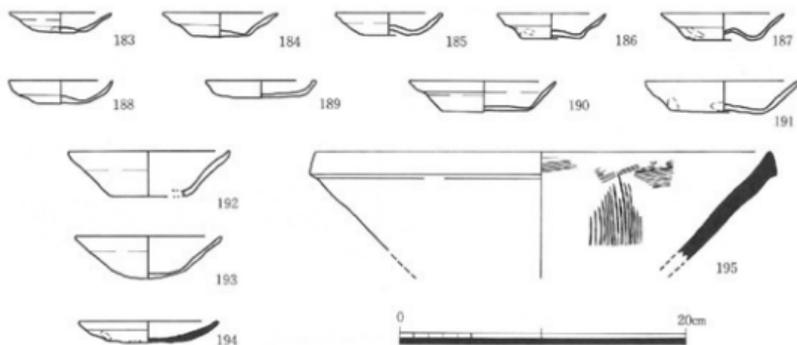
NV 1は第3調査区から第2調査区へ流入するものと、第6調査区から第5調査区を経緯し、第2調査区へ流入するものがある。自然流路の深さは0.6～1.15mを測る。流路の南側は人工的に埋められたことが顕著に土層観察できた。遺物を包含する2層の焼土層を検出した。上層焼土層(第2層)からは土師質の皿(180・181)と瓦質土釜(182)が出土した。土師質の皿はともに京都系で、(180)はB類に、(181)はC類に相当するものと考えられる。下層焼土層(第6層)からは土師質の皿(183～191)、埴(192・193)、瓦質の皿(194)、插鉢(195)が出土した。土師質の皿は上層と同じく京都系で、B、C類に相当するものと考えられる。したがってこれら2層の焼土層は15世紀代から16世紀代に形成され、NV 1を埋め立てたものと考えられる。



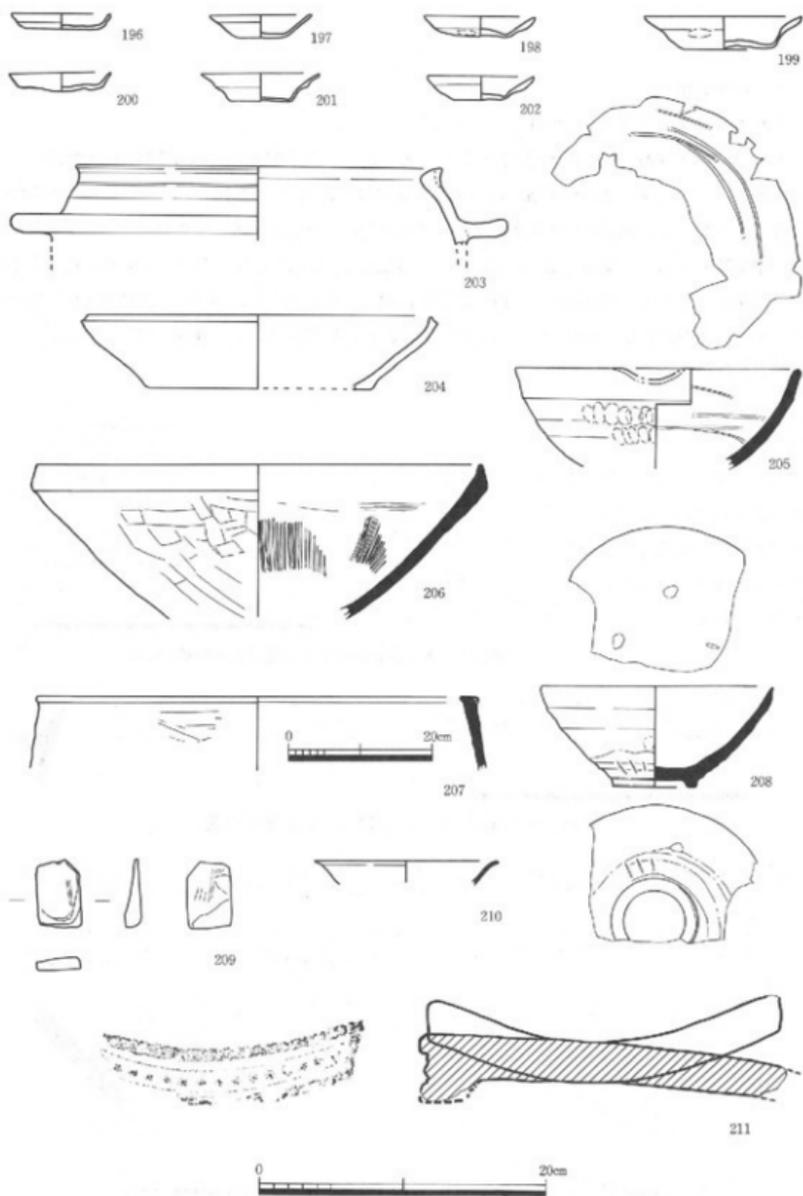
第55図 第2調査区NV 1土層断面実測図(1/40)



第56図 第2調査区NV 1(第2層)出土遺物実測図



第57図 第2調査区NV 1(第6層)出土遺物実測図



第58图 第2调查区包含层出土实物实测图

(2) 包含層 (第58図、図版30～32)

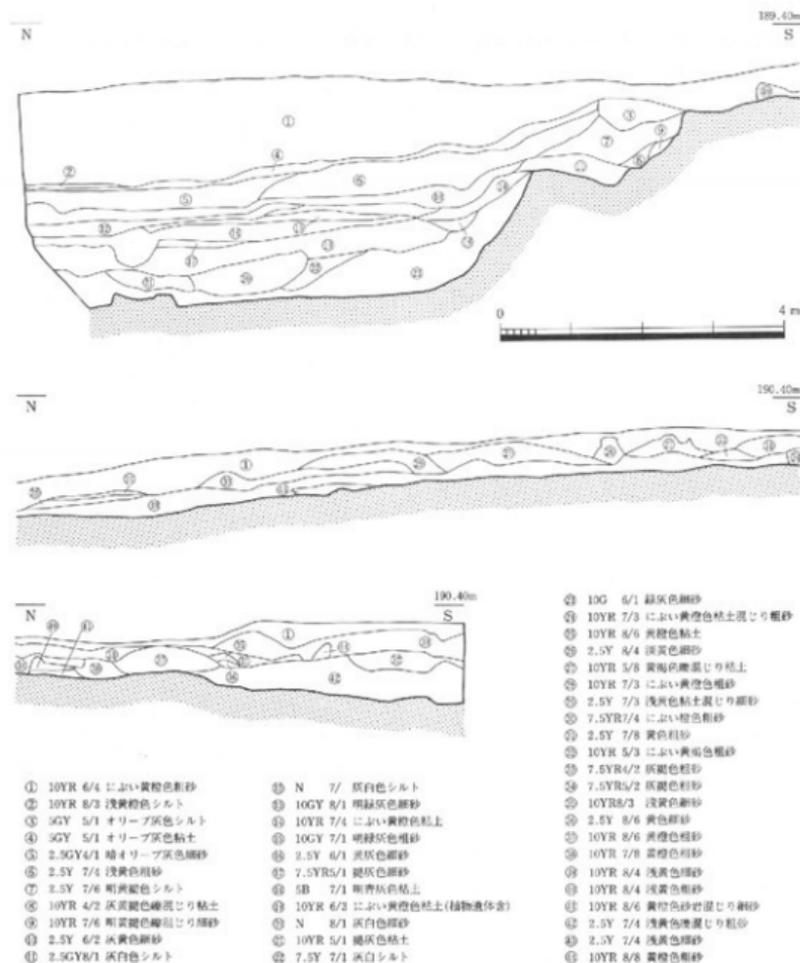
包含層からの遺物は土師質の皿 (196～202)、土釜 (203)、鉢 (204)、瓦器の埴 (205)、瓦質の播鉢 (206)、甕 (207)、青磁の碗 (210)、瀬戸焼の埴 (208) が出土した。その他には砥石 (209)、軒平瓦 (211) が出土した。

2. 近世

検出された溝、土坑、ピットは、層序から近世の遺構と考えられるが、遺物が出土していないため詳細は不明である。

第3節 第3調査区

第3調査区ではNV1の水量が増水し流路の幅が広がったために水没した、中世のものと考えられる遺構が検出された。遺構は自然流路であるNV1の川床から埋桶遺構1カ所、石列1カ所



第59図 第3調査区東盤土層断面実測図 (1/80)

が検出された。(付図2)

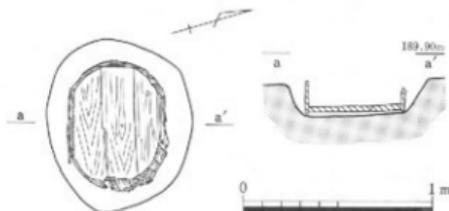
1. 中世

(1) 埋桶遺構

〔SN2〕(第60図、図版15)

SN2は調査区の北隅に位置する。遺構の掘方の平面形は楕円形で、中央に楕円形の桶が埋納されている。掘方の規模は長径0.9m、短径0.75m、深さ0.2mを測る。桶の法量は長径62cm、短径52cm、残存高18cmを測る。

遺物は出土していない。



第60図 SN2 遺構実測図 (1/30)

(2) 石列

〔SW5〕

SW5はSN2の北側6mに位置し5列の石列によって構成されている。両端はそれぞれ調査区外に延びる。石列を構成する石材は最大40×30×30cmの垂角礫である。おそらくNV1の流路の幅が広がったことにより、護岸用の施設として作られたものと考えられる。検出した長さ4m、幅2.8m、高さ0.2~0.4mを測る。

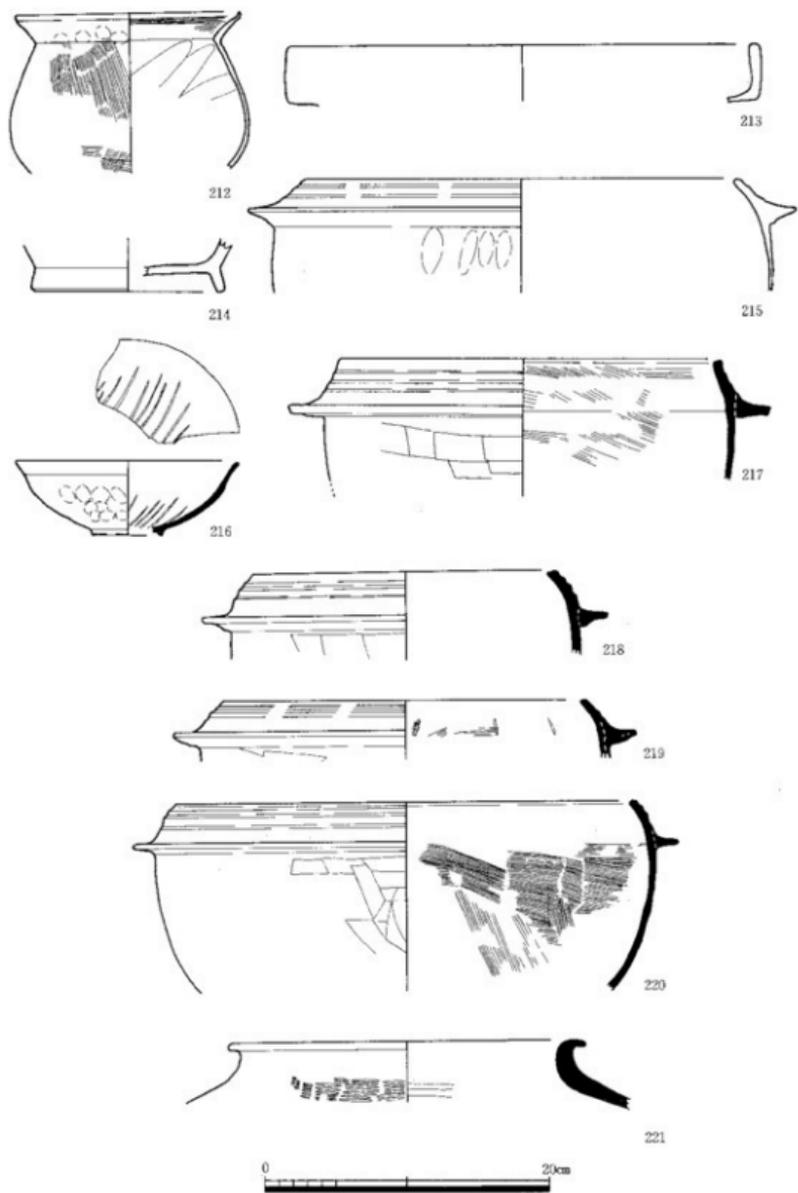
遺物は出土していない。

(3) 自然流路

〔NV1〕(第61図、図版15・32)

NV1は第3調査区を通り北東方向へと流れる。規模は対岸が調査区外に及ぶため未検出であるが、検出した幅19~30m、深さ3.0~3.3mを測る。NV1の西側斜面では瓦質の土釜が投棄されたと考えられる状態で出土した(付図2▲地点)。したがってこの出土位置から流路上の平坦面に中世の遺構が存在していた可能性がある。

遺物は土師器の甕(212)、土師質の炮烙(213)、土釜(215)、火舎(214)、瓦器では埴(216)、瓦質では土釜(217~220)、甕(221)が出土した。甕(212)は8世紀初めの遺物と考えられる。埴(216)はⅢ-2に相当し13世紀の遺物と考えられる。土釜(215・217~220)はすべて和泉D型か河内D型、型のいずれかに相当し14~15世紀のものと考えられる。



第61图 第3调查区NV I 出土实物实测图

第4節 第4調査区

他の調査区とは相違して西除川の右岸に位置し、遺構面は第1調査区より約3m程度下がっている。調査区の現況は川の上流に向かって、約1mの比高をもって2段の面を成していた。

調査の結果、調査区の段を成す部分からは石垣状のSW6が検出された。この段を境に下流側（南西側）で溝2条、井戸2カ所、土坑1カ所、上流側（南東側）からは溝3条、井戸3カ所、土坑8カ所、埋窰6カ所、石列1カ所、土釜埋納遺構1カ所を検出した。調査区の南西側は自然流路のNV1の一部が見つかった。（付図3）

1. 中世

(1) 溝

〔SD10〕（第62図、図版33）

調査区の下流側の段から検出され、不定形な形状を呈する。南北に約8m走り、南側でNV1に流れこむ。最大幅3.1m、深さ0.7mを測る。この溝は形態から流路と言うよりは落ち込みに近い。

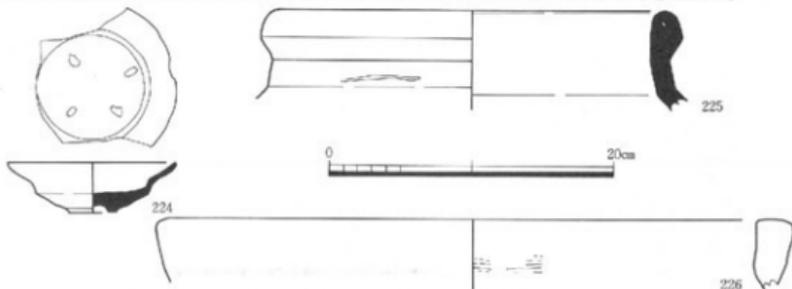
遺物は回転糸切底の須恵質鉢の底部（222）、備前焼の播鉢（223）が出土している。



第62図 SD10出土遺物実測図

〔SD11〕（第63図、図版33）

調査区の下流側の段の北東側で検出され、SE3付近からSK6に向かって直線的に約8m程度走った後、SW6に沿って真っすぐに南西に走る。最大幅2.1m、深さ0.15m、平均幅0.6mを測る。埋土には砂、礫が多く混入していることから水の流れがあったことが予想される。

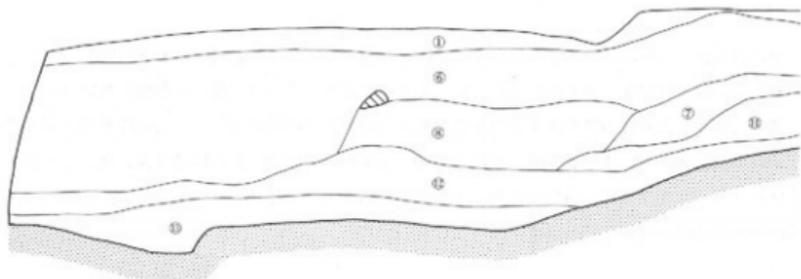


第63図 SD11出土遺物実測図

W

185.50m

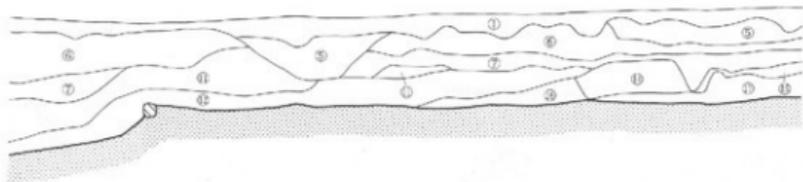
E



W

185.50m

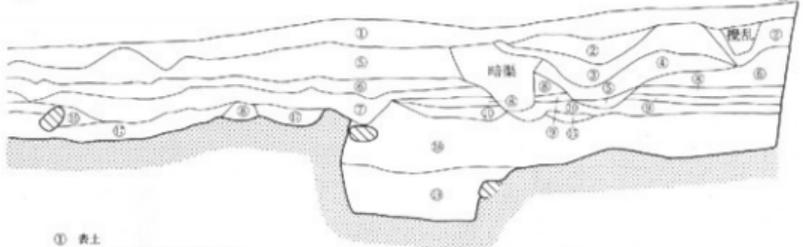
E



W

185.50m

E



- ① 表土
- ② 10YR 7/3 に近い黄棕色シルト
- ③ 10YR 5/3 に近い黄棕色シルト
- ④ 10YR 5/2 茶褐色シルト
- ⑤ 10YR 5/6 黄褐色シルト
- ⑥ 2.5Y 6/6 明黄棕色微細じりシルト
- ⑦ 2.5Y 5/4 黄褐色シルト
- ⑧ 2.5Y 4/8 黄色粘土
- ⑨ 2.5Y 5/1 黄灰色細砂
- ⑩ 10YR 6/1 相灰色細砂混じりシルト
- ⑪ 2.5Y 5/4 黄褐色シルト混じり層
- ⑫ 2.5Y 1/6 黄灰色シルト混じり層

- ⑬ 2.5Y 7/3 淡黄色シルト混じり層
- ⑭ 2.5Y 8/6 黄色層
- ⑮ 10YR 7/6 明黄灰色シルト
- ⑯ 2.5Y 8/6 灰色シルト混じり層
- ⑰ 2.5Y 7/2 灰色シルト
- ⑱ 2.5Y 5/4 黄褐色シルト
- ⑲ N 3/ 灰褐色粘土



第64図 第4調査区北壁土層断面実測図 (1/40)

遺物は唐津焼の皿(224)、備前焼の甕の口縁(225)、土師質の甕の口縁(226)が出土している。

〔SD12〕(第65図、図版33)

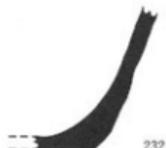
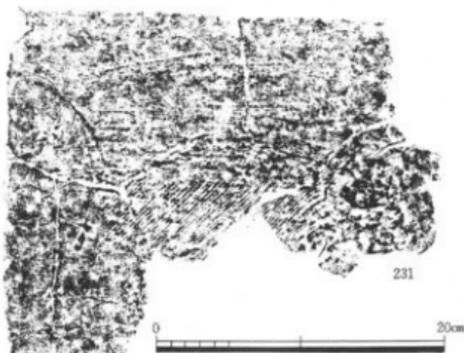
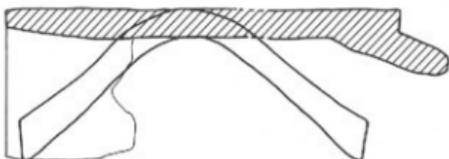
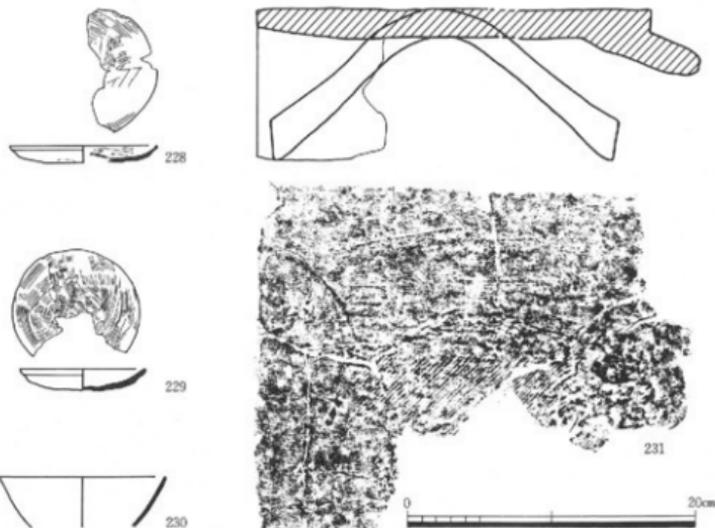
調査区の上流側の段の北東側で検出され、SK12付近からSE6に向かって直線的に約6m程度走った後、南西方向に真っすぐに9m走る。北東部分で最大幅1.5m以上、深さ0.2m、南東部分で最大幅1.5mを測る。北東部分の西側肩には約30×20×20cmの川原石が並べられ、溝の肩部分を補強していた。

出土遺物では土師質の皿(227)が図示できた。

〔SD13〕(第66図、図版33)



第65図 SD12出土遺物実測図



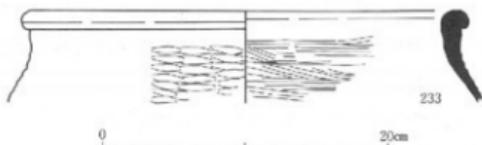
第66図 SD13出土遺物実測図

調査区の上流側の段の北東側で検出され、S K12付近から約3 m南西に向かって走る。この溝も流路と言うよりも落ち込み状の遺構である。南西端は暗渠と重複している。最大幅1.8m、深さ0.38mを測る。

出土遺物は瓦質の皿(228・229)、磁器の碗(230)、備前焼の甕の底部(232)、雁振瓦(231)が図示できた。

〔SD14〕(第67図、図版33)

調査区の上流側の段の北東側で検出され、南西に向かって約5 m走る。北東では東側に1条分岐している。最大幅2.0m、深さ0.34 mを測る。



第67図 SD14出土遺物実測図

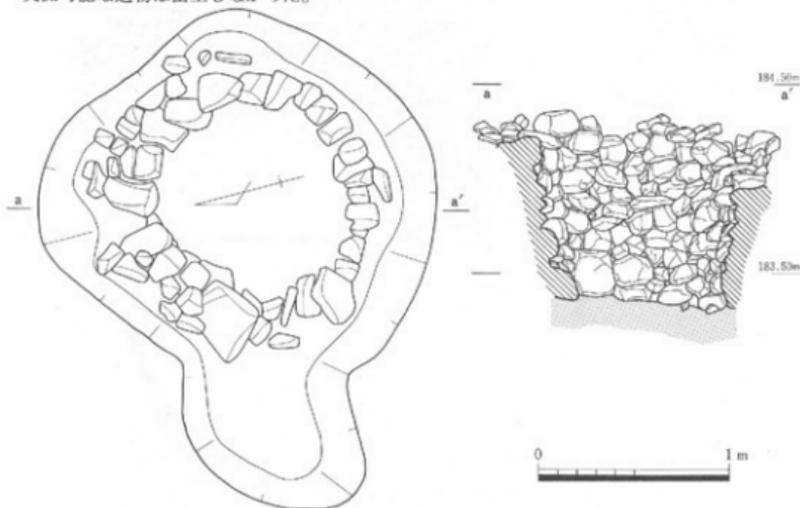
出土遺物は瓦質の甕(233)が図示できた。

(2) 井戸

〔SE3〕(第68図、図版17)

調査区の下流側の段の北隅で検出された石組井戸である。掘方及び石組の平面形は楕円形を呈する。掘方の長径2 m、短径1.8m、石組の内法の長径1.2m、短径1 m、深さ1.2mを測る。石組は最大約30×20×20cmの川原石を使用し、面を揃えて積み上げている。

実測可能な遺物は出土しなかった。



第68図 SE3遺構実測図(1/30)

〔S E 4〕（第69・70図、図版17・33・34）

調査区の下流側の段の南端中央で検出され、S D11に接するように位置する石組の井戸である。

掘方の平面形は楕円形を呈する。しかし積まれた石組の平面形は円形を呈している。

掘方の規模は長径1.6m、短径1.4m。石組の内法は径0.6m、深さは1.8mを測る。

石組は最大約40×20×20cmの垂角礫を含む大小の川原石を使用し、内面を揃えて積み上げている。

埋土は灰色系のシルトと粘土で植物遺体も多く含まれていた。

井戸は、地山直下の砂層まで掘削されており検出後も湧水がある。また、調査途中で北側の壁が一部崩壊し断面の実測ができなかった。

出土遺物は土師製の插鉢（234）・鉢（238）・甕（239・240）、瓦製の灯明台（235）・土釜（236）・播鉢（237）が図示できた。鉢（238）については平底の可能性が高い。また、甕（239・240）は大型品である。また、瓦製の灯明台は、本遺跡では貴重な出土品である。

〔S E 5〕（図版18）

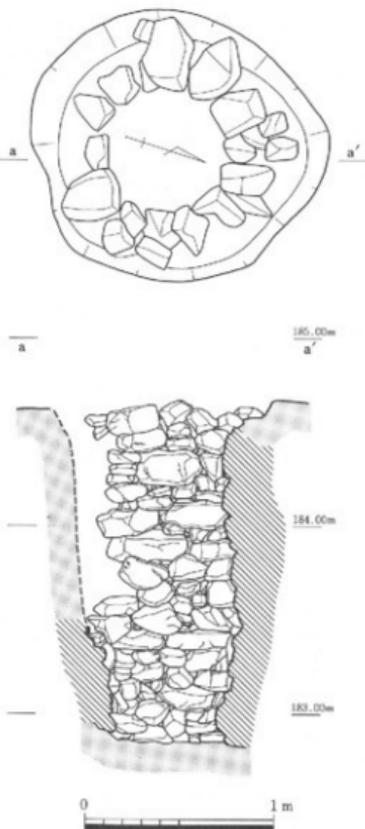
調査区の上流側の段の南西で検出され、S E 6と重複している。崩壊が激しくかろうじて石組井戸であることが判る。掘方及び石組の平面形は円形を呈していたと思われる。掘方の径1.3m、石組の内法の径0.6m、深さ0.7mを測る。石組は最大約50×20×20cmの川原石を使用している。

実測可能な遺物は出土しなかった。

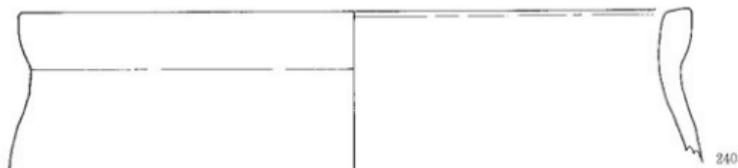
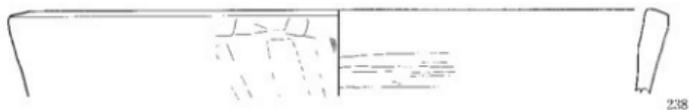
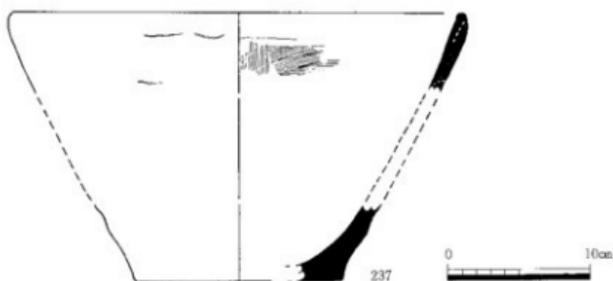
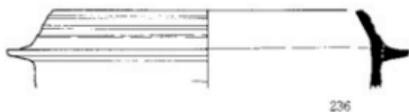
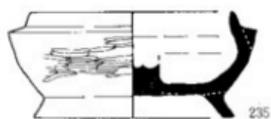
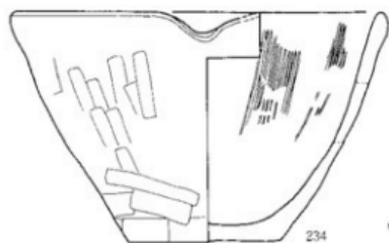
〔S E 6〕（第71図、図版18・34）

調査区の上流側の段の南西で検出され、北側がS E 5によって崩されている。掘方の平面形は楕円形を呈し、石組は方形に近い。掘方の長径1.7m、短径1.4m、石組の内法の一辺0.9m、深さ0.7mを測る。石組は最大約40×20×20cmの川原石を使用している。

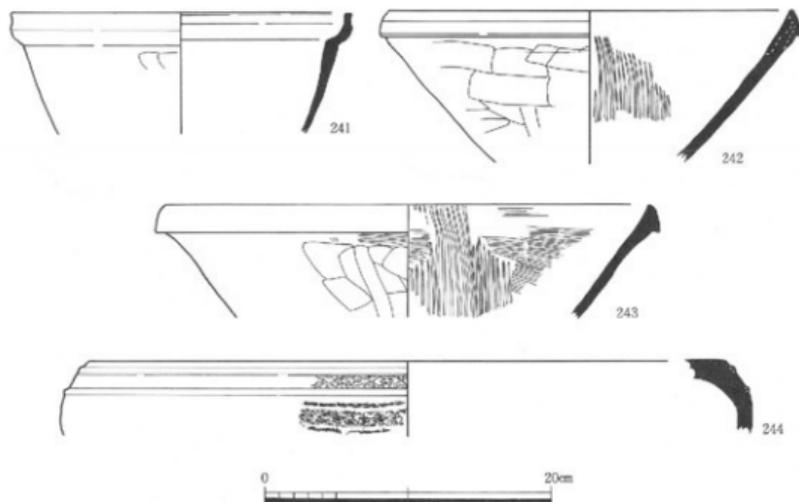
出土遺物は瓦製の鍋（241）・播鉢（242・243）・火舎（244）が図示できた。



第69図 S E 4 遺構実測図 (1/30)



第70図 SE 4 出土遺物実測図



第71図 SE 6 出土遺物実測図

〔SE 7〕

調査区の上流側の段の南西端で検出され、SE 6の南西約2 mに位置する。掘方及び石組の平面形は楕円形を呈する。掘方の長径1.6m、短径1.4m、石組の長径0.7m、短径0.6m、深さ1.15 mを測る。石組は最大約40×20×20cmの川原石を使用している。石組はやや乱雑な積み方がなされている。

出土遺物は図示できるものはなかった。

(3) 土坑

〔SK 5〕 (第72図、図版34)

調査区の下流側の段で検出され、SD11によって削平されている。平面形は楕円形を呈する。長径1.3m、短径0.56m、深さ0.2mを測る。

出土遺物は土師質の平底の小型の鉢(245)と瓦質の甕の口縁部(248)、白磁の皿(246)が図示できた。

〔SK 6〕 (第72図、図版34)

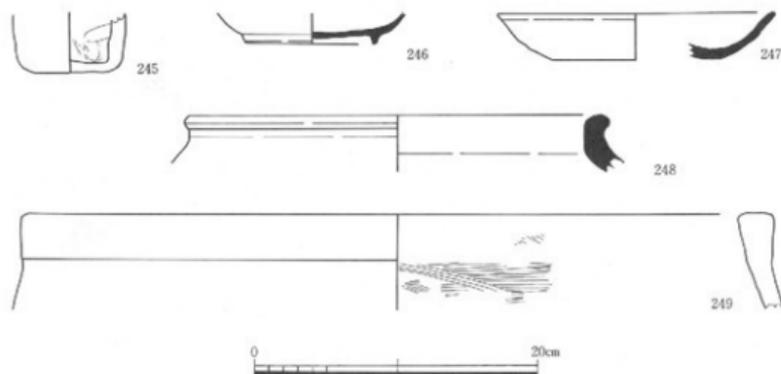
調査区の上流側の段でSW 6に接するように検出された。平面形は楕円形を呈する。長径2.15 m、短径1.55m、深さ0.4mを測る。一部に木質が残存しており、木桶が埋められていた可能性がある。

出土遺物は白磁の皿(247)が図示できた。

〔SK7〕（第72図、図版34）

調査区の上流側の段で検出され、SK6の南東側約1.5mに位置する。平面形は円形を呈する。径1.15m、深さ0.3mを測る。

出土遺物は土師質の甕(249)が図示できた。



第72図 SK5・SK6・SK7出土遺物実測図

〔SK8〕（第73・75図、図版34）

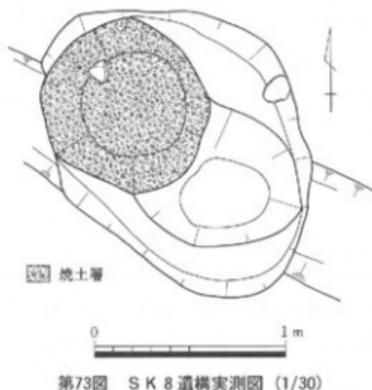
調査区の上流側の段で検出され、SK6の東側約5mに位置する。平面形はややいびつな楕円形を呈し、土坑中央部は後世の暗渠の為一部削平されている。長径1.77m、短径1.25m、深さ0.24mを測る。土坑内部は径0.9mと径0.8mの凹みがあり、径0.9mの凹みの壁は火を受け焼土層となっていた。また、埋土には焼土と炭が多量に混入しており、この遺構はカマドの可能性がある。

出土遺物は瓦質の火舎(253)が図示できた。

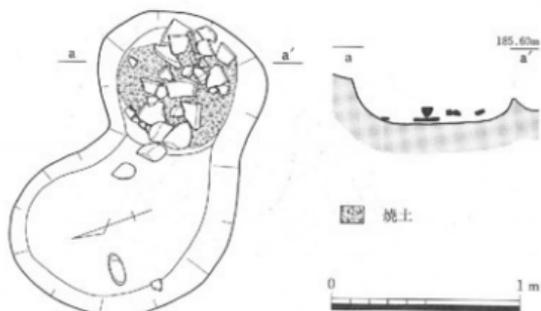
〔SK9〕（第74・75図、図版34）

調査区の上流側の段で検出され、SK8の南西側に接するように位置する。平面形はややいびつな瓢箪形を呈し、土坑南東側は溝によって一部削平されている。長径1.7m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。土坑内部は南東側が径0.65mで一段凹んでおり、壁は火を受け焼土層となっていた。また、埋土には焼土と炭が多量に混入していた。

遺物は軒平瓦の破片と瓦質の土釜が出土し、土釜(252)が図示できた。



第73図 SK8遺構実測図(1/30)



第74図 SK 9 遺構実測図 (1/30)

〔SK10〕 (第75図、図版34)

調査区の上流側の段で検出され、SK 7の南西側約1.5mに位置する。平面形は円形を呈する。径0.33m、深さ0.12mを測る。規模的には柱穴の可能性はある。

遺物は軒平瓦の破片と瓦器碗2点が出土し、軒平瓦は細片の為図示できなかったが、瓦器碗(250・251)は図示できた。

〔SK11〕

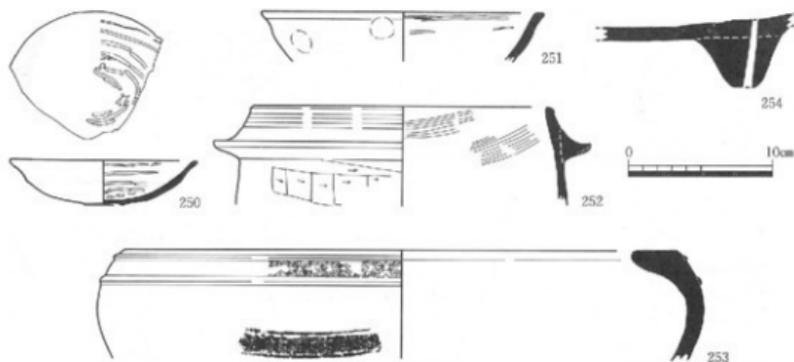
調査区の上流側の段で検出され、SK 7の南西側約9mに位置する。平面形は楕円形を呈する。長径1.27m、短径1.0m、深さ1.05mを測る。土坑の埋土はSK 6の埋土と同様で、他の土坑より時期が下るものと考えられる。

出土遺物は図示できるものはなかった。

〔SK12〕 (第75図、図版34)

調査区の上流側の段で検出され、SD12とSD13に挟まれるように位置する。土坑の北東側半分は調査区外である。平面形は長楕円形を呈している。長径1.4m、短径0.9m、深さ0.25mを測る。

出土遺物は土師質の火舎の脚部(254)が図示できた。

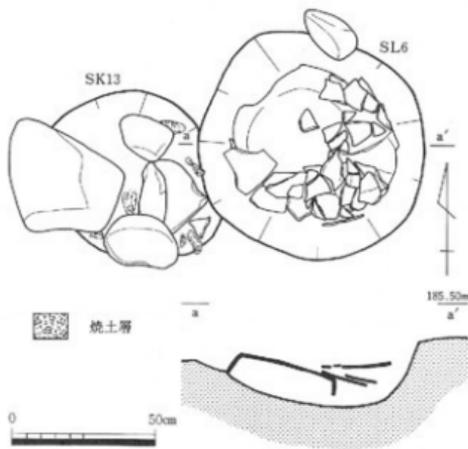


第75図 SK 8・SK 9・SK 10・SK 12出土遺物実測図

〔SK13〕（第76図）

調査区の上流側の段で検出され、SK9の西側約1mに位置する。平面形は円形を呈し、SL6によって東側が切られている。長径0.7m、短径0.6m、深さ0.35mを測る。土坑の壁の一部は火を受け焼土層を成す。埋土にも灰が多量に混入していた。また上部には最大40×30×20cmの川原石が4個のせられていた。この土坑もSK8と同様カマドの可能性が高い。

出土遺物は図示できるものはなかった。



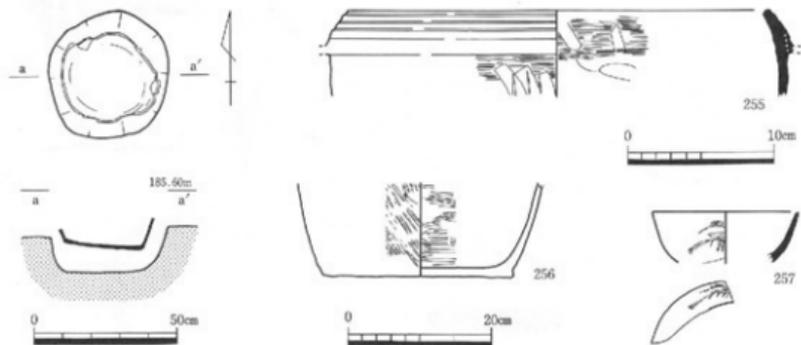
第76図 SK13・SL6遺構実測図（1/20）

（4）埋甕

〔SL1〕（第77図、図版35）

調査区の上流側の段で検出され、SK9の南側約2mに位置する。掘方の平面形は円形を呈している。大部分は削平を受け底部近くのみが残存していた。掘方の残存規模は径0.45m、深さ0.15mを測る。甕は掘方の底部より0.1m浮いた状態であった。

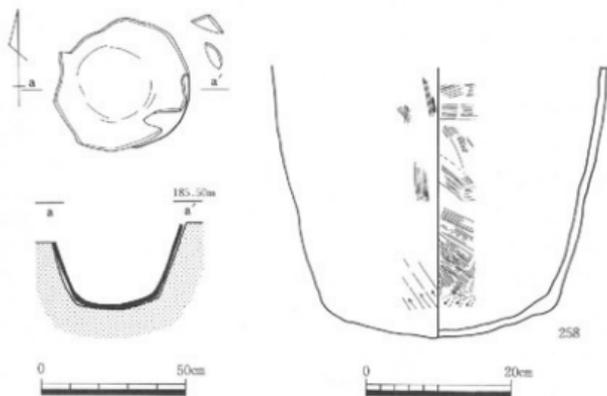
出土の甕（256）は土師質で底部径26cmと小型である。その他に瓦質土釜（255）、波佐見の染付の碗（257）が出土している。



第77図 SL1遺構及び出土遺物実測図（1/20）

〔SL2〕(第78図、
図版18・35)

調査区の上流側の
段で検出され、SL
1の南西側約2mに
位置する。掘方の平
面形は円形を呈して
いる。肩部から口縁
部は削平を受け体部
下半のみが残存して
いた。掘方の残存規
模は径0.45m、深さ
0.35mを測る。掘方



第78図 SL2遺構及び出土遺物実測図(1/20)

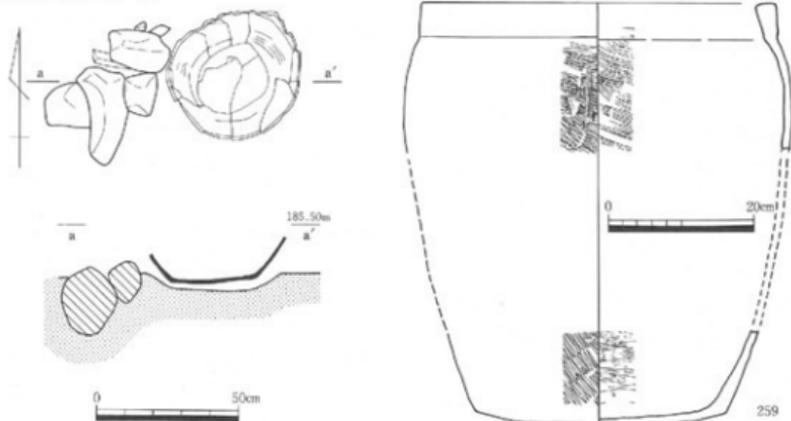
は堯の大きさちょうど掘られている。

出土の堯(258)は土師質で底部はやや丸底気味である。

〔SL3〕(第79図、図版35)

調査区の上流側の段で検出され、SL2の南西側約1mに位置する。掘方の平面形は円形を呈している。大部分は削平を受け底部近くのみが残存していた。掘方の残存規模は径0.5m、深さ0.05mを測る。

出土の堯(259)は土師質で底部はやや丸底気味である。口縁部が共に出土しているが体部中央は欠損している。

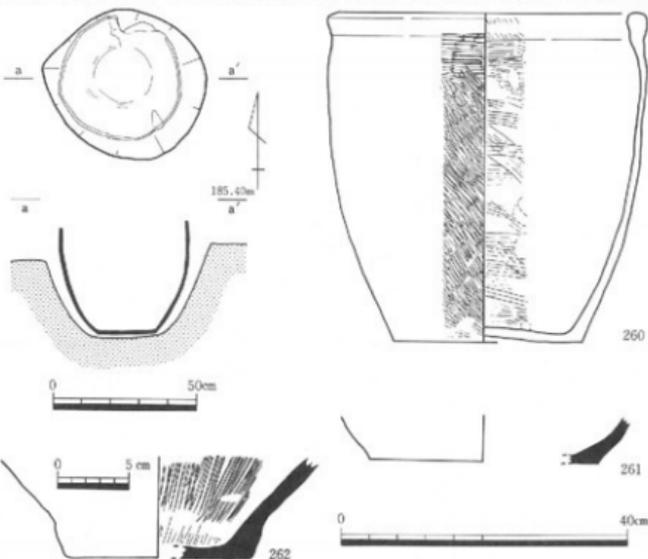


第79図 SL3遺構及び出土遺物実測図(1/20)

〔S L 4〕（第80図、図版35）

調査区の上流側の段で検出され、S L 3の西側約1mに位置する。掘方の平面形は円形を呈している。肩部から口縁部は削平を受け体部下半のみが残存していた。掘方の残存規模は径0.65m、深さ0.35mを測る。

出土の甕(260)は土師質でS L 1と同様に平底で小型である。甕以外に備前の描鉢(262)、甕底部(261)が出土している。

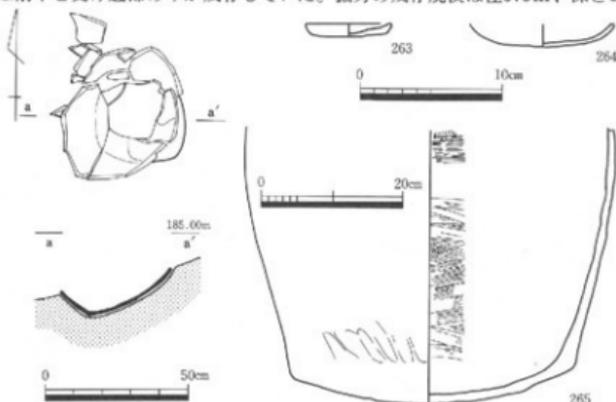


第80図 S L 4 遺構及び出土遺物実測図 (1/20)

〔S L 5〕（第81図、図版35）

調査区の上流側の段で検出され、S L 4の南西側約4mに位置する。掘方の平面形は円形を呈している。大部分は削平を受け底部のみが残存していた。掘方の残存規模は径0.5m、深さ0.05mを測る。

出土の甕(265)は土師質で底部はやや丸底気味である。体部が共に出土しており、体部下半が復元できた。その他に土師質の皿(263・264)が出土している。

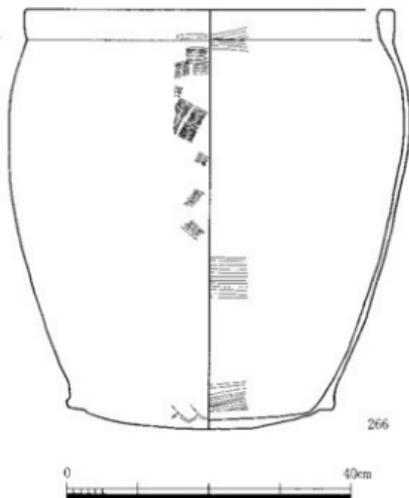


第81図 S L 5 遺構及び出土遺物実測図 (1/20)

〔S L 6〕（第76・82図、図版36）

調査区の上流側の段で検出され、S L 1の北側約3mに位置する。S K 13を切っている。掘方の平面形は円形を呈している。肩部から口縁部は削平を受け体部下半のみが裏返った状態で残存していた。掘方の残存規模は径0.8m、深さ0.3mを測る。

出土の甕（266）は土師質で底部はやや丸底気味である。体部、口縁部が共に出土しており、一箇体に復元できた。



第82図 S L 6 出土遺物実測図 (1/20)

（5）石列

〔S W 6〕（第83図、図版36）

調査区の上流側の段と下流側の段とに積まれていた石垣である。石積みはN-50°-Eの方向に長さ7m検出された。高さは0.5mで、最大40×30×20cmの川原石が1段～2段残っていた。南西端はN V 1の肩部まで伸びている。

遺物は土師質の大型の上釜（270）、瓦質の小型の直口の鉢（268）、と大型の直口の鉢（269）、磁器の皿（267）が出土している。



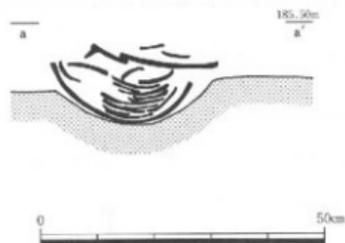
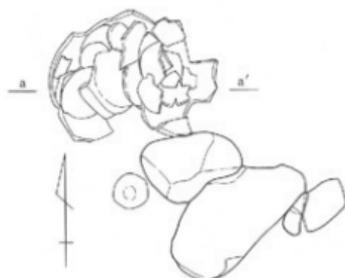
第83図 S W 6 出土遺物実測図

(6) 土釜埋納遺構

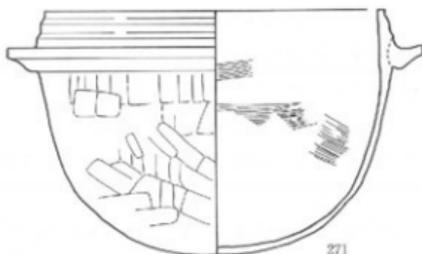
[S X 3] (第84~86図、図版19・36)

調査区の上流側の段で検出され、S L 1の南東側約5mに位置する。掘方がかろうじて残った土釜埋納の遺構である。遺構は削平を受け、土釜の体部下半と一緒に土釜の中に入れていた土師質、瓦質の皿が残っていた。掘方の残存規模は径0.3m、深さ0.1mを測る。この遺構は地鎮用のものと考えられる。

土釜(271)は土師質で、一緒に埋納されていた土師質の皿(272~311)は39点、瓦質の皿(312~336)は25点であった。土師質の皿の中に1点だけやや口径の大きいものがあった。



第84図 S X 3 遺構実測図 (1/10)



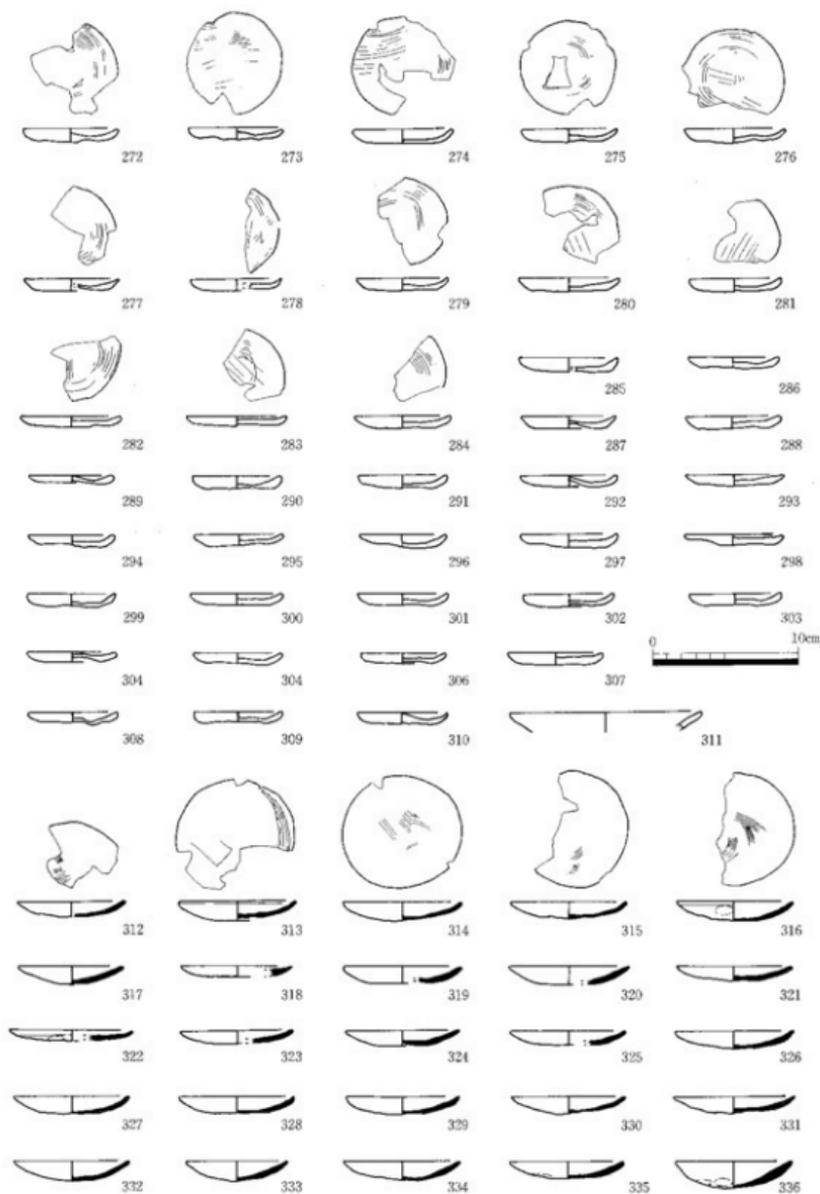
第85図 S X 3 出土遺物実測図 (1)

(7) 包含層 (第87~90図、図版37~39)

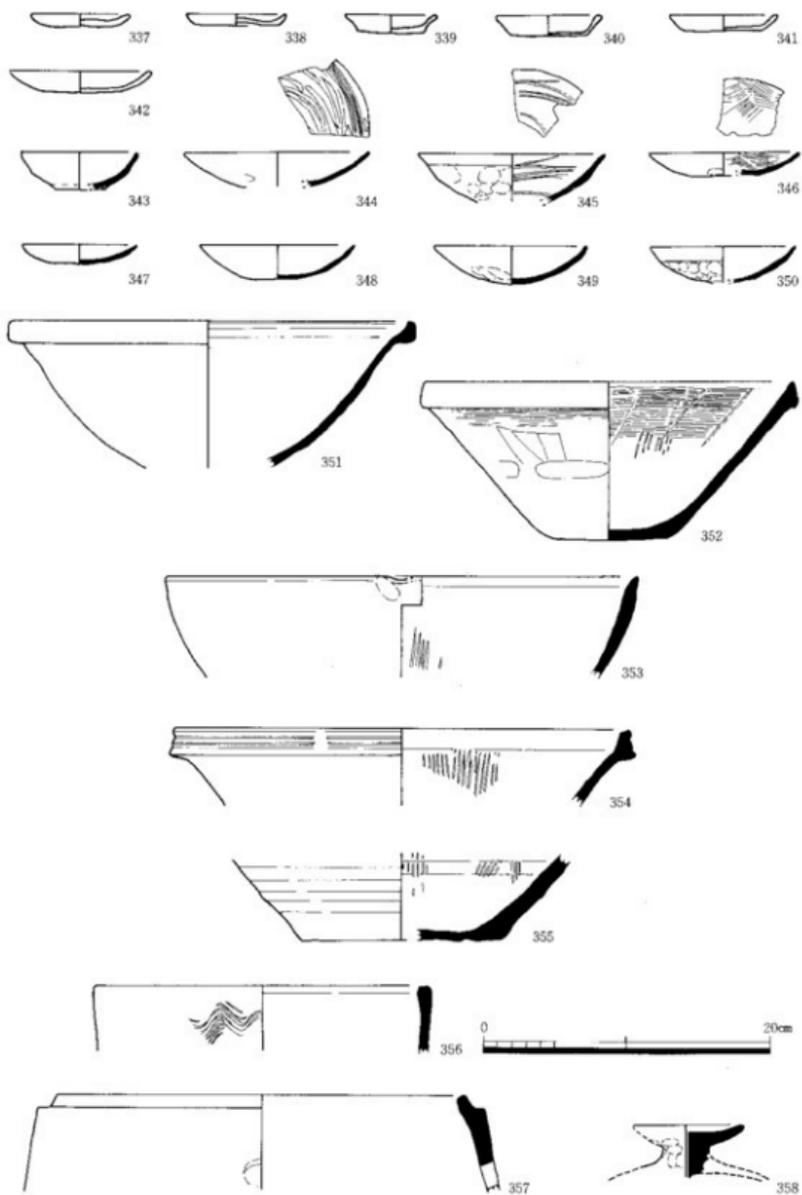
この調査区では、包含層が残存していたところはわずかであったが以下の遺物を図示することができた。

土師質では皿(337~342)と土釜(359~361)がある。皿の(342)は他の皿に比べ口径が大きい。また土釜では(359)は紀伊型、(360)は菅原の河内J型、(361)は同じく河内D型に相当するようである。

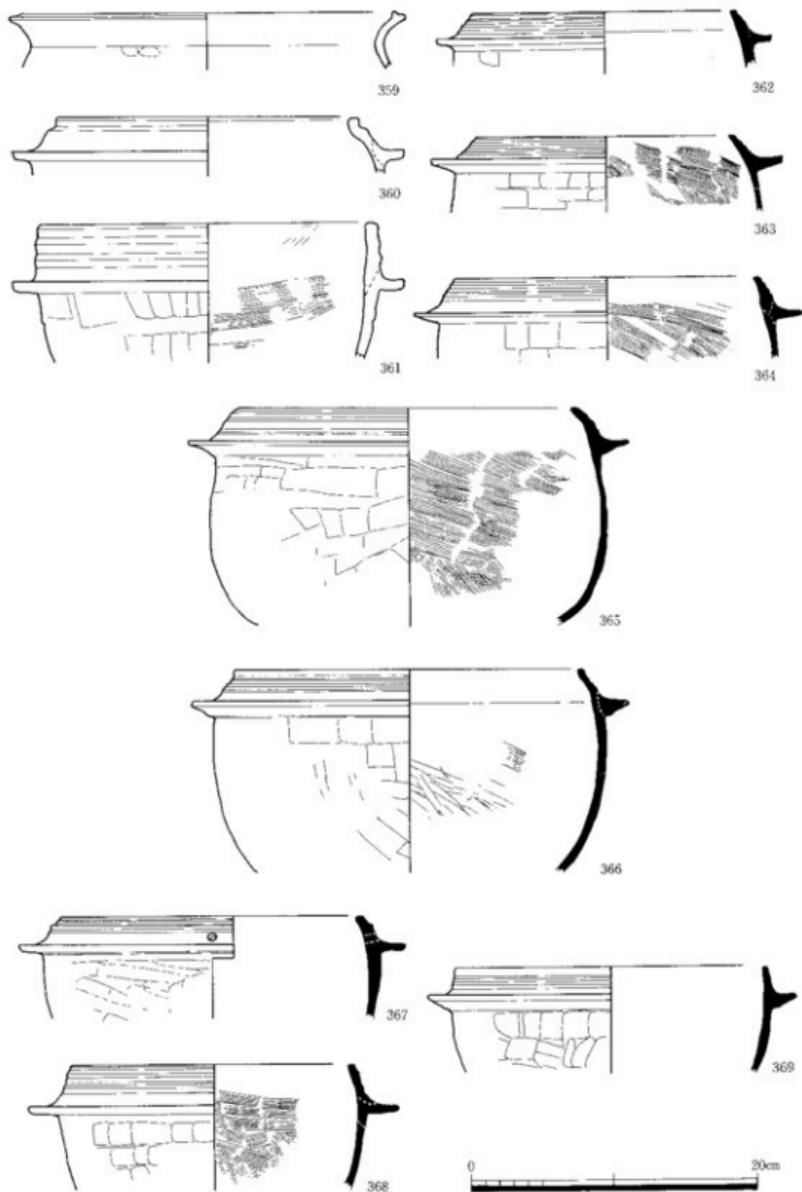
瓦器では塊(343~345・348~350)がある。(343)は小型の瓦器塊で撫でるように高台が貼り付けてある。(344・345)は尾上編年Ⅳ-2に該当する。(348~350)は内面に暗文を持たないもので、瓦器塊とするには若干の疑問を持つ。瓦質の土器では皿(346・347)、播鉢(352)、片口鉢(353)、直口鉢(356)、火舎(357)、瓦燈(358)、土釜(362~369)、甕(370~372)がある。皿の(346)は内面にハケ目を有する。(353)は小さな片口を持ち内面に播り目が見られ



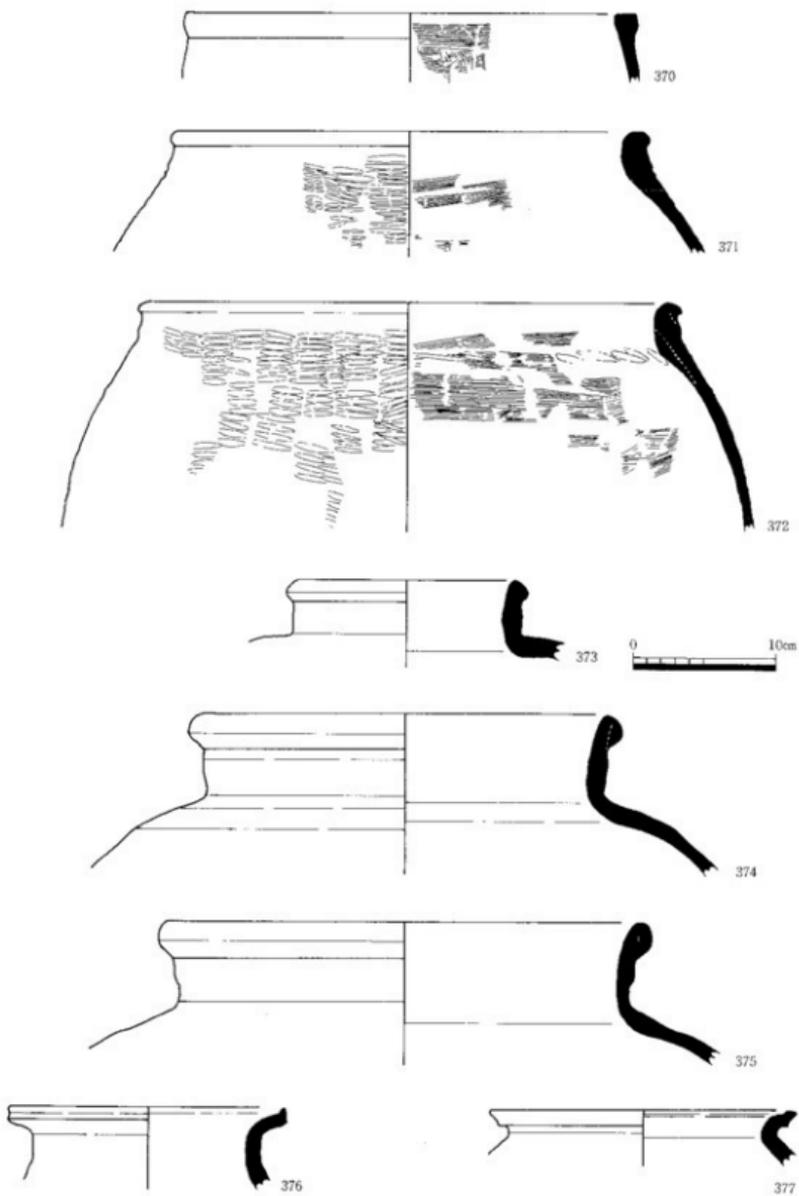
第86图 S X 3 出土遗物实测图 (2)



第87图 第4调查区包含层出土遗物实测图(1)



第88图 第4调查区包含层出土遗物实测图(2)



第89图 第4调查区包含层出土遗物实测图(3)



第90図 第4調査区包含層出土遺物実測図(4)

る。(356)の直口鉢の口縁には波状文が施されている。土釜は菅原編年の河内D型であるが、(366・367)は外面鋸下の横位のへら削りの単位が横長である。甕は口縁部と頸部とは明瞭でない。東播系では(351)の練鉢だけである。

陶器では備前の插鉢(355)、壺(373)、甕(374・375)がある。丹波では插鉢(354)、常滑では小型品の甕(376・377)瀬戸では碗(390・391)がある。伊万里では染付碗(388)、波佐見では青磁の碗(383)と染付の碗(387)、唐津は碗(389)がある。

瓦では連珠文の軒平瓦（393）と巴文の軒丸瓦（394）がある。

輸入品では青磁の碗（378～381）、白磁の皿（382）、青花の碗（384～386）がある。青花は全て景德鎮である。他に祥符元寶と識読できる銅銭（392）が1枚ある。

出土品は時期的には14世紀から17世紀までのものを含んでいる。しかし、中心となるのは15世紀・16世紀である。

第5節 第5調査区

第5調査区の中央には北東方向にNV1が流れ、その両岸で溝や土坑、窯状遺構が検出された。しかし遺構からの出土遺物はなく、層序から判断すると、これらの遺構は窯状遺構を除き、おそらく近世を中心としたものと考えられる。(付図4)

1. 中世

(1) 窯状遺構

〔SY3〕(図版20)

SY3は調査区の北端に位置する。平面形はNV1の水流に削平され、また窯体に相当する赤色酸化層が脆弱なため詳細な原形を推測できない。規模は検出長1.1m、検出幅0.8m、深さ0.2mであった。検出された位置から第1調査区で出されたSY1・SY2と同様にNV1の西岸に並んでいたと考えられ、第1調査区と第5調査区間の調査対象外地にも窯状遺構が現存、あるいは存在した可能性がある。また用途については立地から判断して炉跡というより、SY1・SY2と一群を成す木炭窯の可能性が高い。

遺物は出土しなかった。

(2) 自然流路

〔NV1〕(第92図)

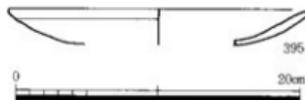
NV1は第1調査区に見られたように、近世になって大規模に埋立造成されたことが、層位(第92図)から考えられる。規模は検出した最大幅16.5m、最小幅11m、深さ2mを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) 包含層(第91図、図版39)

包含層からは上師質の皿(395)が出土した。

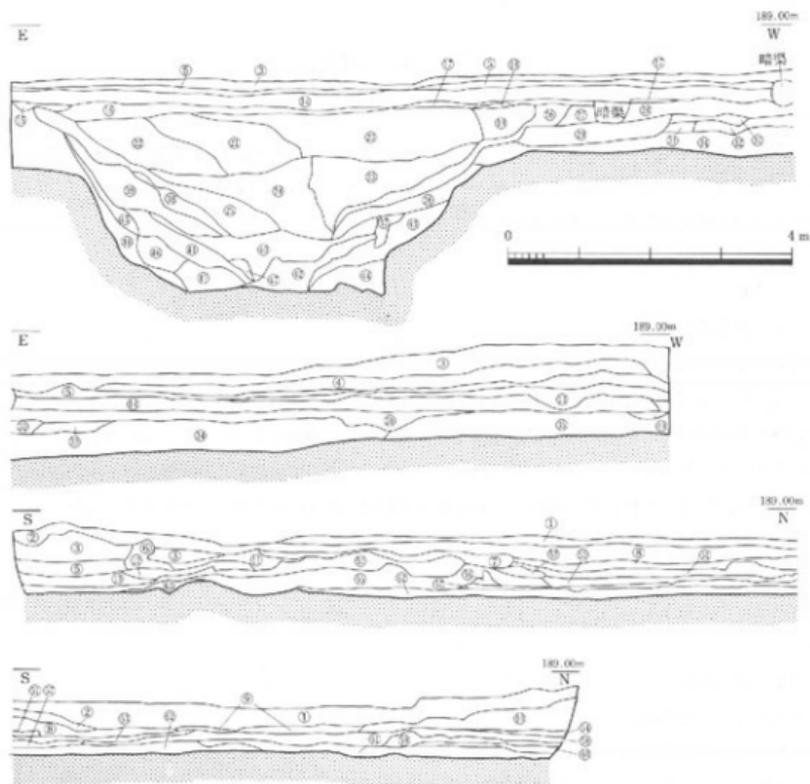
口縁部はヨコナデを施し、内面及び外面にはナデを施す。



第91図 第5調査区包含層出土遺物実測図

2. 近世

層序から近世の遺構と考えられる溝や土坑は出土遺物がないため、詳細は不明である。

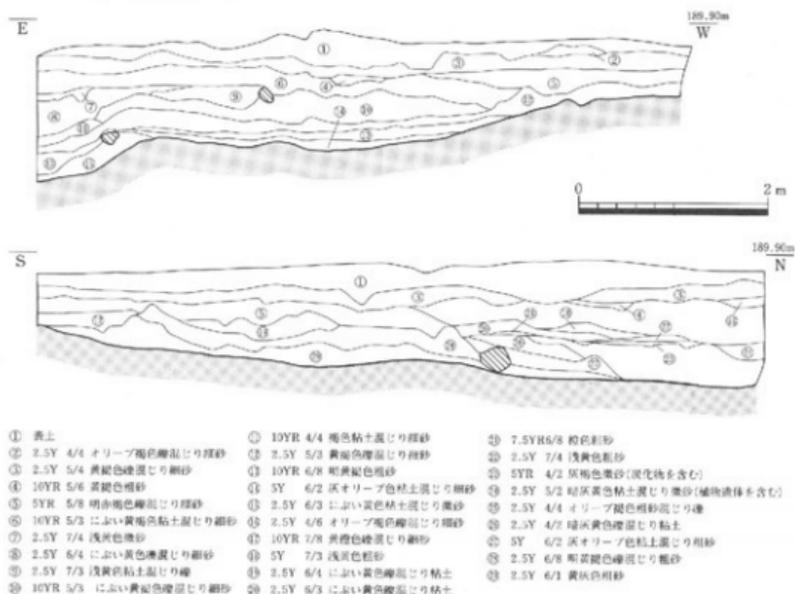


- | | | |
|---------------------------|---------------------------|----------------------------|
| ① 表土(腐土) | ②⑤ 2.5Y 7/6 明黄褐色微湿じり微砂 | ④⑩ 7.5YR7/5 褐色微砂 |
| ② 10YR 6/6 明黄褐色粗砂 | ③⑦ 7.5YR7/8 黄褐色微湿じり粘土 | ⑪ 5G 6/1 オリーブ灰色微湿じり粘土 |
| ③ 10YR 6/4 にぶい黄褐色粗砂 | ④⑧ 2.5Y 7/3 淡褐色微湿じり微砂 | ⑫ 2.5Y 7/4 淡灰色微湿じり粘土 |
| ④ 5Y 7/4 浅黄色微砂 | ⑤⑨ 10YR 7/6 明黄褐色微湿じり微砂 | ⑬ 7.5Y 4/2 オリーブ色微湿じり粘土 |
| ⑤ 10YR 6/8 明黄褐色微湿じり粗砂 | ⑥⑪ 7.5YR7/8 黄褐色微湿じりシルト | ⑭ 10GY 5/1 緑灰色微湿じり粘土 |
| ⑥ 10YR 6/6 明黄褐色粗砂 | ⑦⑫ 10YR 7/3 にぶい黄褐色粗砂 | ⑮ 2.5Y 7/1 浅灰色微湿じり粘土 |
| ⑦ 2.5Y 7/6 明黄褐色微砂 | ⑧⑬ 10GY 8/1 明黄灰色微砂 | ⑯ 2.5Y 6/8 灰色微湿じり粘土 |
| ⑧ 10YR 6/2 灰黄褐色シルト | ⑨⑭ 10GY 6/1 緑灰色微砂 | ⑰ 10YR 6/8 明黄褐色粗砂微湿じり粘土 |
| ⑨ 10YR 6/3 にぶい黄褐色微湿じり粗砂 | ⑩⑮ 10YR 7/2 にぶい黄褐色粗砂 | ⑱ 2.5Y 5/2 明黄褐色粗砂微湿じり粘土 |
| ⑩ 10YR 6/8 明黄褐色微湿じり粗砂 | ⑪⑯ 5Y 7/2 灰白色 微砂 | ⑲ 5Y 5/2 灰オリーブ色微砂 |
| ⑪ 2.5Y 6/6 明黄褐色粘土じり粗砂 | ⑫⑰ 2.5Y 7/3 淡灰色微湿じり微砂 | ⑳ 2.5Y 5/3 明黄褐色微湿じり粗砂 |
| ⑫ 2.5Y 6/3 にぶい黄褐色粗砂微湿じり粘土 | ⑬⑱ 7.5GY7/1 明緑灰色粗砂 | ㉑ 10YR 6/1 灰白色微湿じり粘土 |
| ⑬ 10YR 6/8 明黄褐色粗砂微湿じり微砂 | ⑭⑲ 2.5Y 7/2 灰黄色微湿じり粗砂 | ㉒ 2.5Y 5/3 黄褐色微湿じり粗砂 |
| ⑭ 5Y 7/2 灰白色微湿じり粗砂 | ⑮⑳ 2.5Y 7/8 黄褐色微湿じり粘土 | ㉓ 10YR 6/1 灰白色粗砂微湿じり粘土 |
| ⑮ 10YR 7/8 黄褐色微湿じりシルト | ⑯⑳ N 6/1 灰色シルト | ㉔ 2.5Y 6/1 灰白色微湿じり粗砂 |
| ⑯ 7.5YR5/8 明褐色微砂 | ㉑ 10G 6/1 緑灰色微湿じり粘土 | ㉕ 10YR 6/6 明黄褐色微湿じり粘土 |
| ⑰ 7.5YR7/6 黄褐色微砂 | ㉒⑳ 2.5GYR/1 灰白色微湿じりシルト | ㉖ 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色微湿じり粘土 |
| ⑱ 2.5Y 6/1 黄灰色粗砂 | ㉓⑳ 2.5GY7/1 暗オリーブ灰色粗砂 | ㉗ 2.5Y 6/6 明黄褐色微湿じり粗砂 |
| ⑲ 2.5Y 6/2 灰黄色微湿じり粗砂 | ㉔⑳ 10YR 6/6 明黄褐色微湿じり粘土 | |
| ⑳ 10YR 6/6 明黄褐色微湿じり粗砂 | ㉕⑳ 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色微湿じり粘土 | |
| ㉑ 10YR 7/3 にぶい黄褐色微湿じり粗砂 | ㉖⑳ 2.5Y 6/6 明黄褐色微湿じり粗砂 | |
| | | ㉗⑳ 7.5YR7/5 褐色微砂 |
| | | ㉘⑳ 5G 6/1 オリーブ灰色微湿じり粘土 |
| | | ㉙⑳ 2.5Y 7/4 淡灰色微湿じり粘土 |
| | | ㉚⑳ 7.5Y 4/2 オリーブ色微湿じり粘土 |
| | | ㉛⑳ 10GY 5/1 緑灰色微湿じり粘土 |
| | | ㉜⑳ 2.5Y 7/1 浅灰色微湿じり粘土 |
| | | ㉝⑳ 2.5Y 6/8 灰色微湿じり粘土 |
| | | ㉞⑳ 10YR 6/8 明黄褐色粗砂微湿じり粘土 |
| | | ㉟⑳ 2.5Y 5/2 明黄褐色粗砂微湿じり粘土 |
| | | ㊱⑳ 5Y 5/2 灰オリーブ色微砂 |
| | | ㊲⑳ 2.5Y 5/3 明黄褐色微湿じり粗砂 |
| | | ㊳⑳ 10YR 6/1 灰白色微湿じり粘土 |
| | | ㊴⑳ 2.5Y 6/1 灰白色微湿じり粗砂 |
| | | ㊵⑳ 10YR 6/2 灰白色微湿じり粗砂 |
| | | ㊶⑳ 2.5GY7/1 暗オリーブ灰色微湿じりシルト |
| | | ㊷⑳ 2.5Y 4/2 暗黄褐色微湿じり粘土 |
| | | ㊸⑳ 10YR 6/6 明黄褐色粗砂微湿じり粗砂 |

第92図 第5調査区南壁・西壁土層断面実測図 (1/80)

第6節 第6調査区

第6調査区では自然流路であるNV1を検出したのみで、遺構は検出されなかった。仮に生活面の存在を考えるならば、第5調査区と同様調査区の西側、つまりNV1の左岸に遺構が存在する可能性がある。(付図4)



第93図 第6調査区南壁・西壁土層断面実測図 (1/60)

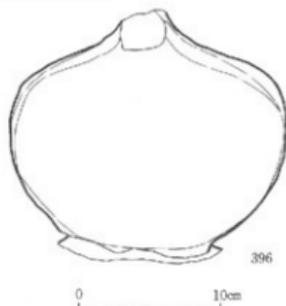
1. 中世

(1) 自然流路

〔NV1〕 (第94図、図版39)

NV1は調査区の全域で確認され、第5調査区へと北東方向に流れる。幅は調査区に限りがあるため全幅は確認できなかった。深さは0.3~0.45mを測る。

遺物は五輪塔の空輪(396)のみが出土した。下部を欠損するが、形状や大きさから原形は風輪と一を成すものと考えられる。空輪の出土により近隣に墓地の存在が考えられる。石は砂岩製である。法量は直径20cm、残存



第94図 第6調査区NV1出土遺物実測図

高18cmを測る。

(2) 包含層 (第95図、図版39)

包含層からは瓦質の火舎 (397) が出土した。外面口縁部には上下横方向に2条の凸線をもち、その間に渦巻状のスタンプ文が連続する。



第95図 第6調査区包含層出土遺物実測図

第3章 まとめ

第1節 調査成果

今回の調査では天野山金剛寺境内の南側の谷に位置する旧境内の様子を知る多くの好資料が得られ、既往の調査成果にも考察を加える資料が追加された。これらを成果ごとにまとめると以下のとおりである。

1. 天野山金剛寺遺跡における塔頭の盛衰

第1調査区の下層遺構と第4調査区の遺構では、和泉型瓦器塚のⅣ-1から5に相当するものが出土し、これらの遺物を伴う遺構は14世紀前半から15世紀後半のものと考えられ、調査区内の旧境内において塔頭がこの時期に最も盛行したことが判明した。また、第1調査区の上層遺構と第2・第5調査区からは近世の遺構や遺物を検出したことから、金剛寺境内図に見られるような塔頭が、境内の南側の谷において14世紀前半から近世に入るまで継続的に営まれていたことが確認できた。

また、第3調査区のNV1からは天野山金剛寺の創建時期を遡る土師器甕（8世紀初頭）が出土したが、この資料が境内の南側の谷において、天野山金剛寺の創建時期を遡らせるものなのか、創建に関わる前身の遺跡の存在を示すものなのか、あるいは創建以前に関連のない遺跡が存在していたことを示すものなのかは不明である。

2. 塔頭の規模

検出された遺構には、塔頭間の境界を示す可能性がある遺構がいくつかあった。第1調査区では南西に位置する山の斜面から北東方向にかけてSW2が、第4調査区では天野山の南西斜面から南西方向にかけてSW6が検出されているが、これらは谷の中央に位置するNV1に向かう排水の便を考慮した機能を備えており、おそらくこのような規則性をもつ石垣や溝によって塔頭の境界は区画されていたと考えられる。

3. 焼土層の年代

第1調査区の北端に位置するSX1の北側付近においては、中世の遺構面直上で焼土層が検出された。焼土層は検出範囲が狭く、層中に包含する遺物は皆無であったが、層序と周辺遺構の出土遺物から14世紀に起こった火災によるものと考えられる。この焼土層の時期を14世紀と考える傍証が天野山金剛寺の文献に記されている。文献では天野山金剛寺が延元2年（1337）と正平15

年(1360)に、戦火により塔頭などが焼失したことが伝えられている。しかし、いずれの年代が相当するのかが不明である。

第1調査区の北に位置する1974年度の調査地においても焼土層が検出されているが、これらの調査区はともに西除川の西岸に立地し、しかも近接地ということを考慮すると1974年度の調査地において検出した焼土層は14世紀代の火災時に形成された可能性が高い。

4. 土釜埋納遺構の盛行時期

天野山金剛寺遺跡では数例の土釜埋納遺構が検出されているが、すべて地鎮遺構と考えられる。土釜と土釜の内部に内蔵された土器の組み合わせは様々である。土釜については土師質の和泉D₁型と瓦質の和泉D₂型に相当するものがあり、瓦質皿については尾上編年に後続すると考えられるものが伴う。年代については、土釜と瓦質皿の編年から14世紀後半から16世紀初頭にかけて盛行したことがわかった。

以上のように、今回の天野山金剛寺遺跡の発掘調査では数多くの貴重な成果を得たが、調査結果の十分な分析や検討を尽くせなかった。今後の天野山金剛寺遺跡における考古資料の増加と文化財学における各分野の総合的な調査研究を望むものである。

第4章 天野山金剛寺遺跡の考古地磁気年代推定

(株)夏原技研 夏原信義

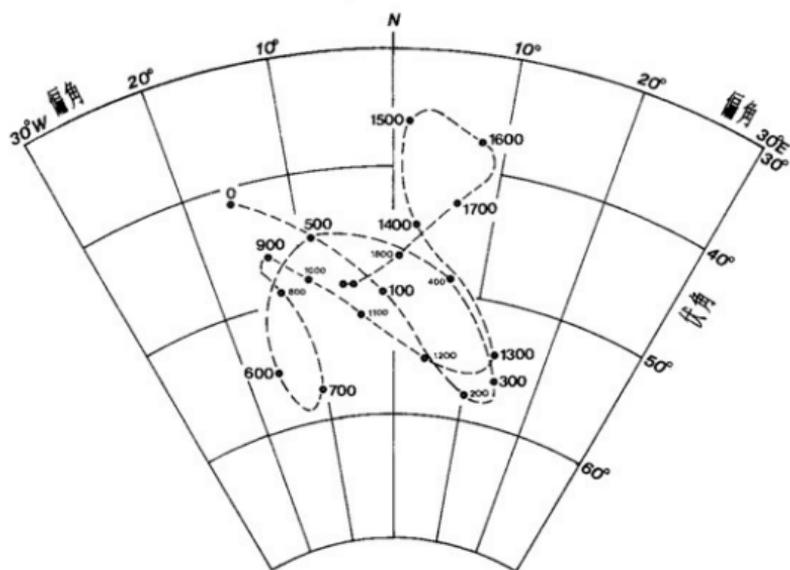
河内長野市天野山金剛寺遺跡で発掘調査された遺構の焼土から、考古地磁気年代推定用の試料を、平成5年2月2日に採取した。その熱残留磁気測定結果および年代推定の結果について報告する。

第1節 考古地磁気年代推定の基礎

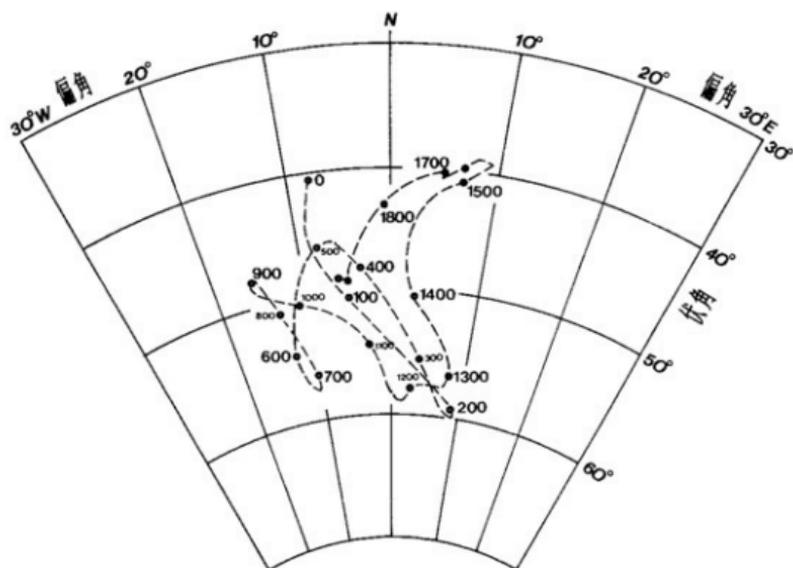
磁石は北を指す。地磁気(地球磁場)が存在するためである。地磁気はベクトル量で、ある地点における地磁気を記述するには、方向(偏角と伏角)と大きさ(全磁力)が必要である。一般に、磁気コンパスが北として示す方向(磁北)は、真北(地区の経線方向)からずれている。この磁北と真北の間の角度が偏角である。磁針をその重心で支え、磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面の下になるように傾く。この傾斜角が伏角である。河内長野市の現在の偏角は約 6.4° Wで、伏角は約 48° である。また、全磁力は、約0.45エルステッドである。これら地磁気の三要素(偏角・伏角・全磁力)は観測する地点によって異なる値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いたときのできる磁場分布に近似される。この棒磁石の軸方向は、自転軸から約 11.5° 傾いている。この磁軸と地表との交点が地磁気北(南)極である。

地磁気は絶えず変動し、時代と共にその地磁気北極の位置を変える。従って、ある地点で観測される偏角・伏角の値も時代と共に変化する。方向だけではなく、大きさ(全磁力)も変化する。この変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

歴史時代の地磁気永年変化は、岩石や焼上の残留磁化の測定を基礎とする考古地磁気測定によって明らかにすることができる。どんな物質でも、ある(強)磁場中に置かれると磁化を帯び、そして磁場が取り除かれると、普通の物質からは磁化が消える。しかし、強磁性物質(磁石になる物質)では、外部磁場が消えても磁化が残る。これが残留磁化である。残留磁化の強さや安定性は、磁場中に置かれた時の状態によって異なる。残留磁化はその獲得方法の違いによっていろいろな名前と呼ばれる。考古地磁気学で地磁気の化石として最もよく利用するのは、熱残留磁化である。岩石には少量の強磁性粒子(赤鉄鉱や磁鉄鉱などの鉄の酸化物)が含まれている。火成岩では、高温のマグマの状態から冷えて岩石になる過程で、強磁性粒子がその時の地磁気によ



第96図 広岡 (1977) による地磁気永年変化曲線



第97図 Shibuya (1980) による地磁気永年変化曲線

て磁化を帯び、冷えてからはその残留磁化を保持し続ける。これが熱残留磁化である。土も焼かれると、冷却の過程で同様の熱残留磁化を獲得する。熱残留磁化の性質を簡単にまとめると、次のようになる。岩石の誕生時または土が焼かれた時の地磁気方向を記録していて、その大きさは地磁気の大きさに比例し、何億年も長い期間でも変質しないということになる。これらの性質によって、地磁気の化石として利用が可能なのである。遺跡の焼土の熱残留磁化測定から得られた、過去2000年間の西南日本での、偏角-伏角の変化を第96図・97図に示す。偏角は20°Wから15°E、伏角は35°から60°の間で変化している。第96図・97図のような地磁気永年変化の標準曲線が得られると、逆に、年代の確かでない遺跡の焼土の残留磁化を測定し、永年変化曲線と比較することで、その年代の推定を行うことができる。これが考古地磁気による年代推定である。この方法は、¹⁴C法やフィッション・トラック法のような放射（絶対）年代測定法とは異なり、それだけで独立して年代を決定できない。普通、偏角と伏角の組合せで永年変化曲線から2つか3つの候補年代が出てくる。そのうちの何れを採用するかは、考古学的推定に頼ることになる。

日本での考古地磁気研究はWatanabe (1959) により始められ、1960年代にはいくつかの地磁気永年変化曲線が公表されている (Kawai *et al.*, 1965; Yukutake *et al.*, 1964など)。これらの研究は、測定データ数の不足などにより、各々の地磁気永年変化曲線に多少違いが見られ、年代推定を試みるとなると、どの永年変化曲線を使うかにより大きな差が生じてしまうものであった。その後、Hirooka (1971) は、近畿地方を主とした大量の測定データから過去2000年間の地磁気永年変化曲線を求めた。これにより、西南日本におけるほぼ正確な地磁気永年変化曲線が得られたのである。Shibuya (1980) は、Hirooka (1971) とそれ以後の主に大阪大学基礎工学部における考古地磁気測定結果をまとめて、地磁気永年変化曲線を改定した。広岡曲線との差はほとんど見られないが、公表されている中では最も測定データ数の多い曲線であり、信頼度は高い。Hirooka (1971) とShibuya (1980) の永年変化曲線は、偏角と伏角に分けて提示されているが、年代推定は偏角-伏角図で行う方がより妥当であると考えられるようになり、広岡 (1977) は1971年に公表した永年変化曲線を偏角-伏角図に再プロットしている (第96図)。Shibuya (1980) の永年変化曲線を偏角-伏角図に表すと第97図のようになる。本報告では、Shibuya (1980) の地磁気永年変化曲線 (第97図) を用い、偏角-伏角図上に残留磁化測定結果をプロットし、誤差角 (α_m) を考慮した上で年代を推定している。

第2節 試料の採集と測定方法

1. 試料採取方法

遺構の焼土から次の様な手順で試料を採取する。

- (1) 遺構の焼土面に先の尖ったハンマー (瓦用ハンマー) で、1辺が数cm程度の立方体試料

を取り出すための溝を、試料が床面から外れないように、手で押さえながら丁寧に掘る。

- (2) 溝を掘り終わった後、掘り込み作業中に試料表面についた砂や石を刷毛で丹念に取り除く。
- (3) 薄く溶いた石膏をビニール袋に入れ、試料全体にかけて表面を補強する。
- (4) 乾燥後、やや固めの石膏を試料上面にかけ、1辺5cmの正方形のアルミ板をすばやく押しつける。石膏が固まるのを待って、アルミ板を外す。
- (5) アルミ板を用いて作った平面の最大傾斜の方位と傾斜角を、考古地磁気用磁気コンパスで測定し、平面上に方位測定位置を示すマーク（平面を定義する3つの点）と試料番号を記入する。
- (6) ハンマーで試料を掘り起こし、試料の底面を石膏で補強し、新聞紙等に包み持ち帰る。

2. 試料整形方法

遺構で採取した試料はそのままでは測定できないので、試料整形を以下のように行う。

- (1) 試料を1辺3.5cmの立方体に切断するために、プラスチックの型板（34×34mmの正方形）を利用し枠取りの線を引く。この時、型板のマークと試料表面の方位測定位置を示すマーク（3点）を合わせる。
- (2) 試料温度が上がるのを防ぐために冷却水をかけながら、ダイヤモンド・カッターで1面ずつ切断する。切断面が崩れないように石膏で補強し、次の面の切断を行う前に試料を充分乾燥させる。この作業を5回繰り返すと立方体試料が得られる。
- (3) 試料表面についた余分な石膏をカッターで削り落とす。

3. 熱残留磁気測定とデータ整理

試料の熱残留磁気の測定には、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85）を使用した。

測定結果として得られるデータは、試料に設定した座標に対するものなので、試料を遺構の元の位置に戻した時の真北を基準方向とする座標に対するものに変換しなければならない。そのためには、試料が残留磁気を獲得した時の位置（地理的緯度、経度）、および方位（試料の一つの基準面の走向、傾斜）が必要である。位置については、2万5千分の1程度の尺度の地形図から、その遺構の緯度、経度を読み取ればよい。方位は、試料採集(5)の作業で磁気コンパスを使って測定している。磁気コンパスの方位は、磁北に対するものなので、真北に対する方位に直すために、試料採取地点の現在の偏角分を補正する必要がある。現在の地磁気偏角は、国土地理院の偏角分布の実験式から求めることができる。

測定にはいろいろな要因での誤差がつきものであるため、一つの遺構から10個程度の試料を採取している。これらの試料の個々の測定で得られた偏角 (D_i)、伏角 (I_i) から平均値 (D_m , I_m) を求める。ここで用いる統計学的方法是Fisherによって確立されたものである。各試料の測定値

を、方向 (Di, li) の単位ベクトルとして取り扱う。

まず、n組の (Di, li) より

$$N = \sum \cos li \cdot \cos Di \quad (\text{北向きの成分})$$

$$E = \sum \cos li \cdot \sin Di \quad (\text{東向きの成分})$$

$$Z = \sum \sin li \quad (\text{鉛直の成分}) \text{ を求めると、}$$

合ベクトルの大きさ R、および Dm, Im は、

$$R = (Z^2 + N^2 + E^2)^{1/2}$$

$$Dm = \tan^{-1} E/N$$

$$Im = \sin^{-1} Z/R \text{ で与えられる。}$$

このとき、信頼度係数 k は、

$$k = (n-1) / (n-R) \text{ となる。} k \text{ が大きいほど、方向の集中はよい。}$$

誤差角 α_m は、危険率 5% として

$\alpha_m = \cos^{-1} [1 - (n-R) \{ (20)^{2/(n-1)} - 1 \} / R]$ で与えられる。 α_m が小さいほど、方向の集中はよい。通常、良く焼けた遺構では α_m は、3° 以内、k は 100 以上となる。

α_m より、Dm, Im のそれぞれの誤差の幅として、

$$dDm = \alpha_m / \cos Im \quad (\text{偏角誤差})$$

$$dIm = \alpha_m \quad (\text{伏角誤差}) \text{ が求められる。}$$

以上のようにして得られた計算結果を、一つの遺構を代表する考古地磁気データとしている。

なお、考古地磁気年代推定の原理や測定方法については、中島・夏原 (1981) に詳しく解説されている。

第3節 熱残留磁気測定結果と推定年代

天野山金剛寺遺跡 SY 1 から 12 個、SY 2 から 10 個の計 22 個を考古地磁気用の定方位試料として採取した。試料の運搬や整形の時 1 個破損したため、計 21 個について、その熱残留磁気を測定した。熱残留磁気測定結果を第 2 表・3 表、第 98 図にまとめた。現在の地磁気偏角の補正は、建設省国土地理院の 1980 年の磁気偏角図から読取った 6.4° W を使用した。第 2 表・3 表の偏角は補正後の値である。

第 2 表は、個々の試料の熱残留磁気測定結果 (Di, li) と磁化強度である。第 3 表に、各遺構についての、磁化方向の平均値 (Dm, Im)、誤差角 (α_m) と信頼度係数 (k)、および平均磁気強度を示した。

残留磁化強度は、SY 1 では $10^{-3} \sim 10^{-4}$ emu、SY 2 では 10^{-2} emu であり、焼土の試料としては、高温で焼成されたことは間違い無い。また、各遺構についての偏角と伏角の平均値の誤差角

α_{95} 、信頼度係数 k は、SY 1 では $\alpha_{95} = 2.5^\circ$ 、 $k = 341.6$ 、SY 2 では $\alpha_{95} = 1.3^\circ$ 、 $k = 3366.2$ であり良くまとまり考古地磁気に適した試料であった。

SY 1、SY 2 の測定結果と第97図のShibuya地磁気年変化曲線を比較して年代推定を行っ

SY 1

試料No.	偏角 Di ($^\circ$ E)	伏角 Ii ($^\circ$)	磁化強度 $\times 10^{-3}$ emu
KC-21	8.0	58.0	1.08
KC-22	-8.3	57.3	0.97
KC-23	-8.5	59.1	0.63
KC-24	-7.2	61.0	1.22
KC-25	-3.0	59.5	0.57
KC-26	0.9	55.5	0.31
KC-27	-6.9	61.9	1.01
KC-28	7.6	66.0	0.81
KC-29	-8.2	58.3	0.55
KC-30	-3.7	58.7	0.88
KC-31	-8.3	55.1	0.18

SY 2

試料No.	偏角 Di ($^\circ$ E)	伏角 Ii ($^\circ$)	磁化強度 $\times 10^{-3}$ emu
KC-41	-1.3	58.5	2.42
KC-42	-5.3	59.5	2.96
KC-43	-3.3	60.7	2.42
KC-44	0.6	59.1	4.19
KC-45	0.4	58.8	2.26
KC-46	5.4	58.6	2.91
KC-47	-1.3	60.0	2.00
KC-48	1.5	60.6	3.02
KC-49	6.1	57.4	5.74
KC-50	2.3	61.4	4.68

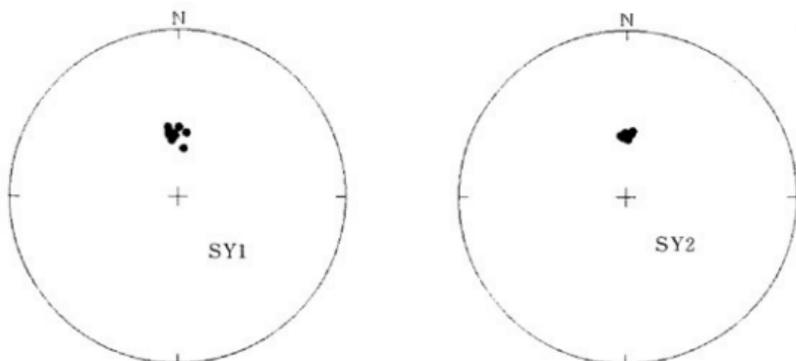
平均磁化強度 0.75×10^{-3}

平均磁化強度 3.26×10^{-3}

第 2 表 熱残留磁気測定結果

遺構名	試料数 n	Dm ($^\circ$ E)	Im ($^\circ$)	α_{95} ($^\circ$)	k	平均磁化強度 emu
(1) SY 1	11	-3.9	59.3	2.5	341.6	0.75×10^{-3}
(2) SY 2	10	0.6	59.5	1.3	1366.2	3.26×10^{-3}

第 3 表 考古地磁気測定結果

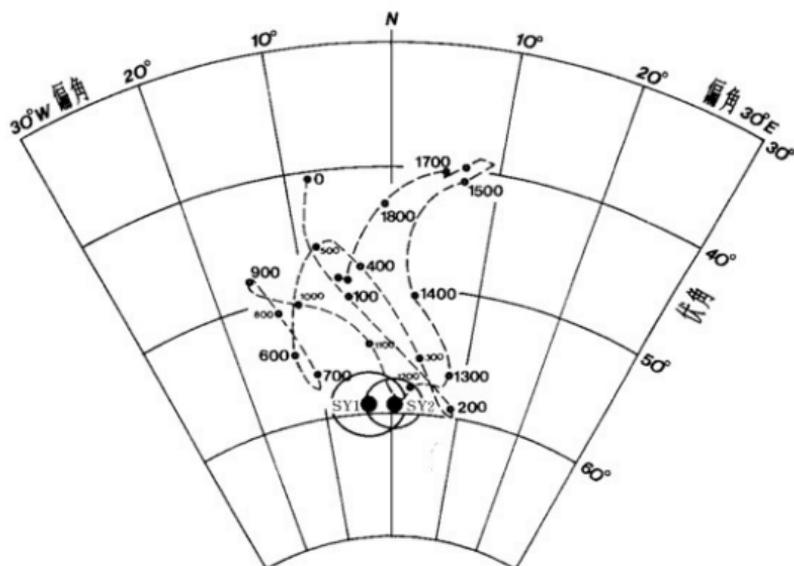


第98図 各試料の残留磁化方向の等面積投影図

た。第99図は永年変化曲線と測定結果Dm、Imをプロットしたものである。黒丸は平均磁化方向を示し、それを囲む実線の楕円が誤差角 α_{95} の範囲である。この中あるいは、これに一番近い永年変化曲線の部分が考古地磁気学的に推定される年代である。

S Y 2は、永年変化曲線と非常に良く一致しており1175±15年となる。S Y 1は永年変化曲線より偏角が若干、西偏するがS Y 2と同時期と考えられ1175±50年となる。推定年代を第4表にまとめた。

ここにて推定年代の±の年代幅は、推定年代がこの幅の中に必ず入ることを意味しているのではなく、この年代幅の中ならどの年代をとってもおかしくない範囲を示しており、これをこえる可能性も充分あることを意味している。



第99図 Shibuya曲線にプロットした平均磁化方向(黒丸)
(楕円は誤差角の範囲を示す)

遺構名	考古地磁気推定年代 (AD)
(1) S Y 1	1175±50
(2) S Y 2	1175±15

第4表 考古地磁気年代推定結果

〔引用文献〕

- Hirooka, K., 1971: Archaeomagnetic study for the past 2000 years in Southwest Japan. *Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral.*, 38, 167-207
- 広岡公夫, 1977: 考古地磁気および第四紀古磁気研究の最近の動向. 第4紀研究, 15, 200-203
- Kawai, N., K. Hirooka, S. Sasajima, K. Yaskawa, H. Ito, and S. Kume, 1965: Archaeomagnetic studies in southwestern Japan. *Ann. Geophys.*, 21, 574-578
- 広岡公夫, 1978: 古陶磁の年代決定に関する研究. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究, 昭和52年度年次報告書, 53-65
- 中島正志・夏原信義, 1981: 考古地磁気年代推定法. ニュー・サイエンス社, 95p.
- Shibuya, H., 1980: Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文, 54p.
- Watanabe, N., 1959: The direction of remanent magnetism of baked earth and its application to chronology for anthropology and archaeology in Japan. *J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. V*, 2, 1-188.
- Yukutake, T., K. Nakamura, and K. Iiorai, 1964: Magnetization of ash-fall tuffs of Oshima Volcano, Izu, II, Application to archaeomagnetism and volcanology. *J. Geomag. Geoelectr.*, 16, 183-193.

第5章 天野山金剛寺出土の土釜埋納土器について

第1節 はじめに

土釜埋納土器とは地鎮めの為に用いられた土釜とその中に納められていた皿を示すものである。小論は地鎮について論じるものではなく、埋納された土釜と皿の型式編年について若干考えたものである。特に瓦質の土器を中心に和泉型瓦器塚の尾上編年にはあらわれない暗文を有しない塚やハケ目を有する皿について見てみたい。

金剛寺は旧境内が広く、坊跡が現存する主要伽藍を中心に北側の天野谷、南側の西除川上流部の谷筋に70数カ所分布している。この旧境内を国道が通っている為、関連の道路工事などにより坊跡の発掘調査が近年増加した。

これらの調査の中で、主要伽藍の北側、西除川の右岸で実施した1988年度の市道の新設に伴う調査で、初めて広い範囲で坊跡を調査した。この時、焼土層とそれを掘り込んで埋められていた土釜を6カ所で検出した。また、1991年度の調査で1カ所、1992年度の調査でも3カ所で検出されている。いずれも土釜とその内部に瓦質の皿あるいは塚と土師質の皿が納められていた。また銅銭が一括に納められていたものもあった。

河内長野市にはこの金剛寺出土品以外に、烏帽子形八幡神社の文明18年（1480）建立の本殿外陣床下中央から出土した資料があり広く知られている。

第2節 土釜埋納土器の出土例

1. 1988年度主要伽藍北側坊跡群出土例

(1) 88-SX7

土釜は瓦質釜。口縁部は内湾しながら内傾し、端部は内傾する面を成す。口縁部外面には3条の浅い沈線が巡る。体部は平底気味の丸底からやや外傾しながら鐔に至る。内面は細かなハケ目調整、体部外面は鐔下3分の1が横位のヘラ削り、残りが底部にかけて斜め方向のヘラ削りが見られる。鐔は短く水平に伸びる。口径18.9cm、器高13.7cm、鐔径24.8cm。

瓦質の塚が15点、土師質の皿が14点出土した。瓦質の塚は浅い丸底の底部から内湾気味に立ち上がる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部内外面は強く横ナデを施し、端部は撮み上げ気味にやや肥厚している。口径は平均11cm、器高は平均2.8cmで、色調は灰白色を基調としているが、重ね焼の為、8枚は内外面の口縁部が黒灰色を呈し、2枚は内面を、4枚は内

外面とも黒灰色を呈する。

土師質の皿は平底の底部から短く外上方に外弯気味に屈曲し端部は丸い。底部外面は指オサエの後ナデ、内面はナデで一部ヘラ状工具によるナデが見られる。口縁部内外面は横ナデが施されている。口径7.2cm、器高1.6cm。

(2) 88-S X 3-③

土釜は瓦質釜。口縁部は内傾し、口縁端部は上方に短く伸びた後内傾する面を持つ。口縁部外面は3条の幅広の浅い沈線により段を成す。体部は平底気味の丸底からやや外傾しながら罫に至る。体部内面はハケ目調整、体部外面は罫下3分の1が横位のヘラ削り、残りが底部にかけて斜め方向のヘラ削りが見られる。底部内面はナデによってハケ目を消している。罫は短く外弯して水平に伸びる。煤が付着しており使用の痕がある。口径21.3cm、器高17.8cm、罫径28.6cm。

瓦質の皿が13点、土師質の皿が10点出土した。瓦質の皿はやや丸底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部内外面は横ナデを施し、端部は丸みを帯びているが内面の調整がヘラ状工具によるナデのため一部端部が削られ鋭くなっている。口径は平均11.2cm、器高は平均2.3cm。

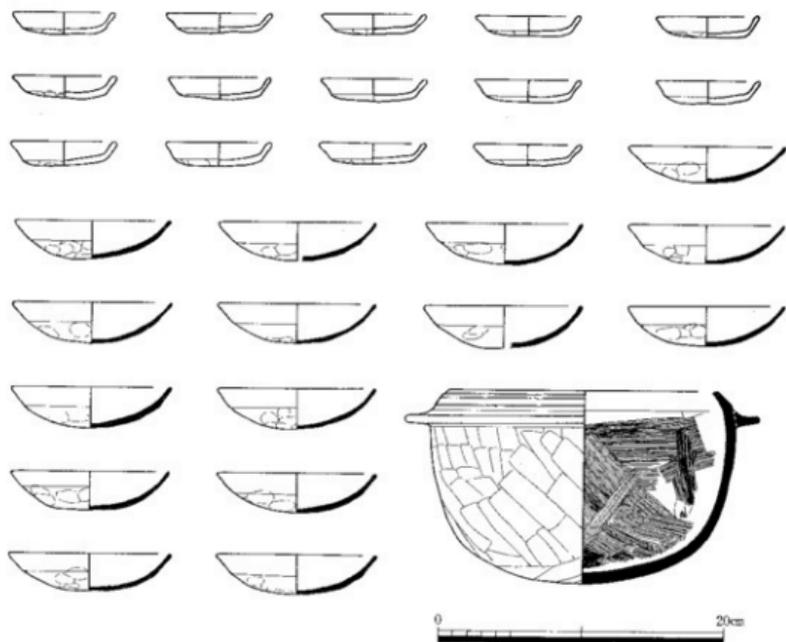
土師質の皿は平底の底部から短く外上方に外弯気味に屈曲し端部は丸い。内面の屈曲はにぶい。底部外面は指オサエの後ナデ、内面はナデで一部ヘラ状工具によるナデ、口縁部内外面は横ナデがそれぞれ施されている。口径は平均7.7cm、器高は平均1.2cm。

(3) 88-S X 3-②

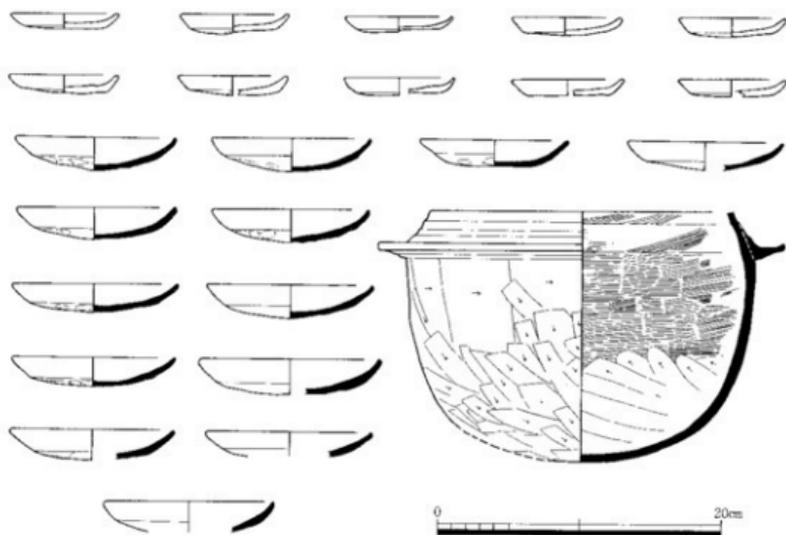
土釜は瓦質釜。口縁部は内傾し、口縁端部は上方に短く伸びた後内面を成し、口縁時外面は3条の幅広の浅い沈線により段を成す。体部は平底気味の丸底から内弯した後、上方に伸びて罫に至る。体部内面はハケ目調整、体部外面は罫下3分の1が横位のヘラ削り、残りは底部にかけて斜め方向のヘラ削りが見られる。体部から底部にかけての内面はヘラ状工具によるナデによってハケ目を消している。煤が付着しており使用の痕がある。口径23cm、器高18.4cm、罫径29.4cm。

瓦質の皿が15点、土師質の皿が31点出土した。瓦質の皿はやや丸底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部内外面は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面の調整には荒いハケ目が見られる。口径は平均10.7cm、器高は平均2.1cm。

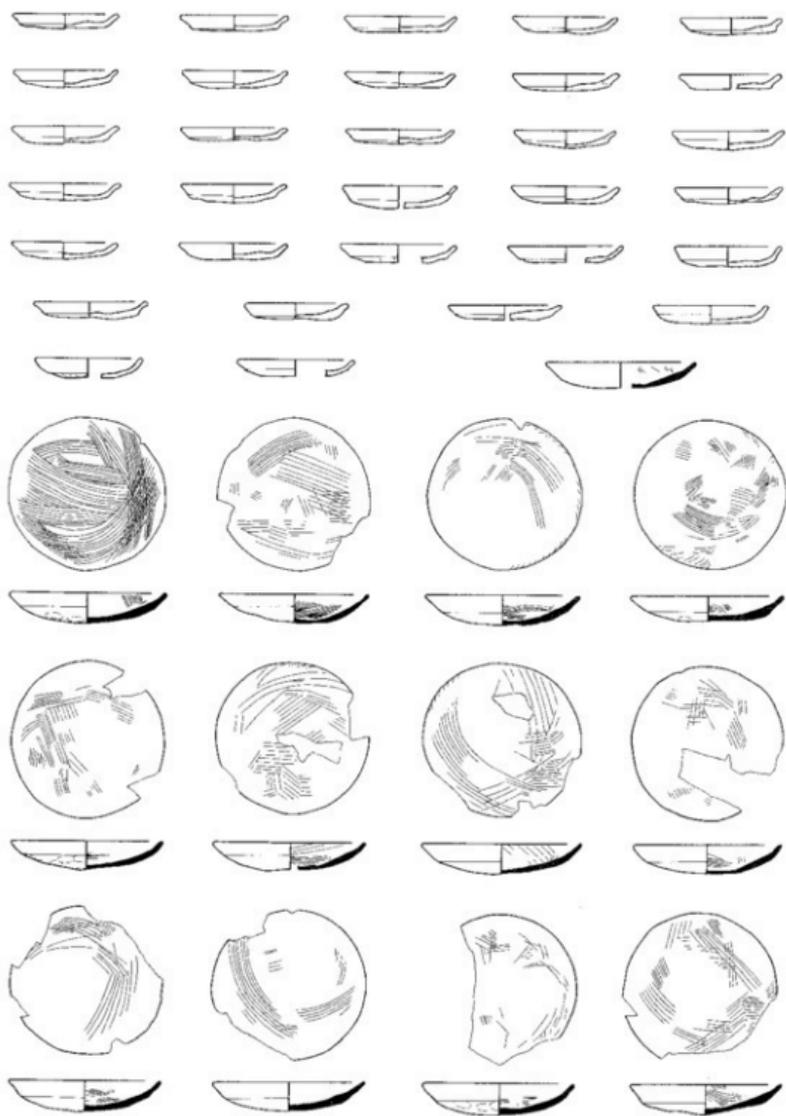
土師質の皿は平底の底部から口縁部は短く外上方に屈曲し端部は丸い。内面の屈曲はにぶい。底部外面は指オサエの後ナデ、口縁部内外面は横ナデがそれぞれ施されている。口径は平均7.5cm、器高は平均1.2cm。



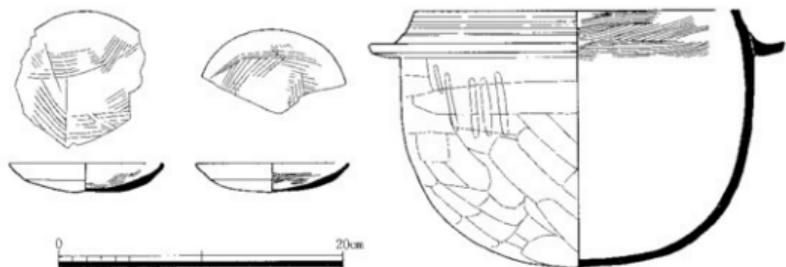
第100图 88-S X 7 出土物实测图



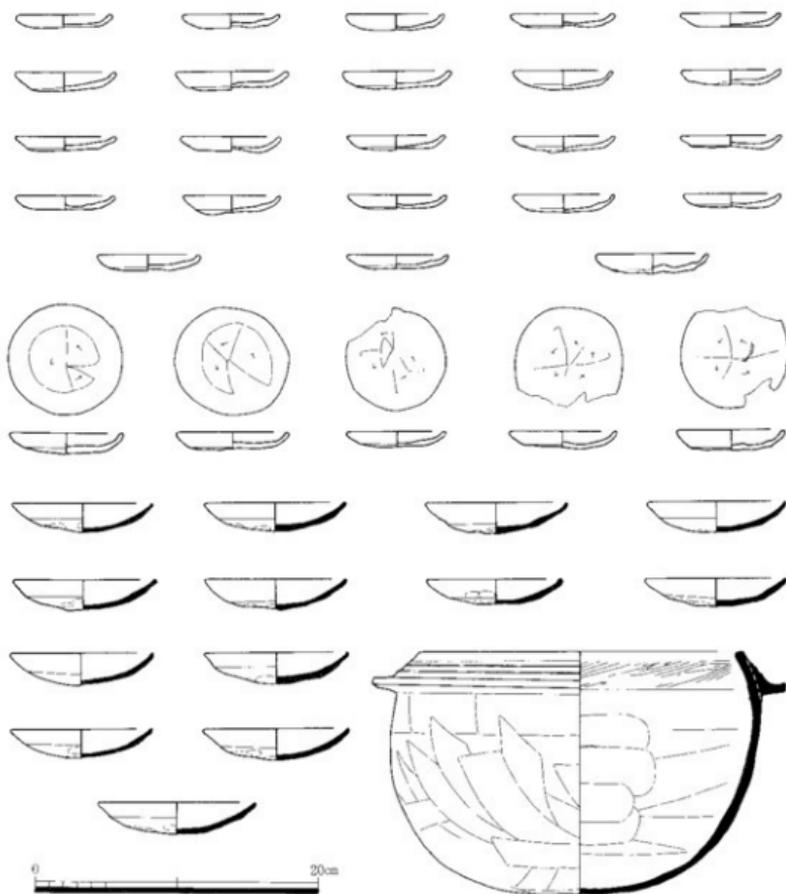
第101图 88-S X 3-③出土物实测图



第102图 88-SX3-②出土遗物实测图(1)



第103图 88-S X 3-②出土遗物实测图(2)



第104图 88-S X 3-①出土遗物实测图

(4) 88-SX3-①

土釜は瓦質釜。口縁部は内傾し、口縁端部は内傾する面を成す。口縁部外面は3条の幅広の浅い沈線により段を成す。体部は平底気味の丸底から内弯しながら上方に伸びて鑕に至る。体部内面はハケ目調整、体部外面は鑕下4分の1が横位のヘラ削り、残りが底部にかけて斜め方向のヘラ削りが見られる。体部から底部にかけての内面はヘラ状工具によるナデによってハケ目を消している。口径22.6cm、器高17.3cm、鑕径29cm。

瓦質の皿が13点、土師質の皿が28点出土した。瓦質の皿はやや丸底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部内外面は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。しかし内面の調整がヘラ状工具によるナデのため一部端部が削られ鋭くなっている。口径は平均10cm、器高は平均2.2cm。

土師質の皿は平底の底部から口縁部は内弯しながら短く外上方に伸びる。底部外面は指オサエの後ナデ、内面はヘラ状工具の回転によるナデが施されている。口縁部内外面は横ナデがそれぞれ施されている。口径は平均7.5cm、器高は平均1.2cm。

(5) 88-SX4

土釜は瓦質釜。口縁部は内傾し、口縁端部は面を成し内方向に撮み出している。口縁部外面は3条の沈線により段をなす。体部は底部から内弯しながら上方に伸びて鑕に至る。体部内面はハケ目調整、体部外面は鑕下4分の1が横位のヘラ削り、残りは底部にかけて斜め方向のヘラ削りが見られる。内面はハケ目を施しているが、位置部はナデ消している。口径22.9cm、器高18.2cm、鑕径30.4cm。

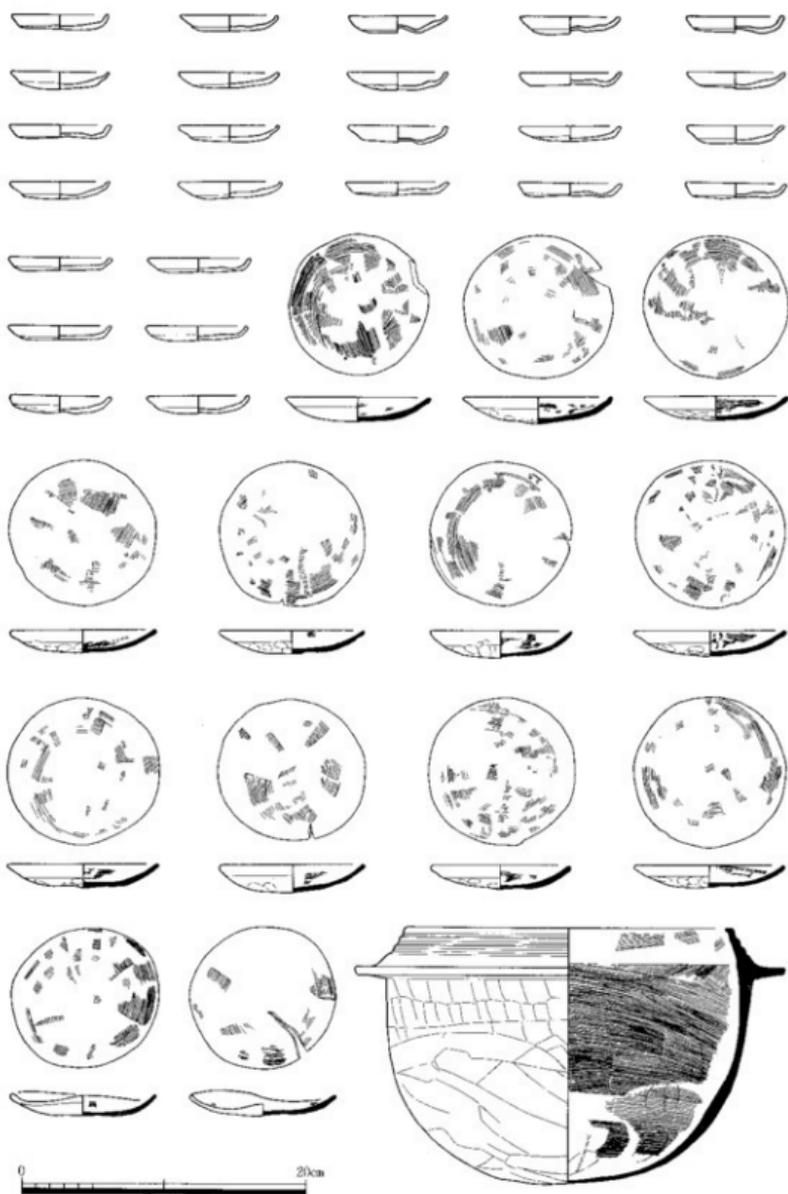
瓦質の皿が13点、土師質の皿が26点出土した。瓦質の皿はやや丸底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部内外面は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面の調整はハケ目の上ナデ、一部ハケの工具により端部が削られ鋭くなっている。口径は平均10.2cm、器高は平均1.8cm。

土師質の皿は平底の底部から口縁部は内弯しながら短く外上方に伸びる。底部外面は指オサエの後ナデ、内面はヘラ状工具の回転によってナデが施されている。口縁部内外面は横ナデがそれぞれ施されている。口径は平均6.9cm、器高は平均1.1cm。

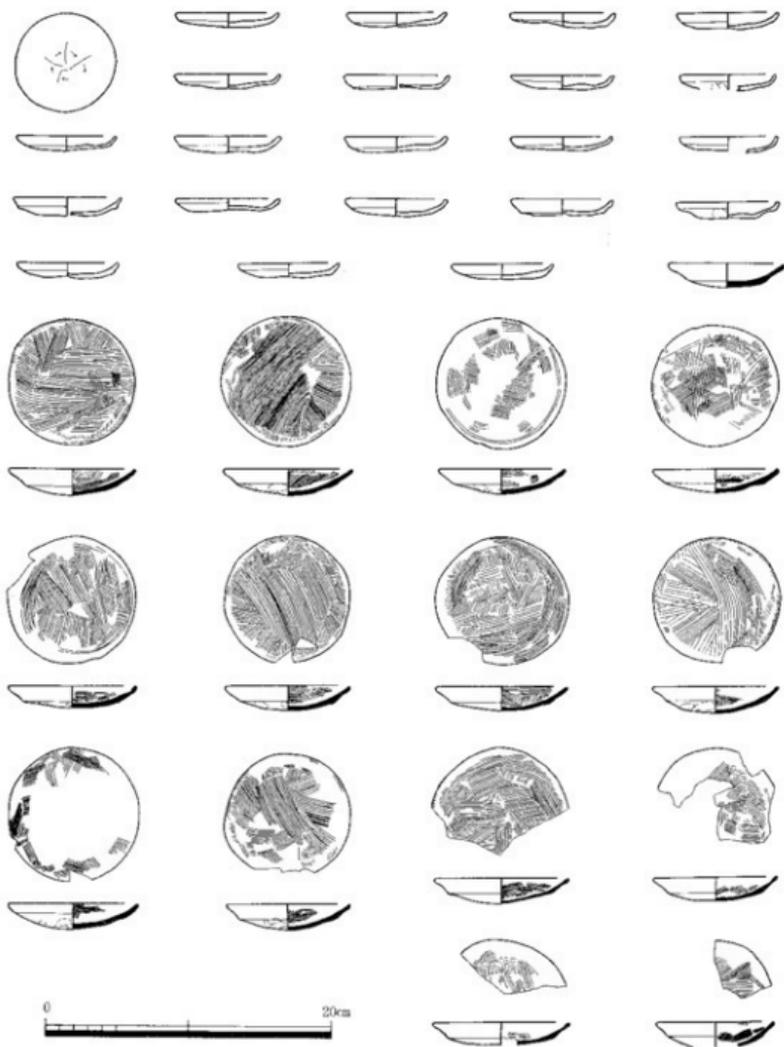
(6) 88-SX6

土釜は瓦質釜。口縁部は内傾し、口縁端部は丸味をもちながら内傾する。口縁部外面は3条の沈線により段を成す。体部は底部から内弯しながら上方に伸びて鑕に至る。体部内面はハケ目調整、体部外面は鑕下4分1が横位のヘラ削り、残りは底部にかけて斜め方向のヘラ削りが見られる。内面はハケ目を施した後ナデ消している。口径21cm、器高18cm、鑕径29.2cm。

瓦質の皿が15点、土師質の皿が21点出土した。瓦質の皿はやや丸底気味の浅い底部から内弯気



第105圖 88-S X 4 出土遺物實測圖



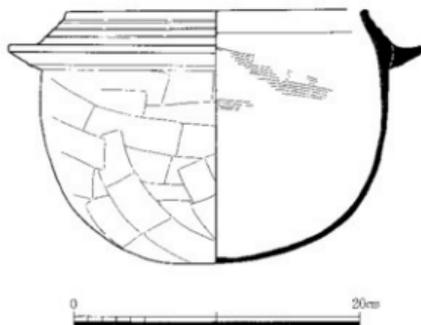
第106図 88-S X 6 出土遺物実測図 (1)

味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部内外面はナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面はハケ目が施され、一部ハケの工具により端部が削られ鋭くなっている。器壁は薄い。色調は灰色にはならず、褐色を呈するものもある。口径は平均9 cm、器高

は平均1.8cm。

土師質の皿は平底の底部からの口縁部の立ち上がりは短い。底部外面は指オサエの後ナデ、内面はナデが施されている。口縁部内外面は横ナデが施されている。器壁は薄く、穴が開いているものもある。口径は平均6.9cm、器高は平均1.1cm。

瓦質の皿も土師質の皿も実用品には程遠い形状である。



第107図 88-S X 6 出土遺物実測図(2)

2. 1991年度樓門前坊跡(西除川対岸)出土例

(1) 91-S C 4

土釜は瓦質釜。口縁部は内傾し、口縁端部は面をもつ。口縁部外面は3条の沈線により段を成す。体部は底部から内湾しながら上方に伸びて鑄に至る。体部内面はハケ目調整、体部外面は鑄下3分の1が横位のヘラ削り、残りが底部にかけて斜め方向のヘラ削りが見られる。内面はハケ目を施した後ナデ消している。口径23.5cm、器高18.5cm、鑄径31.6cm。

瓦質の皿が12点、土師質の皿が19点出土した。瓦質の皿はやや丸底気味の浅い底部から内湾気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面の調整はナデ、一部ヘラ状工具の回転によるナデが見られる。口径は平均11.3cm、器高は平均2.6cm。

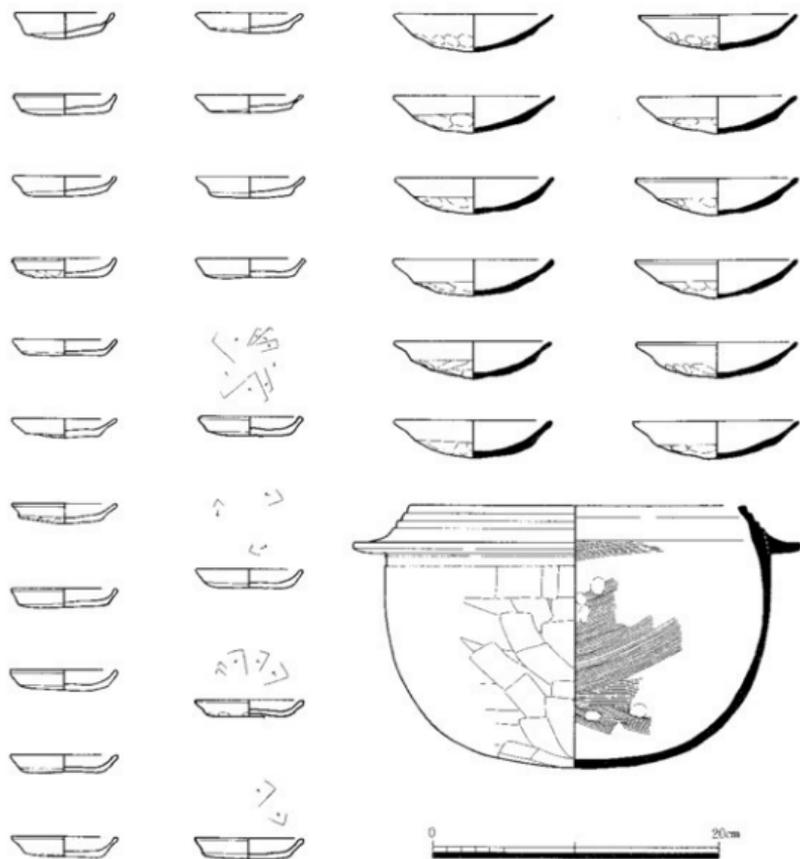
土師質の皿は平底の底部から口縁部の立ち上がりは短く屈曲する。底部外面は指オサエの後ナデ、内面はナデが施されているが一部ヘラ状工具の回転によるナデが見られる。口縁部内外面は横ナデが施されている。口径は平均7.2cm、器高は平均1.5cm。

3. 1992年度主要伽藍南側坊跡群出土例(本書報告)

(1) 92-S X 1

土釜は瓦質釜。口縁部は内湾気味に内傾し、口縁端部は面を成す。口縁部外面は3条の沈線により段を成す。体部は底部から内湾しながらやや外傾し上方に伸びて鑄に至る。体部内面はナデ調整、体部外面は鑄下3分の1が横位のヘラ削り、残りは底部にかけて斜め方向のヘラ削りが見られる。口径20.6cm、器高15cm、鑄径26.6cm。

瓦質の皿が14点、土師質の皿が8点出土した。しかし、土師質の皿は土釜の外側周囲にたて並べられていたものである。瓦質の皿はやや平底気味の浅い底部から内湾気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部内外面は横ナデを施し、端部は丸みを帯び



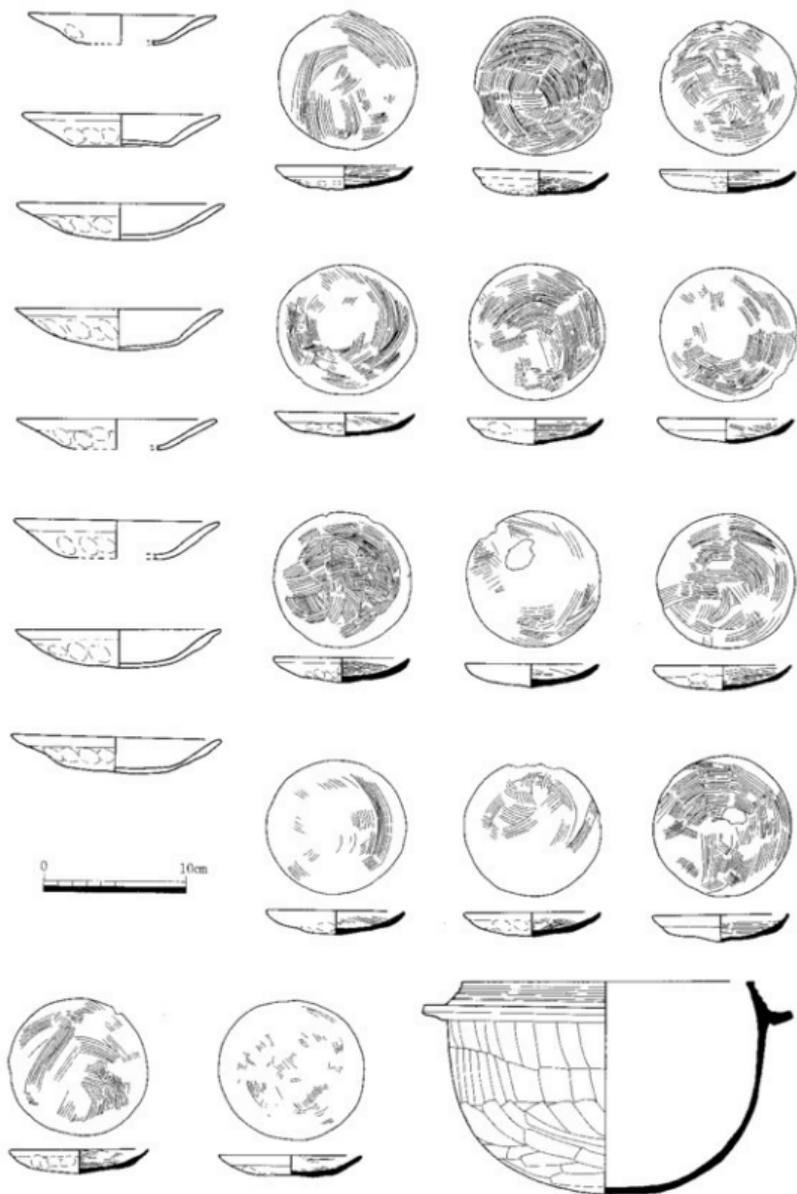
第108図 91-SC4 出土遺物実測図

ている。内面の調整はハケ目、一部ハケ目の上からナデ調整が施されている。口径は平均9.5cm、器高は平均1.8cm。

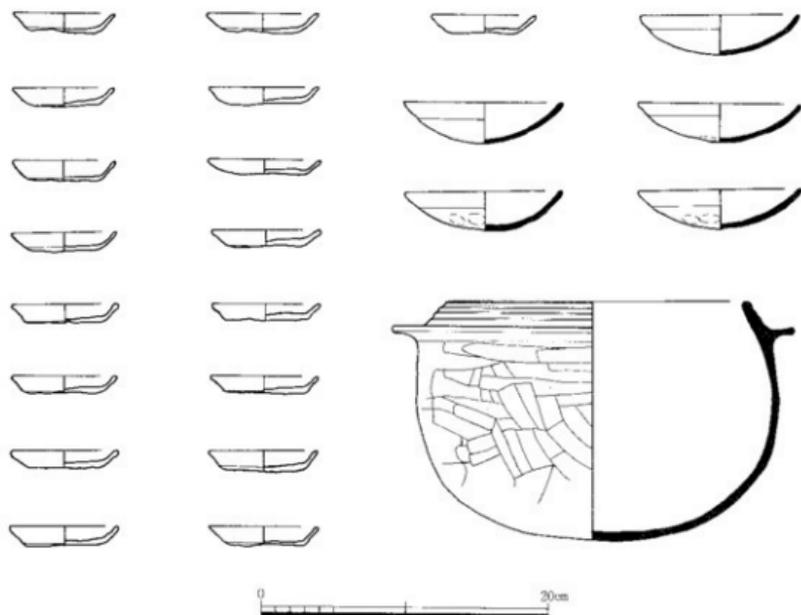
土師質の皿は平底の底部から外傾しながら伸びる。底部外面は指オサエの後ナデ、内面はハケ目の後丁寧なナデが施されている。口縁部内外面は横ナデが施されている。胎土が緻密なものもある。口径は平均14.5cm、器高は平均2.5cm。

(2) 92-SX2

土釜は瓦質釜。口縁部は内湾気味に内傾し、口縁端部は内傾しながら面を成す。口縁部内面は



第109图 92-S X I 出土遗物实测图



第110図 92-S X 2 出土遺物実測図

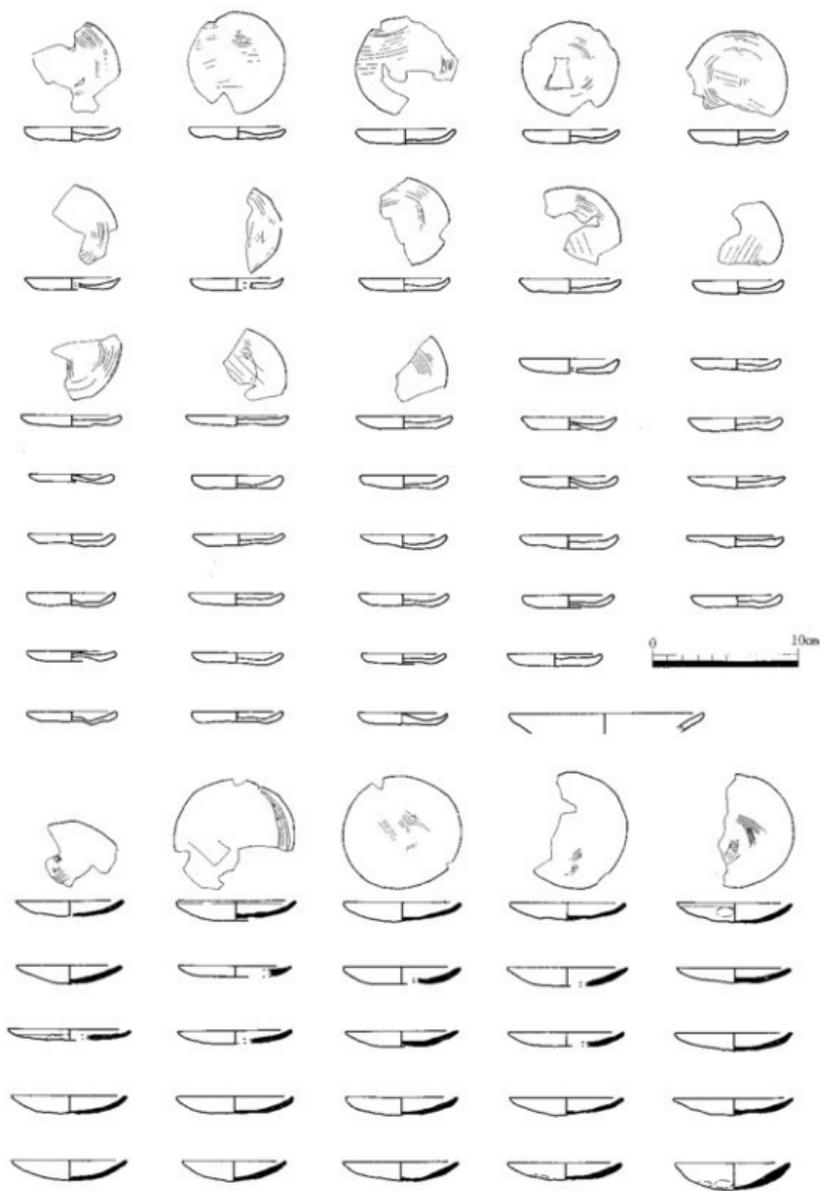
横ナデ、口縁部外面は3条の沈線により段をなす。体部はやや平底気味の底部から内弯しながら上方に伸びて鑄に至る。体部内面はナデ調整、体部外面は鑄下4分の1が主に横位のヘラ削り、残りが底部にかけて斜め方向のヘラ削りが行われた後ナデ調整が施されている。口径20.8cm、器高11.9cm、鑄径28.2cm。

瓦質の皿が5点、土師質の皿が17点出土した。瓦質の皿は底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部内外面は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面はナデ調整が施されている。口径は平均11cm、器高は平均2.8cm。

土師質の皿は平底の底部から外傾しながら短く屈曲する。底部外面は指オサエの後ナデ、内面、口縁部内外面は横ナデが施されている。胎上は緻密である。口径は平均7.5cm、器高は平均1.3cm。

(3) 92-S X 3

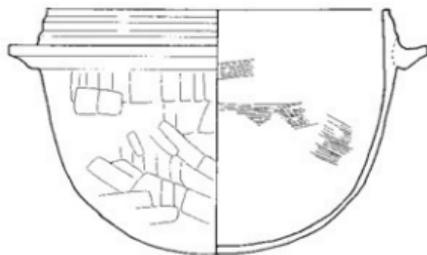
土釜は土師質釜。口縁部は上方に伸び、口縁端部は面を成す。口縁部内面はハケ目の後ナデが施されている。口縁部外面は2条の沈線により浅い段を成す。体部はやや平底気味の底部から内弯した後、外傾しながら上方に伸びて鑄に至る。体部内面はハケ目の後ナデ調整、体部外面は鑄下4分の1が横位のヘラ削り、残りは底部にかけて斜め方向のヘラ削りが見られる。口径24.1cm、



第111图 92-SX3出土遗物实测图(1)

器高17cm、鈎径29.6cm。

瓦質の皿が25点、土師質の皿が40点出土した。瓦質の皿は平底気味の底部からやや内弯しながら外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部内外面は横ナデが施されて、端部は丸みを帯びている。内面の調整はハケ目の後ナデが施されている。灰色を呈するものは少なくほとんどが褐色を呈している。口径は平均7.9cm、器高は平均1.3cm。



0 20cm

第112図 92-S X 3出土遺物実測図(2)

土師質の皿は平底の底部から短く撮み上げられる。底部外面は指オサエの後ナデ、内面はハケ目の後ナデ、口縁部内外面は横ナデが施されている。胎土はやや緻密である。口径は平均6.3cm、器高は平均1cm。1点のみ口径13.6cm、残存高1.4cmを測り、他よりも大きかった。

第3節 土釜埋納瓦質碗・皿の変遷

上記の瓦質碗・皿類を以下のとおり10分類した。

1類：88-S X 7・92-S X 2

尾上編年IV-4の瓦器端に形態、法量が近似するもので、暗文が施されていないだけである。底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面の調整はナデ調整が施されている。口径10.8~11.2cm、器高2.5~3cm。

2類：91-SC 4

2類は1類よりも器高が平均3mm低く、口径が平均3mm大きく皿の形態に近づく。やや平底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びた後、口縁部は外弯する。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は横ナデを施し、端部は丸みを帯びているが内面の調整にヘラ状工具を用いるため一部端部が削られ鋭くなっている。内面はナデ調整。口径11~11.4cm、器高2.4~2.7cm。

3類：88-S X 3-③

3類は2類よりも器高が平均3mm低く、皿の形態を成すものである。やや丸底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は横ナデを施し、端部は丸みを帯びているが内面の調整にヘラ状工具を用いるため一部端部が削られ鋭くなっている。口径10.8~11.4cm、器高2~2.5cm。

4類：88-S X 3-②

4類は3類よりも口径が平均5mm小さく、器高も約3mm低くなる。やや丸底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面の調整には粗いハケ目が見られる。口径10.3~11cm、器高1.8~2.3cm。

5類：88-S X 4

5類は4類よりも口径が平均5mm小さく、器高も5mm低くなる。やや平底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面の調整は粗いハケ目の上に部分的にナデが施されている。1類から5類の中で器形が一番平たくなる。口径9.8~10.5cm、器高1.5~2cm。

6類：88-S X 3-①

6類は5類よりも口径が平均5mm小さくなるが器高は平均3mm高くなる。やや丸底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面の調整はハケ目の上丁寧なナデが施されている。口径9.5~10.2cm、器高2~2.3cm。

7類：92-S X 1

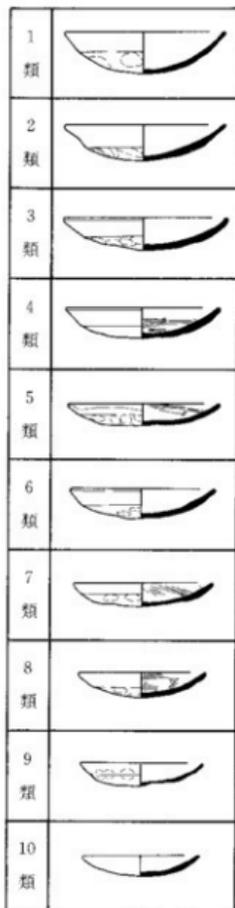
7類は6類よりも口径が平均3mm小さく、器高が約3mm低くなる。やや平底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面の調整は粗いハケ目が多用される。一部ハケの工具により端部内面が削られ鋭くなっている。器壁が薄くなる。口径9.2~9.7cm、器高1.5~2cm。

8類：88-S X 6

8類は7類よりも口径が平均5mm小さくなるが、器高は大差ない。やや平底気味の浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は横ナデを施し、端部は丸みを帯びている。内面の調整は7類と同様である。器壁は薄くなっている。一部の皿は灰色にはならず、褐色を呈するものが現れる。口径8.7~9.5cm、器高1.3~2cm。

9類：

9類は金剛寺出土品には類例がなく、烏帽子形八幡神社の出土品がこれにあたる。8類よりも口径が平均5mm小さくなるが器高は大差ない。浅い底部から内弯気味に外上方に伸びる。体部外



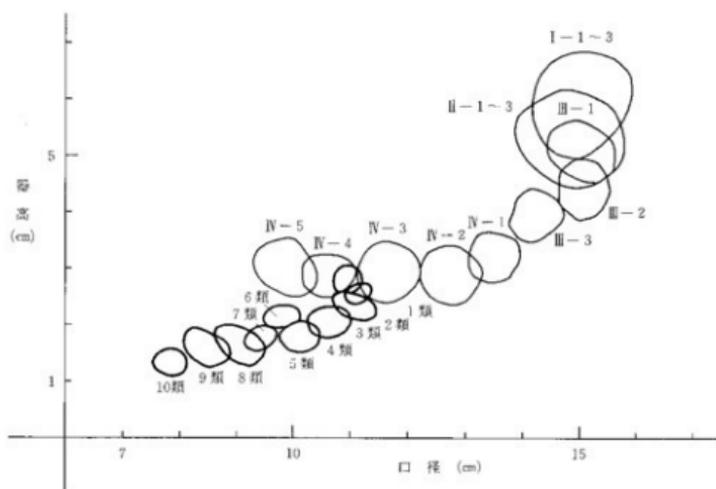
第113図 瓦質皿分類図(1/4)

面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は横ナデ、端部は丸みを帯びている。内面の調整はハケ目を施した後、ナデによって消している。器壁が薄く、ひずみがあるものが多い。色調は灰色にはならず、褐色を呈するものが多い。口径8.2~8.7cm、器高1.2~1.9cm。

10類：92-S X 3

10類は9類よりも口径が平均8mm小さく、器高が約5mm低くなる。平底気味の底部からやや内湾しながら外上方に伸びる。体部外面は指オサエの後ナデが施されている。口縁部は端部に横ナデが施され丸みを帯びている。内面の調整はハケ目の後ナデ調整が施されている。器壁が薄く、ひずみがあるものが多い。灰色を呈するものは少なくほとんどが褐色を呈している。口径7.6~8.2cm、器高1~1.5cm。

これら10類を器高、口径の指数によって表すと第114図のような分布を示す。IV-4に近い1類から器高のみが低くなる2類・3類、そして3類から5類までは概ね口径がそれぞれ5mm程度縮小している。そして6類で再び器高が少し高くなるが口径は順に縮小する。この変化は時期的変遷を示していると考えられる。



第114図 瓦器坑及び瓦質血流量変化

第4節 暦年代について

これら各型式について暦年代を考えてみたい。

1. 天野山金剛寺出土例

これらのうち、1988年度調査出土分は地山直上で検出された焼土層を切り込んでいるのが確認されている。この焼土層は火災によって形成されたものである。金剛寺の焼失の記録は時期的に合致するものは2件みられる。1件は延元2年(1337)、そしてもう1件は正平15年(1360)である。いずれも兵乱によるものである。1988年度の調査地では検出された焼土層は1層であった。この焼土層は、正平15年の記録にある焼失した大門の近くに位置していることから正平15年のものと見て間違いない。さらに、焼土層の直上から永楽通宝が出土している。このことから、出土品はすべて暦年代では1360年以降の時期が当てられる。更に戦火の後、翌年には正学頭職の禅恵法印によって持仏堂や坊舎が再建されていることから、1類は1360年をあまり降らない時期が考えられる。

また、8類のSX6からは永楽通宝や洪武通宝が供伴していることから、8類は永楽通宝が初铸された1409年以降の年代が当てられる。

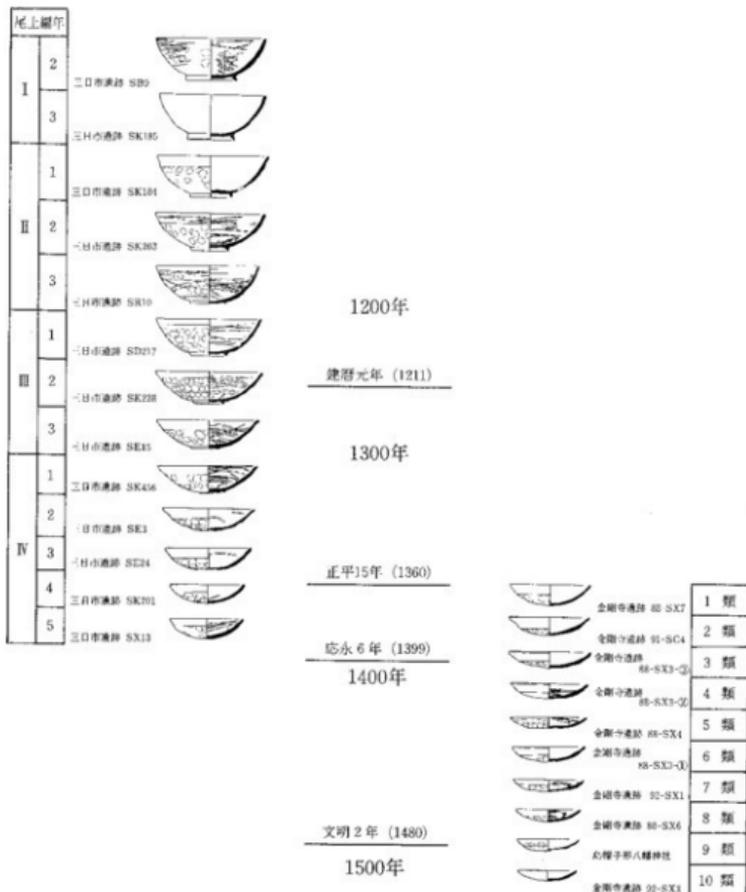
2. 烏帽子形八幡神社出土例

9類の烏帽子形八幡神社出土品は暦年代の判明しているものである。出土したのは本殿外陣床下中央からである。この本殿は解体修理のとき発見された棟札から文明12年(1480)に建立されたと判明しているもので、出土品はこの時の地鎮具として埋納されたものと考えられている。このことから、9類は1480年の年代が当てられる。

3. 堺環濠都市遺跡出土例

堺環濠都市遺跡の調査で確認された各生活面の出土品と10分類した各型式とを比較すると類似するものがある。特に8、9、10次生活面の各出土品と1～4類とは法量的にも近似している。特に3類は9次生活面の出土品に近い。この9次生活面が応永6年(1399)に比定されていることから、3類は年代的にはこの時期に近いものと考えられる。

以上の結果から暦年代は1類が1360年以降、4類が1399年前後、9類が1480年前後と考えられる。単純に年代を分類した数で割ってみると概ね1型式10年で変化しているようである。また、1992年度の金剛寺の楼門前の西除川対岸の坊跡の調査で、焼土層下層から尾土編年Ⅳ-3の瓦器境が最も時期の降る瓦器境として出土している。資料数は少ないが尾土編年Ⅳ-4の時期について1360年以降の暦年代を考えられるのではなかろうか。



第115図 瓦器境及び瓦質編年試案

第5節 まとめ

今回の1類から10類はすべて地鎮具として出土している。特に金剛寺の出土品は正平15年の戦火以降に寺がいち早く復興に着手したことを裏付けている。

地鎮具として使用された瓦質境・皿は暗文もなく4類以降はすでに実用品としての形態は失せ

ている。このことから、暗文をもたない瓦質碗・皿は、尾上編年Ⅳ-4の瓦器碗から別れ、地鎮などの祭祀用として製作されたと思われる。また暗文を有する瓦器碗は1360年からあまり年を経ずしてあられなくなり、暗文を有しない碗・皿類が形態化しながらも瓦質(色調が褐色に近づくものもあるが、焼成方法が土師質とは相違する)ということに意味を持ちながら製作されつづけるようである。

いずれにしろ、河内長野市内では14世紀後半から16世紀前半まで1類から10類の瓦質碗・皿類が存続し、それらの形態的变化は堺環濠都市遺跡の出土品の変遷に近似することを明記しなければならない。

以上の小論をまとめるにあたり尾上実、森島康雄、北野俊明、森村健一、野田芳正、嶋谷和彦、續伸一郎、近藤康司の各氏に有意義なご教示をいただいた。記して感謝するものである。



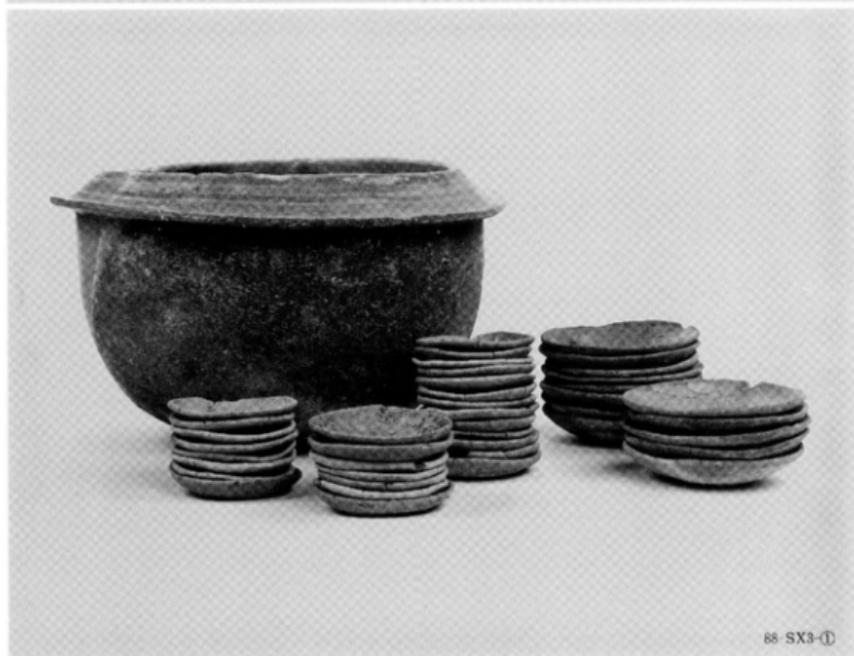
88-SX7



88-SX3-③



88-SX4





88-SX6



91-SC4



報告書抄録

ふりがな	あまのさんこんごうじいせき							
書名	天野山金剛寺遺跡							
副書名	河内長野市遺跡調査会報Ⅷ							
シリーズ名	河内長野市遺跡調査会報							
シリーズ番号	Ⅷ							
編著者名	尾谷雅彦 鳥羽正剛							
編集機関	河内長野市遺跡調査会							
所在地	〒586 大阪府河内長野市原町396-3 TEL 0721-53-1111							
発行年月日	1994年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
あまのさんこんごう 天野山金剛 寺遺跡	あまのさんこんごう 大阪府河内長野市 天野町	27216	府16 河14	34° 25' 30"	135° 31' 57"	1992.11.17 } 1993.03.31	7,045m ²	国道170号 線新設工事に 伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
あまのさんこんごう 天野山金剛 寺遺跡	社寺	古代			土師器		寺院創建前の前身を示す資料か	
		中世	柵列 基壇 溝 井戸 土坑 埋甕 埋桶 石列 上釜埋納遺構	2条 1基 14条 7基 13基 6基 2基 6条 3基	土師質土器、瓦器、瓦質土器、青磁、青花、瓦	旧境内の範囲を確認		
	近世	建物 溝 井戸 土坑 埋甕 石列	1棟 1条 4基 1基 2基 2条	土師質土器、瀬戸焼、唐津焼、青磁、白磁、青花、伊万里焼、波佐見焼、瓦	僧侶の廟か			

圖

版



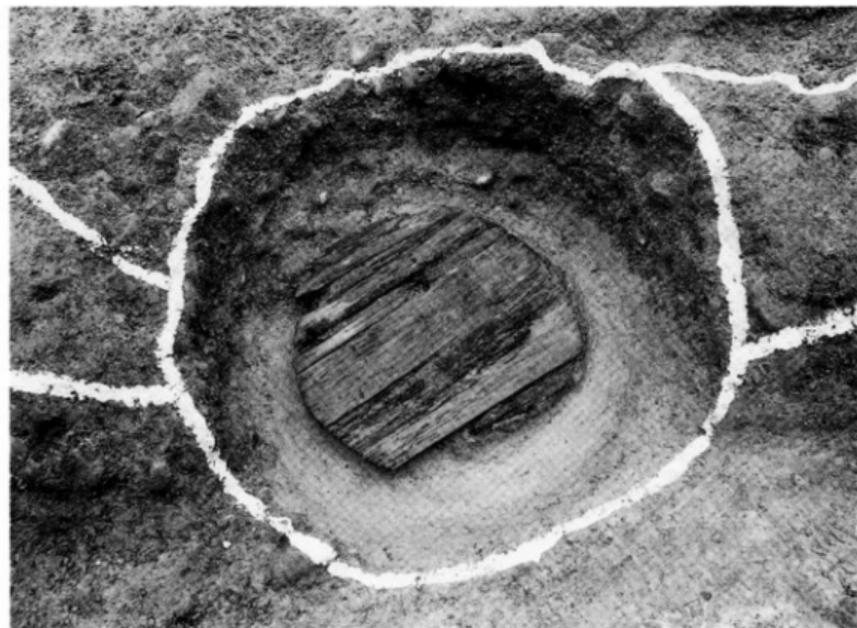
調査区北側全景(北から)



調査区南側全景(北から)



SB1 遠景 (南から)



SN1 (西から)



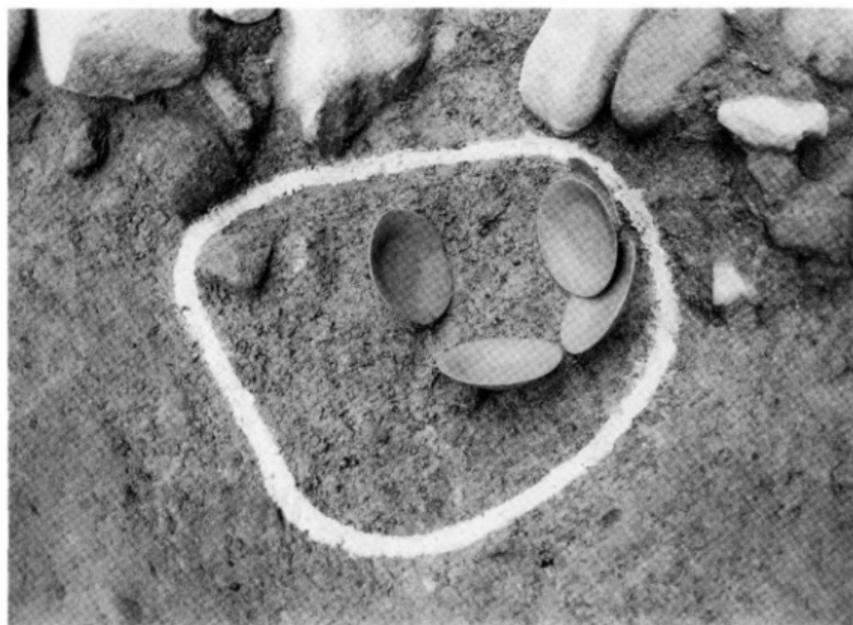
SW4 (東から)



SX1 (西から)



SX1 蓋石除去状況(東から)



SX1 土釜除去状況(北から)



SX2 (南から)



SY1・SY2 (東から)



SY1 煙道部 (南から)



SY2 煙道部 (南から)



調査区北側全景(北から)



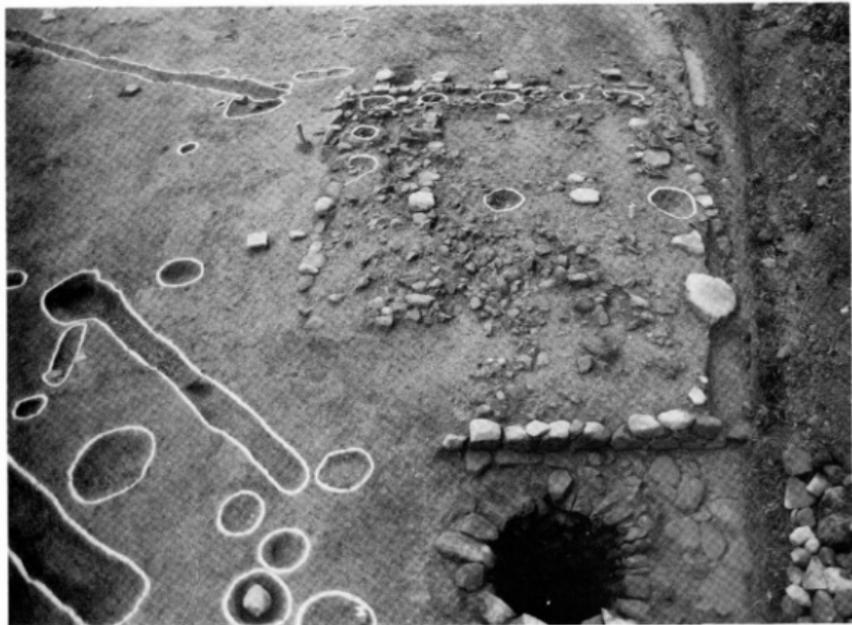
調査区南側全景(北から)



下層遺構北側及び上層遺構南側(南東から)



SB2遠景(南東から)



SB 2 (北から)



SB 2 (東から)



SB 2 (南西から)



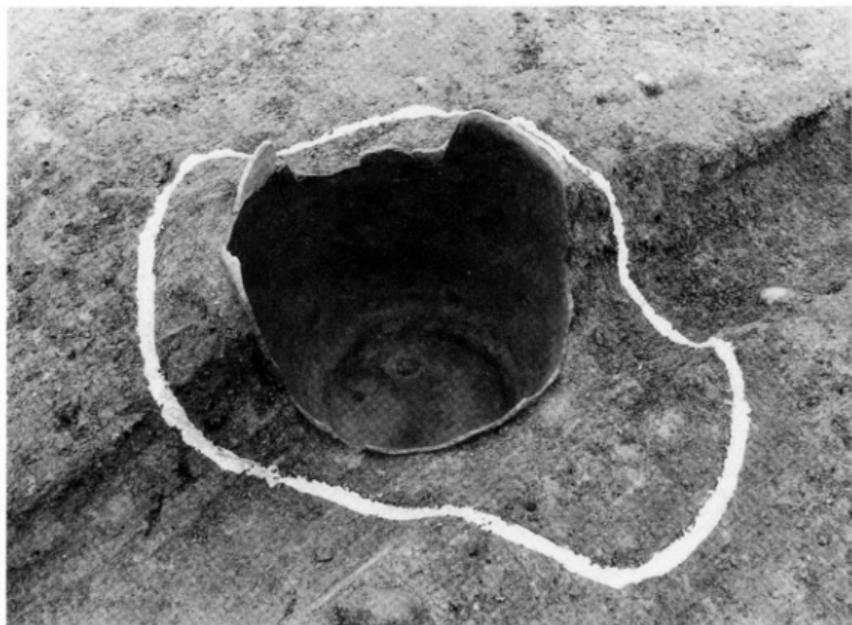
SB 2 (南から)



SD15 (西から)



SE10断ち割り状況 (西から)



SL 7 (東から)



SW 7 (東から)



調査区全景（西から）



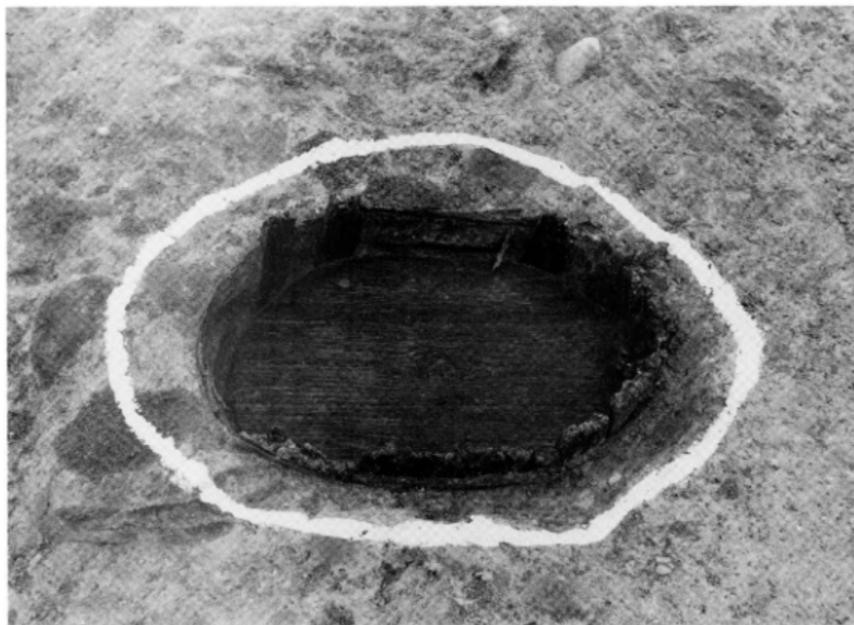
調査区全景（東から）



調査区全景（東から）



調査区全景（北から）



SN 2 (北から)



NV 1 内土釜出土状況 (東から)



調査区全景（北西から）



調査区全景（南東から）



SE 3 断ち割り状況 (北から)



SE 4 断ち割り状況 (西から)



SE5・SE6 (東から)



SL2 (北から)



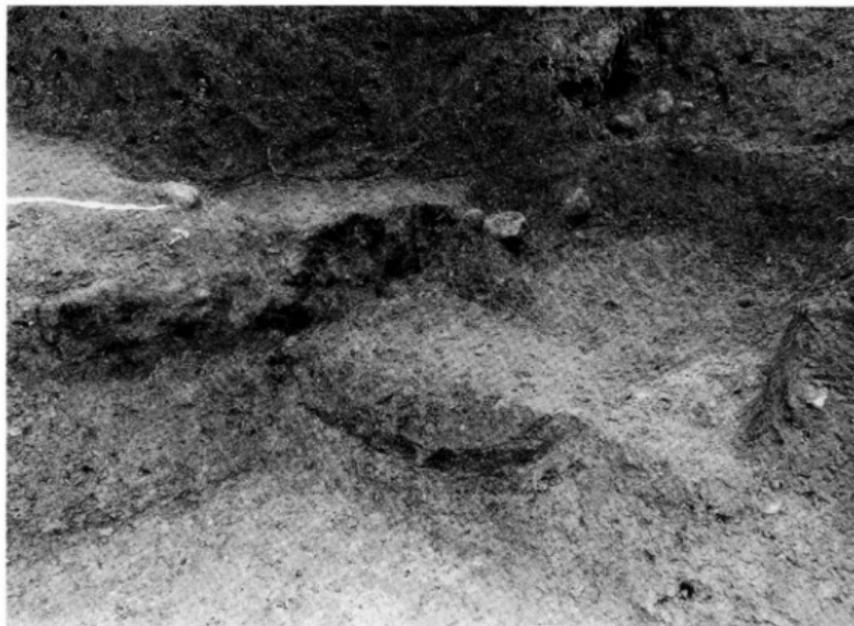
SX 3 検出状況 (西から)



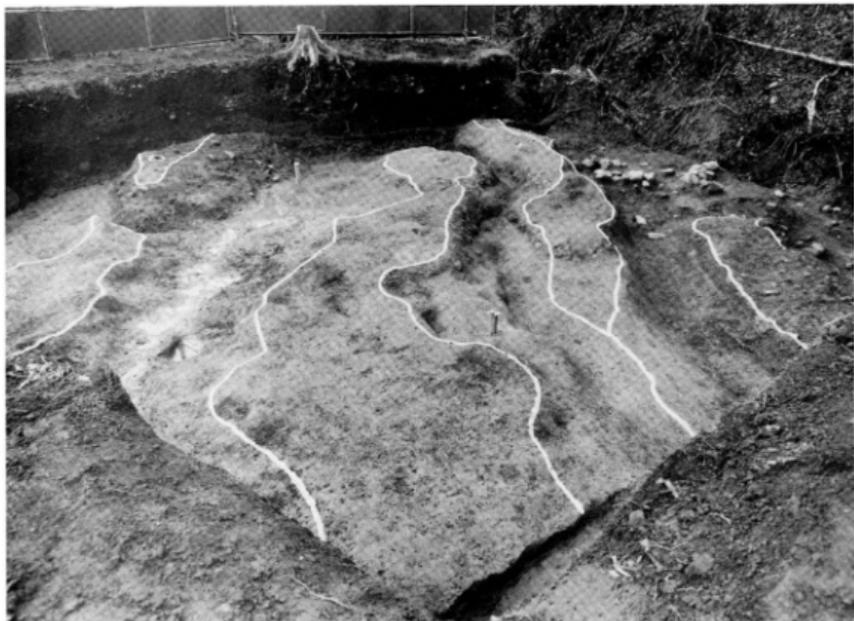
第5調査区全景 (北から)



調査区全景 (南から)



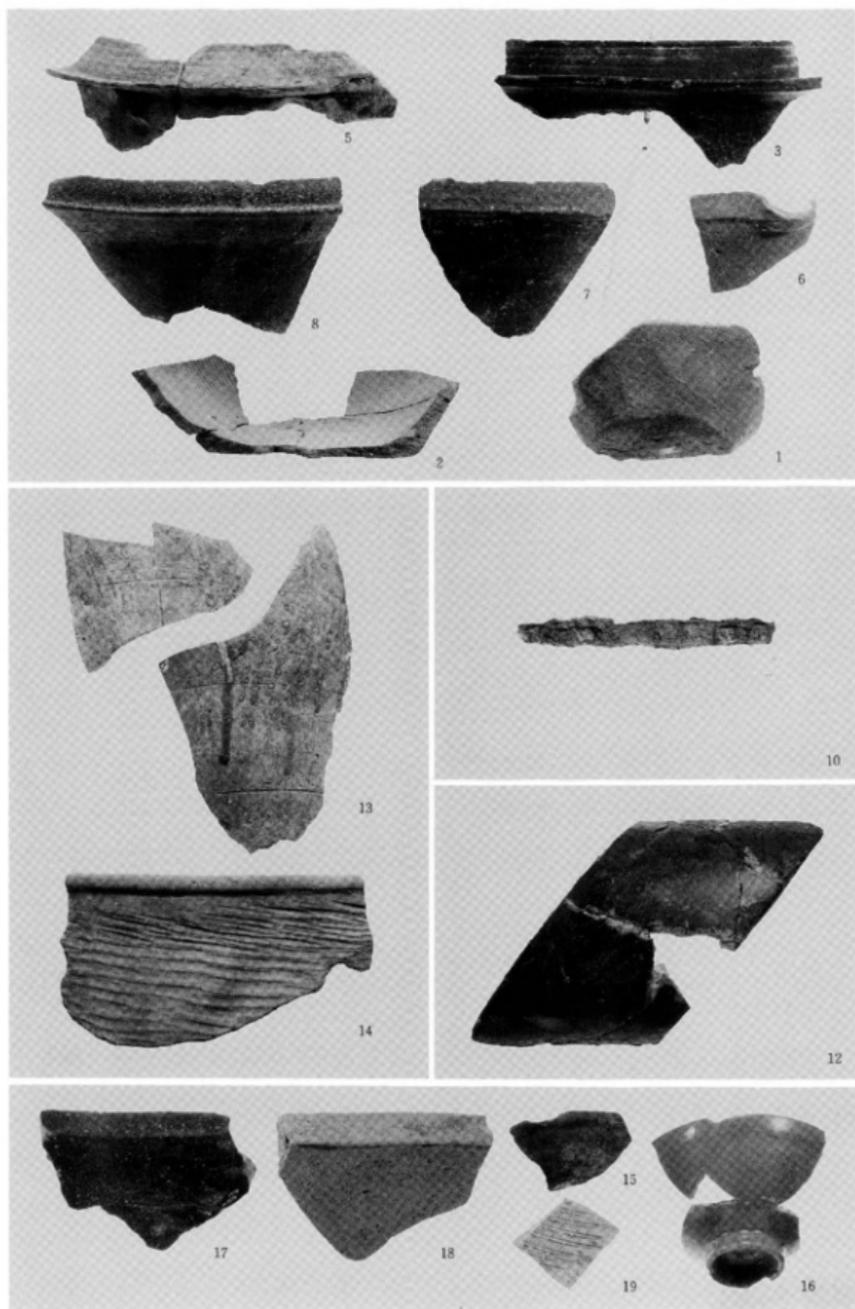
SY3 (南から)



調査区全景（南西から）



調査区全景（北から）



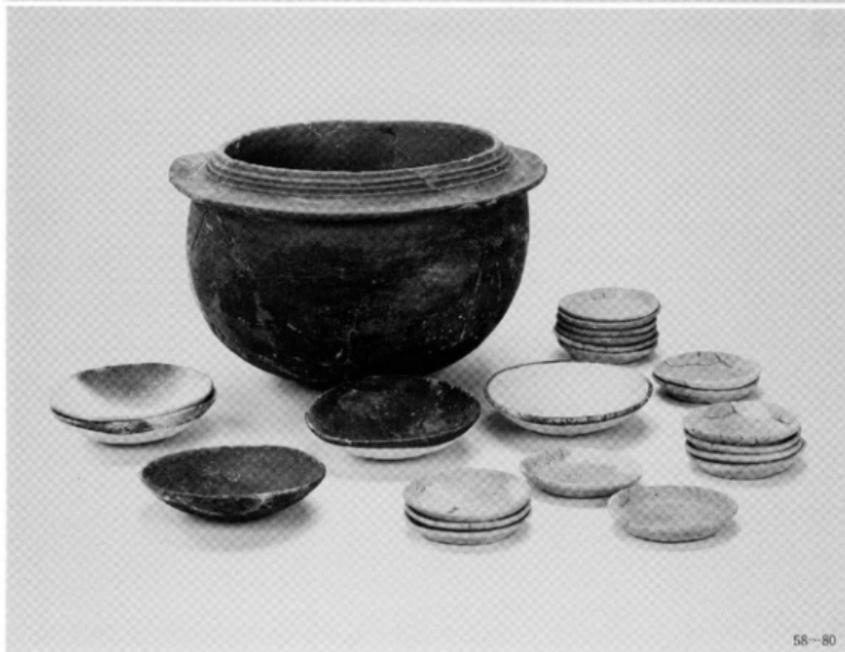
SD 2 (1~3・5~8・10)、SD 4 (12)、SD 5 (13・14)、SD 7 (15~19)



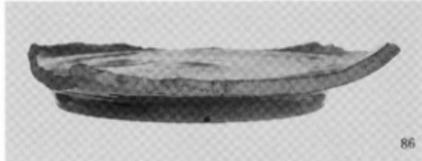
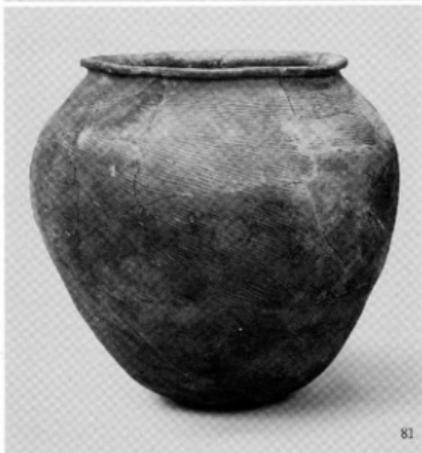
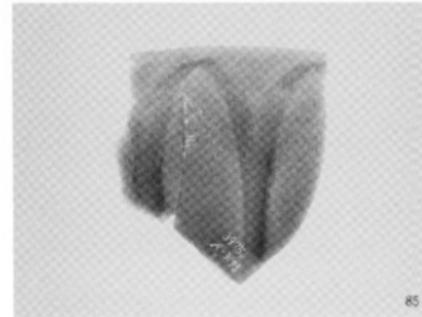
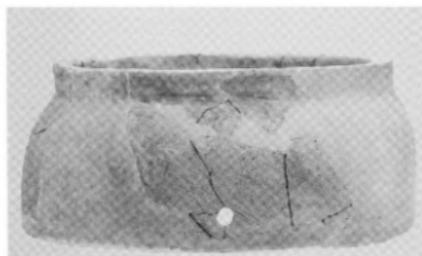
SK1 (20~23)、SK2 (24)、SK3 (25・27)、SK4 (28)、SN1 (29~32)



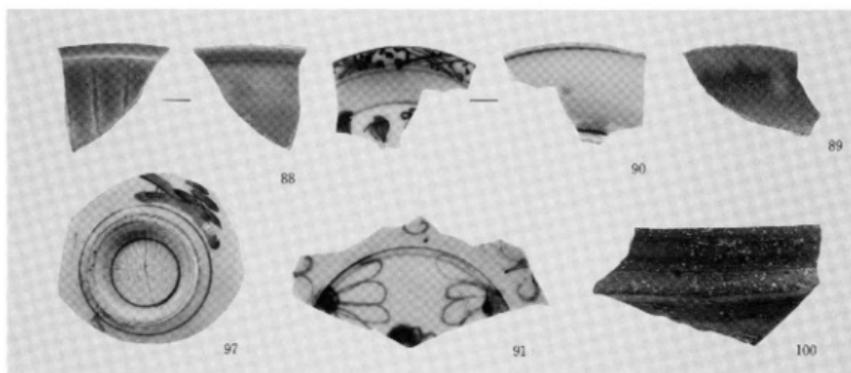
35-57



58-80



SW 3 (33・34), SY 1 (81), SY 2 (82~84), P 1 (85), P 2 (86), NV 1第41層 (87)



93



96



92



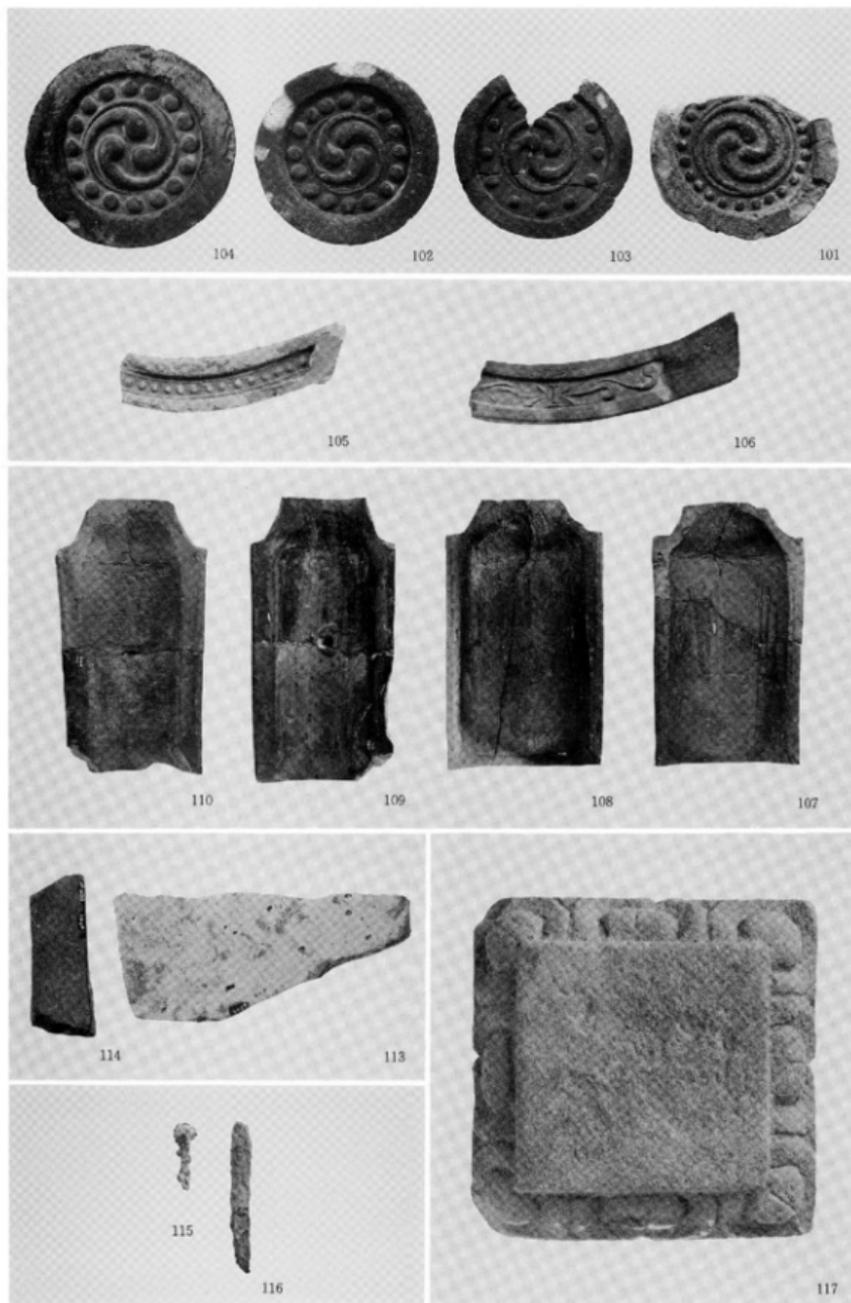
98



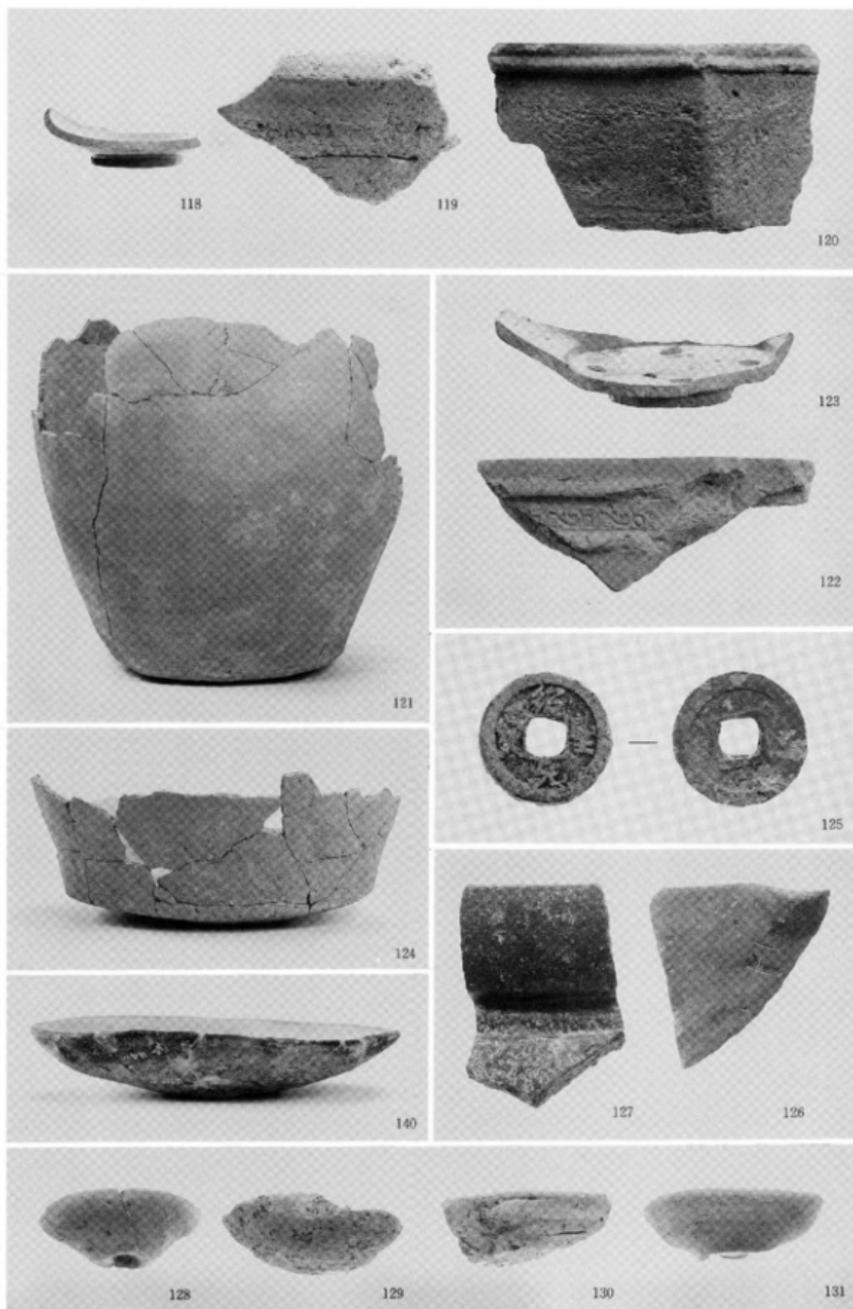
94



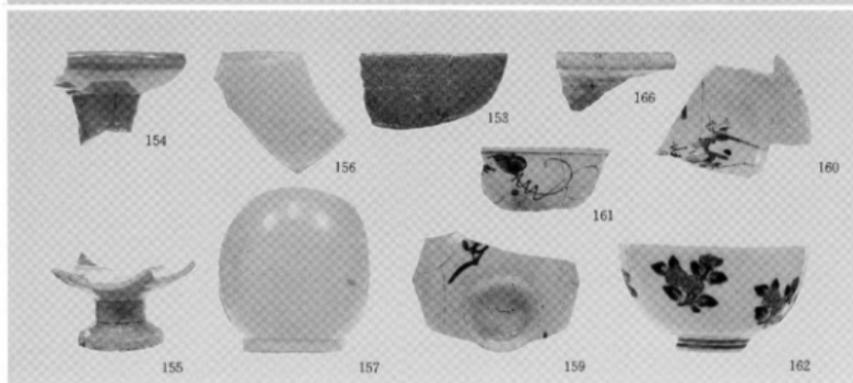
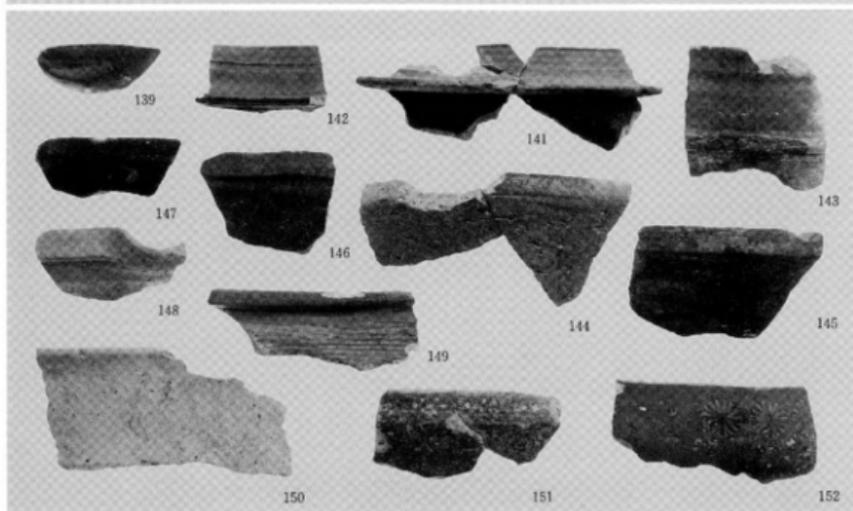
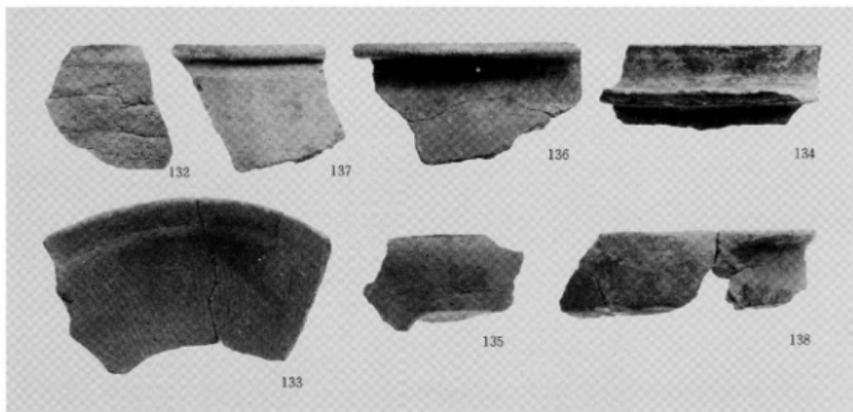
99

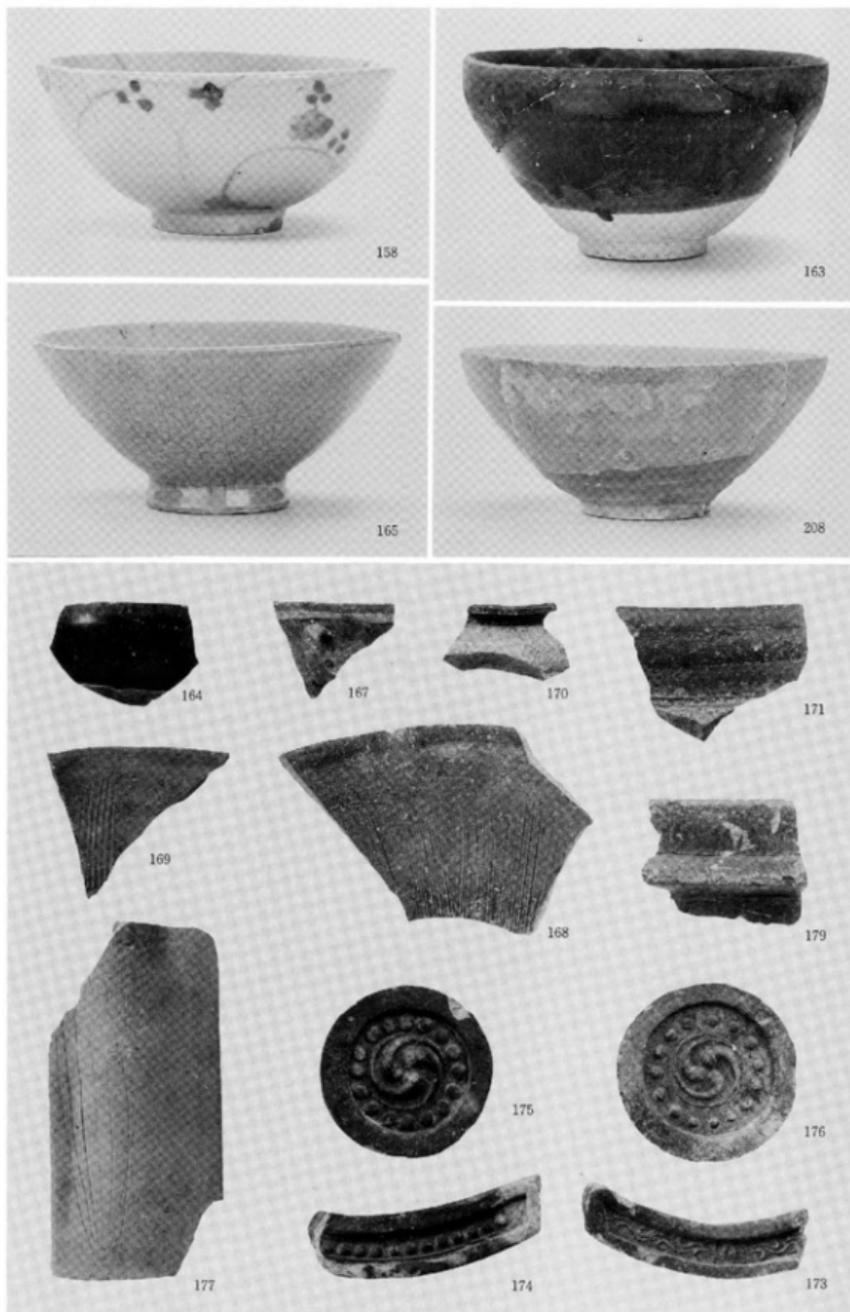


SB 2 (101~110・113~116)、SE11 (117)

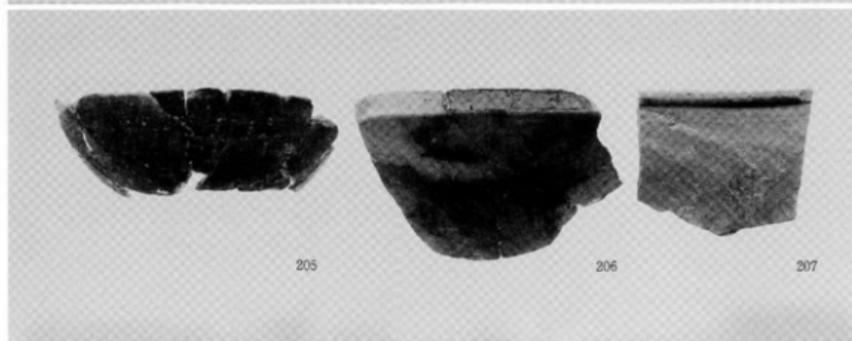
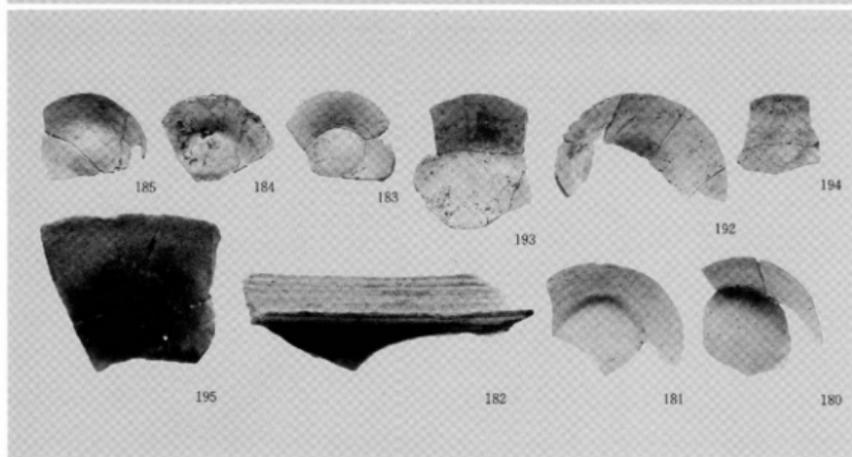


SK14 (118~120)、SL 7 (121~123)、SL 8 (124・125)、SW 7 (126・127)、包含層 (128~131・140)

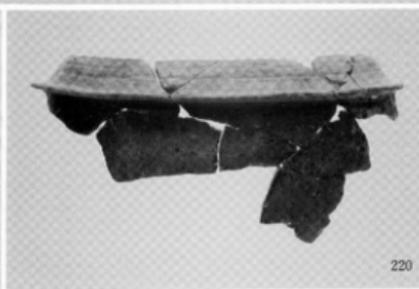




第1調査区包含層 (158・163～171・173～177・179)、第2調査区包含層 (208)



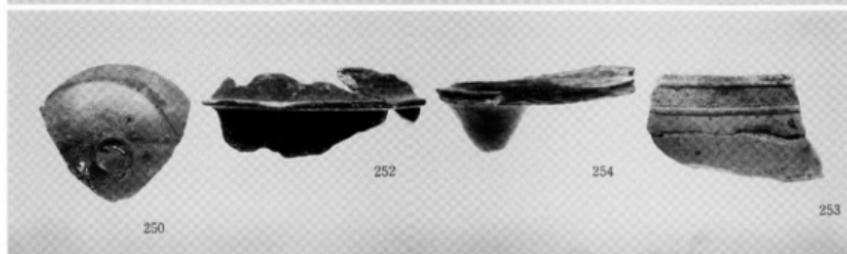
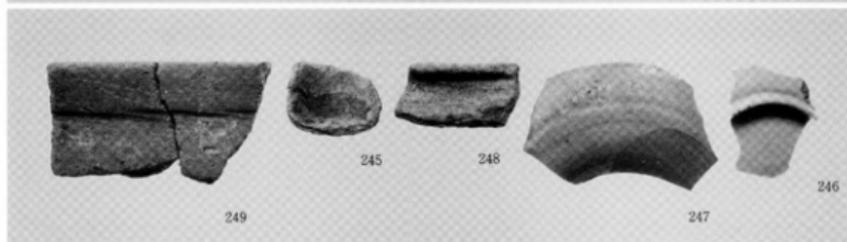
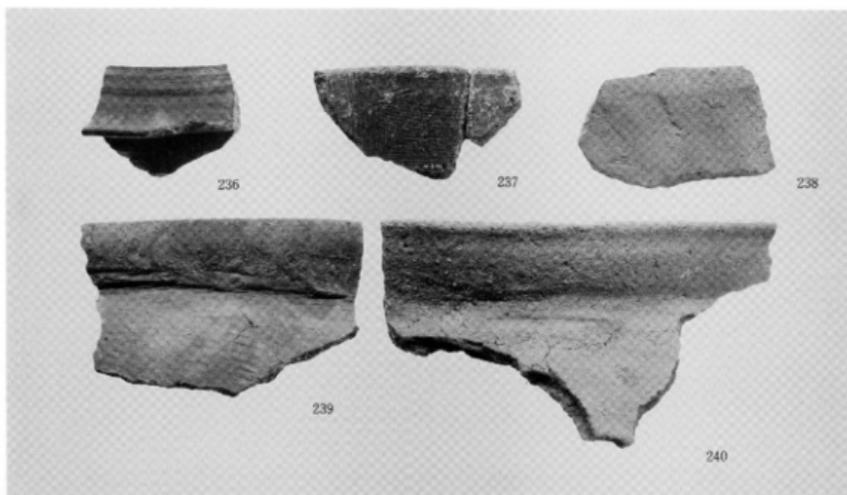
NV 1 第2層 (180~182)、NV 1 第6層 (183~195)、包含層 (205~207)



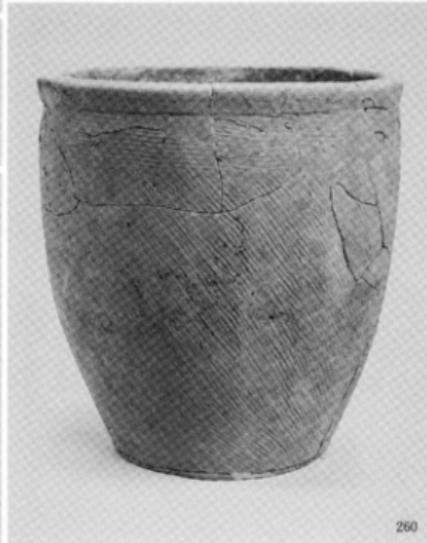
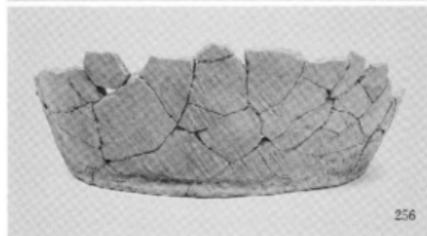
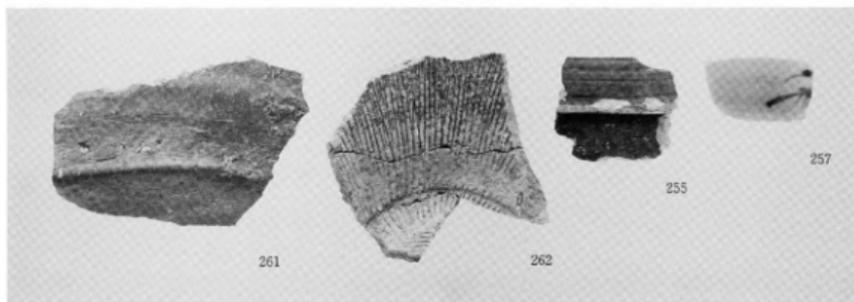
第2調査区包含層 (198~203・209~211)、第3調査区N.V.1 (212~221)



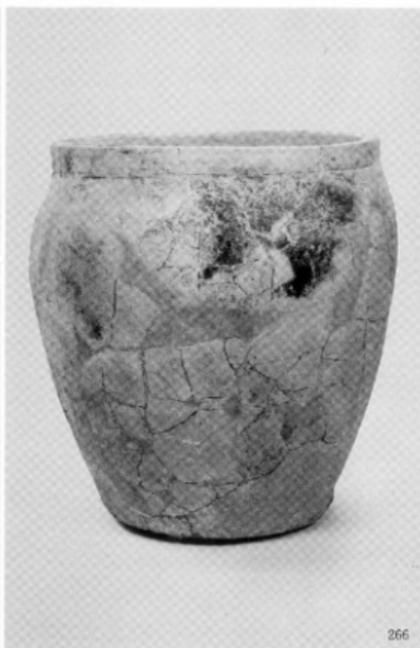
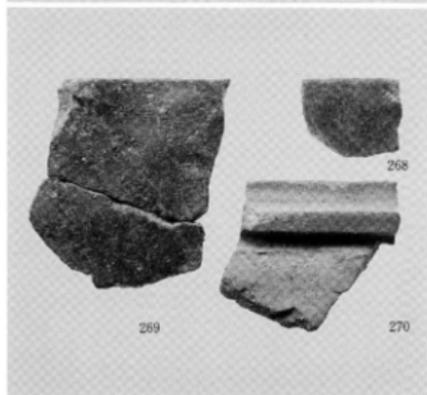
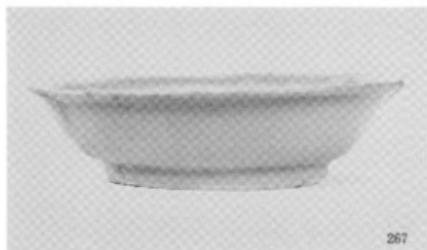
SD10 (222・223)、SD11 (224~226)、SD12 (227)、SD13 (228~232)、SD14 (233)、
SE 4 (234・235)

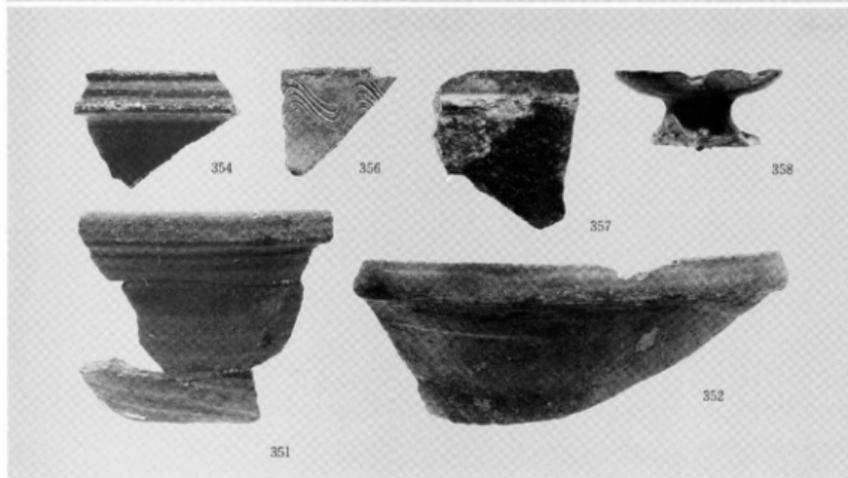
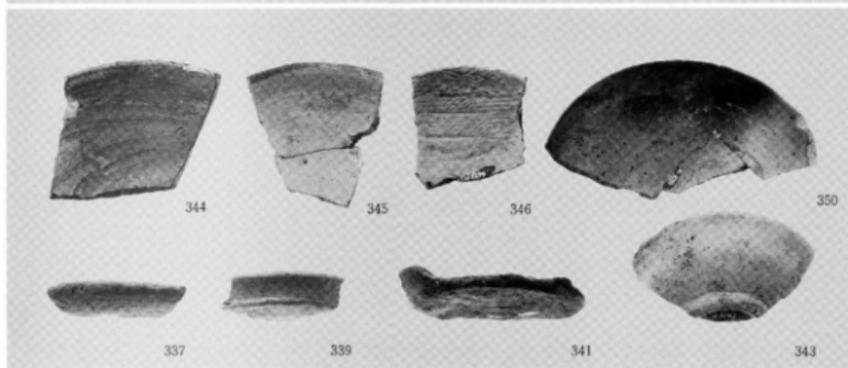


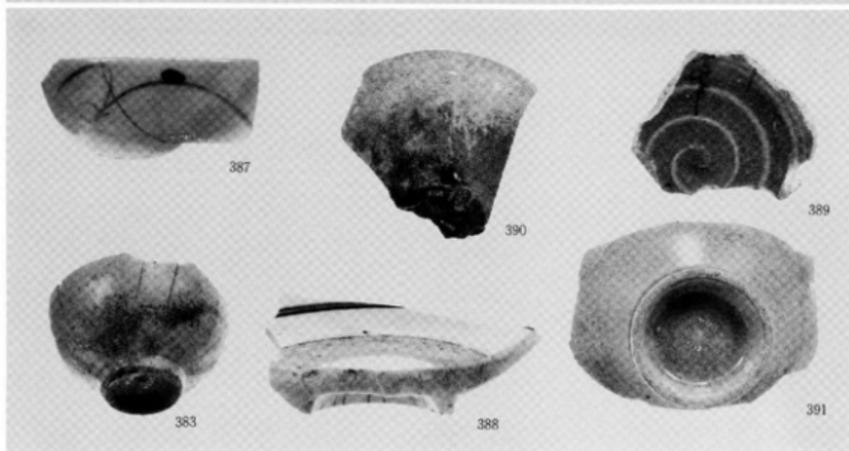
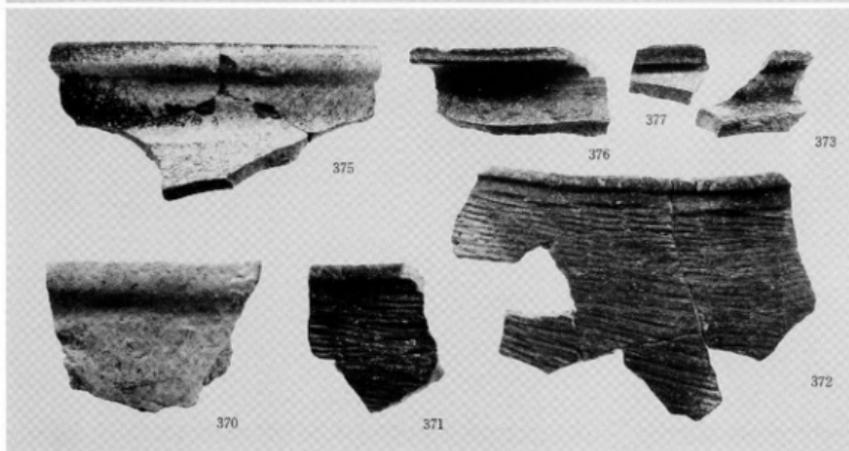
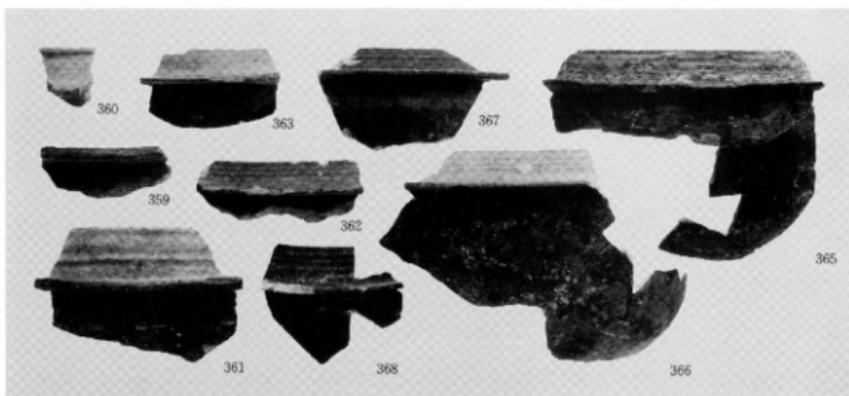
SE 4 (236-240)、SE 6 (241-244)、SK 5 (245・246・248)、SK 6 (247)、SK 7 (249)、SK 8 (253)、SK 9 (252)、SK 10 (250)、SK 12 (254)

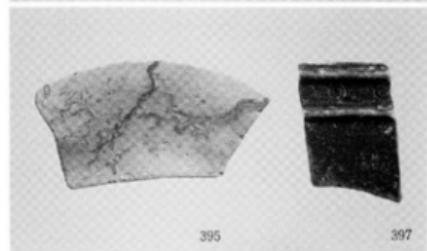
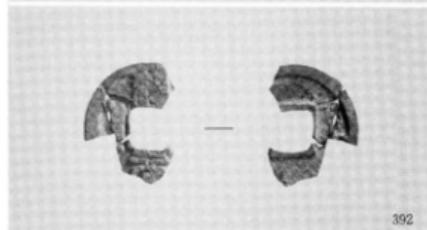
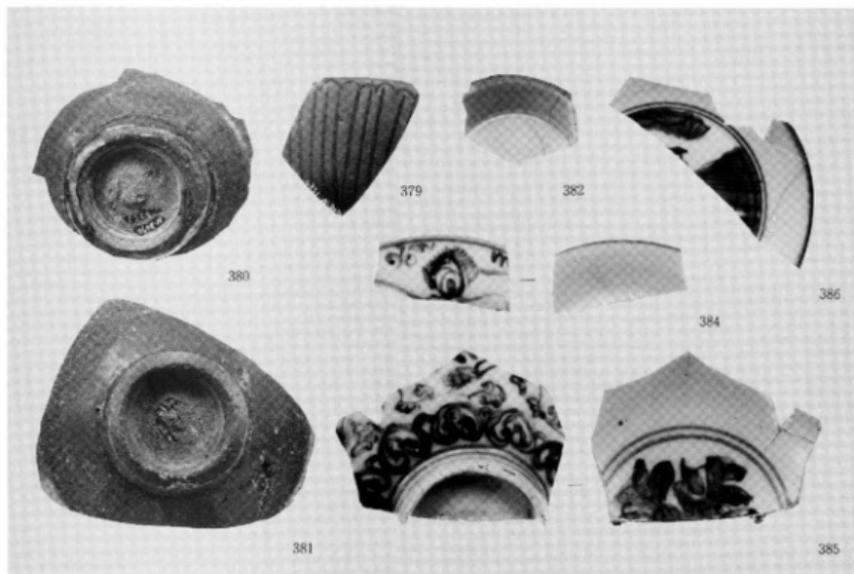


SL 1 (255~257)、SL 2 (258)、SL 3 (259)、SL 4 (260~262)、SL 5 (263・265)









第4調査区包含層 (378~386・392~394)、第5調査区包含層 (395)、第6調査区NV1 (396)、第6調査区包含層 (397)

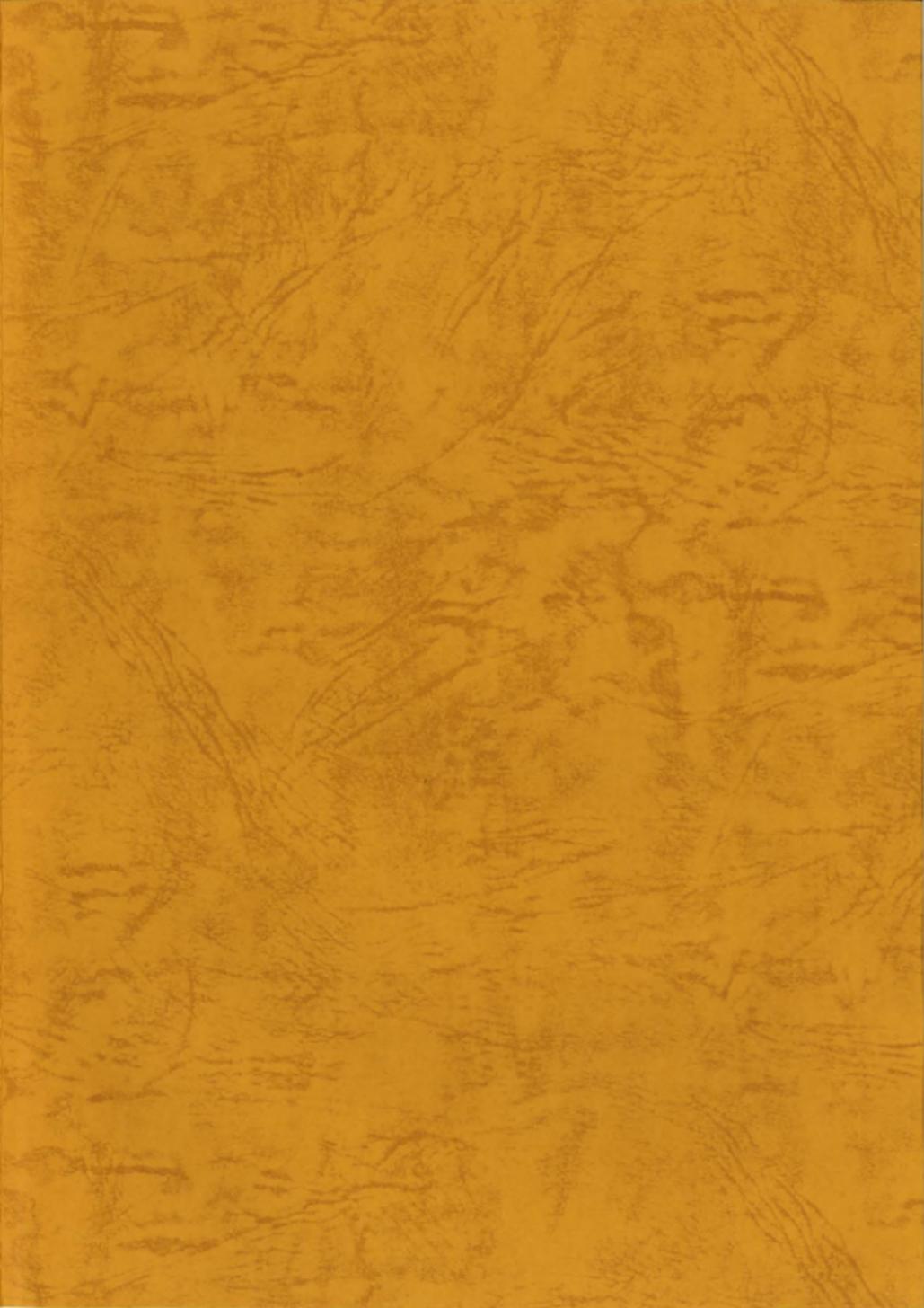
大阪府河内長野市

天野山金剛寺遺跡

1994年3月

発行 河内長野市遺跡調査会

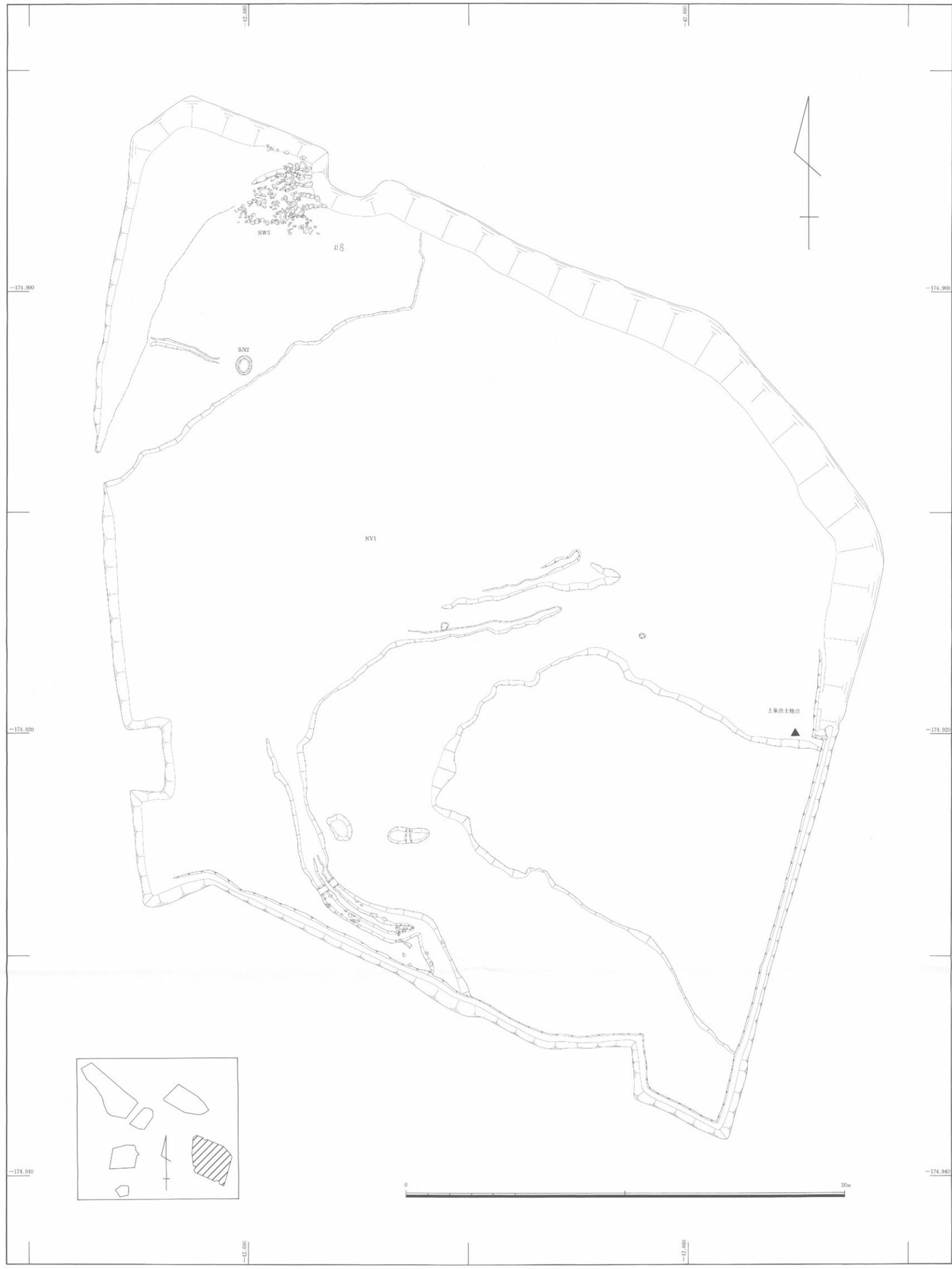
印刷 中島弘文堂印刷所



天野山金剛寺遺跡 付図



付図1 天野山金剛寺遺跡遺構図(1/100) 第1調査区(上層・下層)・第2調査区



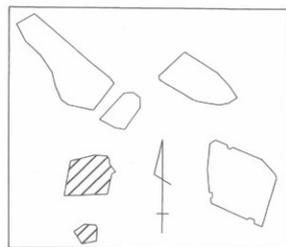
付図2 天野山金剛寺遺跡遺構図(1/100) 第3調査区



付図3 天野山金剛寺遺跡遺構図(1/100) 第4調査区



第5調査区



第6調査区

